



龍と虎の巻

評釋博多小郎浪枕

山田美少丞

本間文庫
文庫 14
D 246







文庫 14
D 246

はしがき

此やうな作ながら、積年の苦辛のうへの此著述、ことに「博多小女郎浪枕」をまづ斯う評釋したのは是までのあらゆる文學者に右「博多小女郎」は難解のものとしてされてしまつて、何人からも綿密なる評釋を加へられなかつた、その不遇に對し、捨て置かれぬ念に鼓舞された故である。あへて、その難解の荆棘をば切り開いても見た。切り開きそこなひも或ひは有らうか。斯道に忠實なる諸君の嚴重なる批評を待つ。

卅五年の十一月

美

妙



評釋博多小女郎浪枕

近松門左衛門著
山田美妙評釋

上の巻

(本文) 船を出しやらば夜深に出しやれ。帆かけ見るさへ氣にかゝる。長門の秋の夕ぐれは、歌によむてふ文字が關、下の關とも名に高き西國一のおほみなと。北に朝鮮、釜山海、西に長崎、薩摩瀉、唐わがからんだの代物を、あさな夕なに引き受けて、千艘いづれば、入る船も、日に千貫目萬貫目、小判はしれば銀いねが飛ぶ、金色こんじき世界も斯くやらん。沖に何待つ檣垣作、十四五端の廻船に、船頭、水手みづては胡

服着て、足ふみのぼす梶まくら。四五人の乗り衆ども、やぐらの上につつくつく、そよと波おと、ふなかげに 心を付くる蚤取りまなこ、もの案じがほも煩すいたる 中にかしらの毛剃九右衛門、うまれば長崎、國なまり。

(評釋、一) 船を出しやらば。

「船を出しやらば」から「氣にかゝる」までは小唄の文句で、こゝでは船頭どものうたふなうたと見るべきである。その文句、さして理解に困難らしくも無いゆゑ、こゝでは釋にも及ぶまいか。

まかし、文の裝飾の一法として注意すべき點について、些しばかり云ふ事が有る。

さて此冒頭も作者近松翁が船歌を出した、その下心は何かと云ふに曲全體の事件が海上生活に就いてゐる、それをあらかじめ心に含んで居る所から、即ちその前おき、もしくは下染めといふつもり

で海上生活に縁の有るもの、それを掲げ出したのである。

こゝに云ふ下染めは即ち支那小説などで云ふ襯染、その語と大抵同一な意味の語である。修辭法の一として、此下染めと云ふ事は、非常に大切なものである。強ひて性質を抽象的に云へば、凡そいはゆる形容の語句は悉く下染めと云つても宜しいのである。

ひろく例を引いて云へば、物凄いかもふきを形容するとして、さて明からさまに只物すといと云つてしまへば、些しの興をも覺えぬが、それをさうせず、形容して云へばすなはち婉曲にして、何か他の物又は事を引き來つて、なるべく物凄いかそのおもふきを深からしめるやうにする、これが即ち襯染なので、つまり染め物師がまづその原色たる色に染めて然るのち次第に、目的とする所の色に到着する杯がすなはち右云ふのと同じ手段で、襯染の語もそれらから意味を引き來つたものである。

歸するところ、それ故、いかなる文、句、又は語るにもせよ、形容されるべき文、句、又は語に對する形容の文、句、又は語として用ゐられた場合には夫等の文、句、又は語は悉く其意味においての下。だめである。一步を進めて云へば、讀者をしてやがてその、形容された文、句、又は語の眞の意味を明亮に且敏捷に會得せしむる段に於いて、それら下染めは絶大なる力を持つので、すなはち文の死活もほとんどそれに權力の主なる部分を握られて居るのである。

むかしからの文學大家で此點に特長を持たなかつたものは一人もないと云つても宜しい。

ひるがへつて云へば、それゆゑ、卓絶した文士となる條件の一は必らず此特長を持たなければ爲らぬのである。

多くの卓絶した點の中において、近松翁は實によく此特長をとなへた人で、此「博多小女郎浪枕」の冒頭などはその一例に過ぎぬが、

他の、その諸作物の中にも思ふさま自由自在に翁は其特長をほしいままにしたので、何年を経てもその作に生氣の有るのは此特長のいたるところでもある。

(評釋、一二) 歌によむてふ文字が關

此句については云ふべき所がなかく有る。文字が關、又は門司(驛として文字とも書く)は豊前國企救郡でむかしから有名なる船がかりの所である。

さて近松翁がいかなうな心をもつて此句を作つたものであらうか、それが一つの考へ物である。まづ此句は左のとほりの各様に解釋し得る。

歌によむてふ文字が關、即ちむかしから歌人が和歌に咏するといふ文字が關、又は歌人が和歌によみならした文字が關、これらが一方向からの解釋である。

まかし、それでは意味がわからなくなる。
歌人はむかしから文字が關を決して和歌によみならさなかつた。
文字が關、又は下の關は決してむかしから名所として和歌に多く用
なられなかつた。文字が關、又門司が關は決して勿來の關、又は逢
坂の關が歌人の手によつて和歌に用ゐられたやうに用ゐられなかつ
た。おしつめて云へば、文字が關、又門司が關はほとんど和歌に用
ゐられなかつたのである。

斷言を右の如く付けた所で、然らば、近松翁の右の句は、扱何と評
すべきものであらうか。

和歌に用ゐられなかつたものを宛がら用ゐられたものゝやうに云
ひ做した句で、それが、あるとすれば、二言に及ばずその句は無實
を述べたのである。

必要によつては無實を述べてもさし支へない場合ひも、なるほど、

有る。まかし、こゝには無實を述べる丈の必要が有るか、と、是は
敢て是非とも問はなければ爲らぬ。まかし無い、どうしても無い。
既にその必要が無いとすれば、その無いものを用ゐなし、云ひ做し
たのは疎漏である。句の巧妙不巧妙はさて置いて、土臺から只無法
といふより外は無い。

われくの敬愛すべき近松翁の作品に對して、決してわれくは
狭い、おのれの一斷定にのみ放言を任せてしまふのみが先人に對す
る後進われくの義務でない。われくは右云つた所をば右云つた
所として、更にみづから己れを責め、おのれの解釋がまだ誤まつて
居はせぬか、それとも足らぬ所がありはせぬかと再考しなければ爲
らぬ。

假りに前に行なつたわれくの斷定と解釋とが不當であるとして、
さらに、然らば、どう解釋したものかと煎じ詰めたところで、實に

つぎにゑるすより外は無さうである。

文字が關の文字といふ言葉、近松翁が只軽く、ほとんど無意識とも云ふべき位に、只、歌といふものゝ縁語として考へて、すなはち前に歌と出したまひ、すぐ、其、歌といふものにどうやら關係の近くありさうなものと其文字といふ語を見做して、すなはちそれを右の句に右のやうに用ゐたのもあらうか。

まづたく是より外に施すべき解釋は無いのである。まかも、此解釋はその句もその句、翁の句ゆる平凡作者のと同じやうに一概に蹴おとせぬとして、なるべく翁の眞意を（もし、有るならば）酌み知らうと勉めて漸く見出だし得たところの、即ち、いはゆる餘程の最負目をもつての解釋なのである、云はゞ、十分翁の句に安目やすめを賣つての解釋なのである。

まかしながら、最負目をもつての其解釋として、その解釋が眞に翁の眞意を得、穿つたものとしても、残念ながら、さてわれ／＼は尙それならばさうで又追究のうへに追究して一槍見舞ふべき點の有るのを見る。

敢て問ふ、何ゆる翁は文字といふ語をほとんど口軽く、只ほとんど無意識と云ふべきほどに用ゐたか。かくの如き口軽、及び無意識は果たして眞面目なる文士の所業として、さうとみづから宣言しても些しも疚しいところは無いか。

われ／＼は斷じてさうでないと思ふ。

歌といふ語と文字といふ語と全然縁の無いものならばまだ／＼罪は淺いのである。まかしながら、さうでない全體の意味において、歌と文字とは元より離れて居るものゝ、さて歌といふ其物は多くの場合ひ文字といふもので記録し寫し出されてあると云ふ先入の思想は必らず何人の腦にも印刻されてある事實で、歌といふ語を單純に

聞かせられた丈では、たとひ、文字を聯想せぬとしても、さて文字と既についけ出された以上は先入の思想さへ既にくあるその方へ心は必らず重く傾いて、歌といふその語と文字といふその語との意味の聯絡をば必らず著しく心中に付けるのが一般の人心の普通である。たとへて云へば、翁の右の句に用ゐられた歌と文字とは殆ど油と火もしくは火薬と火といふほど緊密な關係を持ち合ふ語同士なのである。すでにそれはと緊密な關係を文字が歌に持つとする。まからばそれはと緊密な關係の有るものを只軽く、ほとんど無意識に用ゐたといふ事實は果たして作者の不注意、不謹慎、もすこし手強く云へば無法、亂暴ではないか、と、斯うわれくが追究するやうになるのも實にやむを得ぬことではないか。

以上、翁の右の句を綿密に評論すればどうしても右のとほりになる。それ故、とにかく吾々は翁の右の句に對して、翁はその一句に

不謹慎不細心であつたと斷言することの餘儀無い所まで行かなければならぬ。

要するに、此不謹慎は實に近松翁の全體の作品をつらぬいた一大短所で、ひとり此曲の右の句がさうなのではない。此點において、われくは飽くまでも今の、一般の世論にさからふ。

今の、一般の世論と云つたところが、何もさて、それが其然るべき例として示すことは出来ぬ。今の文學界はまだ近松を深くく究めるまで成長せぬ。近松に對して、肉をえぐり、骨を削るほどの批評を出さぬ。

只出たのは阿諛の評のみである、阿諛、まかもしはれ無い阿諛の評、近松が光風霽月の心胸を有する君子ならば正に其不當の、むしろ買ひかぶつた佞辭に對して、勃然として怒るか、赧然として耻ぢなければ爲らぬ評のみである。

今の世評は其眞實よりも近松を過稱する。今の世評は近松の痘痕あばたを悉皆笑靨みくほと見る。われくは云ふ、近松に澤山の、比類すくない笑靨は元より有る、まかし、それ残らずが笑靨では無くて、笑靨より無論痘痕がその實近松の作品にも多いのである。と、又われくは云ふ、まかし、近松の巧者はそのたまく見せる笑靨が他の百作家のを掬ひ集めたのより趣味が有って且いちじるしく目立つやうにならしめた此一點である、と。此一點の巧者は近松その作品の一魔力として、たしかに人目を眩惑させた、ある程度まで。繰りかへす、われくは、重ねてもく、ある程度までと。深刻なる批評をまだ被らなかつた時代の間だけは無上光明を發射するやうに見られて、近松ゼ、グレットの威靈が白玉の帝座を占めたでもあらう。まかし細微なる講究や解剖をも施さず、みだりにさう帝座を只無條件のものに、云はゝオムニポテント的に近松をして占めさせる事ならば、

それは實に只威力に打たれてひたすら盲従をのみ事とする奴隷とよりはかは云へぬ。少なくもわれくは——われくの固陋か、頑迷か——まださう盲従するまでに頭を低げることが出来ぬ。われくが敢て出来ぬのではない。われくをしてさう頭を低げるまで近松の眞の長所を指摘してわれくに教へを賜はる人がまだ無いのである。無い、まかし、それはまだなのであらう。決して此後もではあるまい。然り、此後もでないのをわれくは希ふ。

今は只それゆる希ふといふ丈にして、今は只われくの唯我(?)の私見を奔騰せしめて、筆を又こゝに立てなほして、重ねて又前云ひかけた所に立ち戻つて云へば、實に近松巢林子その人は不謹慎なる筆をその著作の全般に亘つて取つた人であると云ふことを更に大聲で繰りかへさなければならぬ。その如何ほどの程度まで近松が不謹慎なる筆を取つたかと云ふ眞の事實は此書冊、今後の頁によつてわ

れくはそれを讀者に示すこととして、こゝには夫をさうと假定して置き、さらに近松がそのやうに不謹慎であつた事の可否について辯無くて済まされぬ。

元祿文學に對する精微なる批評が明治の、この、三十何年、文運隆盛とか稱する今日、なほ全く出ぬ。なるほど元祿文學を稱美した人はあつた。が、その稱美は空にであつた。元祿文學の翻刻も出版になつた。が、その翻刻は骨董品としてあつた。筆を取つて新文學をと云ふ人は有る。元祿を十分回顧した人はやはり無い——無い、元祿文學を稱へた人その人の中にも、斯くて近松も西鶴も骨董品として只空に稱へられるのみとなつた。古佛なるほど只その時代の煤で光つた。その光りは煤の光りである、黄金のではない。

われくは此放言(と、もし云へるならば)を眞面目でわれくが云ひ得るほど古文學の研究に冷淡な、今日の文學世界をわれく

は實に悲しむのである。近松は天才と聞くや否や、然り、近松は天才と認めると公言して恥ぢぬ文士が有る。西鶴は非凡と云はれるや否や、まつたくの事、西鶴は奇才であると大聲で云つて怖れぬ學者が有る。

敢て問ふ、いかなる證據をそれらの諸君はわれくに示して、近松や西鶴が非凡たり、天才たる点を挙げられたか。

事實の眞實、それをばわれくは何の恐れる所も無くて白狀して云へる。で、眞實を云つて見やうか。曰く、近松等を非凡とする諸君の立證は皆無である、と。曰く、いかなる著述で諸君はそれらをわれくに示されたか、それも皆無である、と。曰く、一人が何か云つて他が何となしに應じた丈である、と。

われくは久しくそのたしかなものが出るのを待つた。まかし、たしかなものが出るほど古文研究に熱心ではない文學世界で、實は、

あつたのである。あらはれた大敵を逆撃するのは張り合ひが有る。今われくは逆撃するほどの大敵を持たぬ。玄からは、われくが先づ立って叫んで見るか、よしや張り合ひは少なくとも。敵が有りもせぬのにひとり只仰山に立って騒ぐこと、ある意味から云へば、怯者も多くはその類である。われくは怯者か。よし、さう云はれたところが構はぬ。只私見を奔騰させる。然らば必らず敵か味方かいづれなり出るであらう。

さて、近松に對するこれまでの世評である、その世評の多くは前云ふ如く痘痕をもほとんど笑靨と見た。さいはひに近松その人がもはや死んだ人である丈まだ宜しい。生きて居たならば却ってそれらの盲辭に、或ひは、全くあやまられかねぬのである。それでなくさへ好い加減近松その、それだけの才氣は其現存中において、われわれが今云ふ如く不謹慎を恣にしたのである。

西鶴はほとんど無茶といふべきほど文士として當然服従すべき文法及び修辭法に服さなかつた。かれは夫に服さぬ丈の定見が有るのでなく、只、只男らしく服するといふ事をしなかつたのである。西鶴については今われくは詳言せぬ。只こゝに相手とするのは近松である。

近○松○は○社○會○と○共○に○服○す○べ○き○修○辭○法○に○は○す○こ○ぶ○る○不○服○従○で○、
又○反○比○例○に○か○の○れ○の○専○ら○に○す○る○修○辭○法○に○は○從○順○で○あ○つ○た○。只、かう
ばかり云つては曖昧である。さらば今些しくはしく、――

近松が淨瑠璃を作るにあつては細心注意を怠らなかつたとは何となくその以來の人の云ふ説である。玄かし、一概にその説はわれわれには受け取れぬ。その文には無数の疵、疵玄かもよく彫琢を行ふ一心を持ったならば大抵の人ならば心付くべきものとしか思はれぬ。云はゞ小疵、とも云ふべきものを持つ。それらを大きな數で數

へて比較したところで作全體の完全なる点から見て、割り合ひにその疵は多い。要するに、投げやりに書いたのである。決して、どこまでも細心にしたのではない。

其投げやりは寧ろまたその純粹の和文における不完全の智識によつて増大された。一々は示すに及ばぬが、近松は純粹の和文を十分理解しなかつた。その大體をば理解したかも知れぬが、文士として語句を用ゐる以上はその當然の義務として、必らずまづ知るべき其文（和文ならば和文）の法則その他必須の注意すべき所を彼れは十分たしかに知らなかつたればこそ無法な用ゐかたを諸所に行なつた。その不完全の智識が——なまじひ天才の有るだけに——人目をくらすす丈の奔放をさはめて、人の目を眩ました。薙刀を水ぐるまに回はすのが必らずしも武術としての薙刀の達人ではない。まかし、水ぐるまに回はせば達人と、世の多數には、見えるので、近松の多く

の文句は、薙刀を武術としていなく、曲藝としていある。かれに天才の餘るほど有つたのは決して争ふべくもない。が、その天才が却つてむしろ一見した丈の技術に彼れを巧みならしめやうとし、またそれで彼れを増長させ、つひにその和文における智識の不完全はその不完全なるまゝで押しとほさせてしまつたのである。

と云ふと近松を只けなすやうに聞こえるか知れぬ。が、決してさうでない。

近松は、それゆゑにこそ、天才である。

それが萬人の誰をでも天才であらしめるのではない。まかし、近松の天才はその奔放によつて認められるのである。彼れは無我夢中に天才を感得し、その自由自在の萬能力を自覺した。で、天才の婆娑たり翻々たりする儘にならしめて、それに修飾的拘束を加へて、その璞をしてなは多くの光りを發射させやうと云ふことには氣が付

かなかつた、随分惜しい所の有る人であつた。一理一道をつらぬいて小成に安んずると、萬劫前進の勇氣がますますはすむのとの相異は實に此邊から生ずるのである。なるほど天才、それゆゑ拘束されがたい。が、拘束するだけされて、それを只やぶり切るのではなく、それを解き、もぬける、それが眞の天才の、絶頂まで大成したところである。近松はやぶり切つたのである、解き、もぬけたのでは無い。天才ではある、まかし無上無比、神とも云ふほどの天才ではまだくはないのである。

(評釋、三) 小判走れば銀が飛ぶ

小判(金)が走る、銀が飛ぶ、すなはち商賣の取り引きの多いのを形容して云つた句。これと似たやうな句は近松以前にもあるが、眞正の、此句は近松の創作である。もつとも、創作と云ふ丈で、さして珍重すべき句でもない。わづかに取るべき點はその句のこしら

へ方がさすが金銀の出入りの忙がしいおもふきを示して居るといふ一點である。

(評釋、四) やぐらのうへにつつく

此句は非常な難句である。何ゆゑと云ふに、句の肝心たるつつくといふ語、その語に對しての、明亮な解釋をばなかく一言や二言で與へ盡くせぬので。

すこし逆のやうではあるが、句全體の大意だけを先もつて與へて置き、然る後つづくの解釋に及ばさなければ爲らぬ。然らば、その大意は何かと云ふに、前の四五人を承けて、すなはち四五人の男どもが櫓の上に居た、と、只斯う云つた丈である。

然らば何ゆゑ奇妙きはまるつづくといふ語を近松は用ゐたのか。そして、その語の眞の意味はどうなのか。

それが一言で盡くせぬのである。

此つ。つ。く。つ。く。には河竹默阿彌翁も首をひねって、わからぬとのみ云ってしまつた。三遊亭圓朝および談柳樓燕枝も斯ういふ語の穿鑿にはなかく、深く通じて居たが、やはり分からぬとて匙を投げてしまつた。

字の形ちどほり、もしくは語の姿どほりに近松のものを解釋すれば、さすがに近松其人が中々の天才であつた事とてなみく。の淺々しい考察では逆もその眞意を知ることがならぬ。此つ。つ。く。つ。く。を考究する前、まづもつて近松その人はすべて感情を代表すべき音、その音の鑑識には絶大なる脳力を有したといふ一點に深く、注意しなければ爲らぬ。

われく。の此私見を大方の博雅は何と迎へられるであらうか知らぬが、われく。は今此書において世間に向かつての、われく。の、そもく。始めての發表として、たしかに右云ふ如く、即ち近松は感

情と音韻との微妙きはまる關係を頗るよく感得して居たらしくわれわれには思はれるとの一條を公言する。

論は又や、長くなるが、なるべく摘要しては云ふ。

すべて自然を音韻で寫さうとする場合ひには如何ほどの程度までわれく。は吾々の文字、もしくは同音で寫し得るものであらうか、これは今もつて未決の問題である。そして、是まで慣用上自然の音韻を寫したものととして汎く人類の間にこしらへられた言語はもとよりすべてその自然音にや、わづか、模倣された丈のもので、決してまだその眞を寫したものでない。われく。は内外出版協會發行の「言文一致文例」にすこし此事について述べてもかいたが、たとへば猫の啼き聲をニヤア（な行の音）として寫し、牛の啼き聲をモオ（ま行の音）として寫す類、慣用上それでさし支へなく爲つて居るやうなもの、その實猫の發音が決してな。行。の。でもなし、又牛のが

ま。行。の。でもなし、それらは又別の音なのである。それらが扱別のいかなる音であるかは言語哲學研究を目的とした此書でもなし、今此書において、云は、岐路にわたるやうな詳説を行ふにも及ばぬ。とにかくニヤアをもつて猫の音を寫し示すに至つたのはわれゝの祖先の教へ残した所丈なので、即ちわれゝの上古の祖先は少なくとも猫の發音がそれらわれゝの祖先たる人類の耳に聞き取られた結果において、何ものゝ音よりま。行。の音に極はめて近いありさまを現はすといふ所に着目して、すなはちな。行。の發音をしてそれを寫すとしたものである。牛のモオも亦同理で、が、まかし、それは只寫した、只似た音で寫した、と、これだけである。な。行。の發音に際して人類の口中一切の筋、肉、乃至鼻孔、乃至舌、凡そ夫等が取る形状がいかがやうであるかと嚴重に解剖學の上から觀察して、猫のその時のそれらも其やうであると確かに同一の點を認めて、はじめ

猫の啼き聲を人類のな。行。の文字で寫して差しつかへないと抑もわれわれの祖先が斷定したのでない。彼等は理を問はなかつたのである。漠たる結果の、多少の類似を漫然同一と見なして便宜只な。行。を猫の音に配したのである。便宜である、只である、それゆゑ實は虚である、無稽である。今を十九世紀の、二十世紀のと云ふ、が、それらの贊評的稱呼は歸するところ俗人を喜ばせる丈のもので、眞に研學に志すものに取つてはそれら十九世紀や二十世紀の語を贊評的に用ゐられては全く冷汗が出るのである。科學の研究が此頃の世紀に至つて大に進歩したと、いかにも云ふ。なるほど無線電信もできた。空氣の氷結もできた。それらは如何にも偉業である。偉業、まかし幼稚なる過去の學術界に只對照させて云ひ得る丈の偉業たるに過ぎぬ。宇宙の秘密はまだく。無數である。われゝの學術は宇宙の秘密を開いた程度から云へば最下級をもまだ爲し遂げぬのである。す

れの觀察に觸れておのれの心に感じたところを更に音韻、もしくは音韻の代表（即ち文字、即ち文章）で巧みによく寫し取り、それを其儘、決してその些しの趣味を害すること無く、たしかによくおのれ以外の他人の心に觸れしめて、さておのれが感得したのと同量の感覺を十分たしかにその他人の心に感じ及ぼさせるやうにする、そして、さう爲し遂げる、それが天才の天才たる所である。

既にさうとすれば、天才その人が或る物事をおのれ以外の他人に紹介するにあたり、おのれといふ中間に立つ者、即ち媒介が只いちじるしく多くその場に立ち入ったやうになる時は紹介される他人そのものが紹介によつて接着すべき物事、それにその他人が對しての理解力、それがどうしても弱く、薄くなる、決して、たしかに明白には爲らぬ。なせと云ふに、他人その人と物事との間に紹介者たる隔て、それが有る故に。然るところを、隔てがさう隔てらしくなら

ず、他人を直ちに、その儘物事のすぐ前、傍へ連れて行って、他人をして直ちにその物事に接せしめるやう十分よく行ひ得た時は、さてその時の他人そのものゝ感情はどうであらうか。云ふまでも無し、おのれが直ちに現の物事に接した丈の心もちをばたしかに得る。すなはちそこに文士といふ紹介者は有つても、決して文士そのものが邪魔にならぬ。すなはち文士は巧妙なる、むしろ神靈とも云ふべき筆力で他人を引いてその接着すべき物事におのづなら接着せしめたので、文士の本能は始めてそこで十分になつたのである。

そこで文士がその文一つで自由に他人をさう導くことを得る、そのためには、活擒縱ふたつながら自由自在なるべき筆力を必らず先もって持たなければ爲らず、そしてそのやうな筆力はどうして得られやうかと云ふに、つまり物事と他人との間になるべく、文士の己れといふ隔て、即ち墻壁を置かぬ様に志すことで、そして、そ

れがためには自然の物事をもそっくり、その儘、否、成るべく／＼そのまゝ寫しあらはさなければならず、いよく／＼そこに至って自然の音韻とその音韻のあらはす意味とひのづから研究しておのづから感得し、必要次第玄かるべくそれを窮所々々に應用するやうになるのである。きはめて手近く、且きはめて簡畧に例を挙げれば、日本語にも他の外國語とみなしく音韻そのものに既に大かたのその意味が有る。かきくけこ、即ちか行を語頭とする日本語の大多數は強大、劇烈、勇壯、殘酷、其他類似(其他は畧する)の意味を持つ、すなはち、かつ(勝)かたい(堅—難)、かく(掻)、かざる(飾)、かる(刈)、かなふ(叶)、きる(切)、きざむ(刻)、さしる(輓)、さばまる(窮)、くるしむ(苦)、くいる(潜)、くゝる(括)、くぢる(挾)、ける(蹴)、けづる(削)、けす(消)、こむ(込)、こるす(殺)、こたへる(答)、こばむ(拒)の類、即ちこれである。

論證の附隨條件としてひとり一方のか行をのみ示すに止めず、それと殆んど反對なるべき意味のな行も有るとの事をも示さなければならぬ。そしてな行の意味がか行のと氷炭相反くとの事實がこゝに現れればあらはれるほどか行の意味の特殊な點もまた明白に讀者の理解にのぼるべきである。

すなはちな行の日本語その多くは粘着する状態をあらはす意味を持つ。そして、既にそれが粘着する状態をあらはすまゝ、又いきはひ、場合ひによつてその意味が他に轉するとなれば、決して粘着といふ事實に人の常識の伴なふべくもないところの彼の頑固とか。木強とか、およそ其の類すなはちすべて堅々しくあるべき意味のあらはれる語とは決して爲らぬのである。例すれば左のとほり、

ぬく(援)、ぬふる(眠)、ぬふる(砥)、のく(退)、のばす(延)、
なめらか(滑)、なれる(馴)、にこやか(嬌)、にる(煮)、ぬめり(滑)、

以上實に一二の例であるが、その一ツとして急劇な意味のあるものはなく、粘着（と、云へば、云ふべき）意味のみのものである。その粘着の意味のことに深くある證據には若し文章口語において、それを極はめて急忙な場合ひに用ゐるとなれば、おのづからの必要として別に意味を強める語（*Emphasis*）を附け加へなければ爲らぬといふ、實にそれは是である。前例の中から又更に其例を拾へば、つぎのとほりである。

たとへばぬく。（抜）などがそれである。ぬくの其語だけの意味には決して急劇の意を含まぬ。例をもし示すとすれば、すなはち「釘を抜く」、「齒を抜く」、「油を抜く」、「草を抜く」など、その眞實の状況は多少急劇なところが有るものであつたにもせよ、なほ其語抜くは決して急劇即ち咄嗟の意味をあらはさぬ。さらに踏み込んで解説を示すとすれば、それが其儘では極はめて急劇、咄嗟の意味をあ

らはさぬ證據には其儘をたゞちに用ゐたのみでは十分云ひあらはしを遂げることが得ず、もし十分な云ひあらはしを遂げさせるといふことならば、更にその語の外になほ他の、意味をつよめる語を付け加へるほどの必要が、さて、實にそこに在ることである。前のぬくで云へば、たとへば「草を抜く」でも殆ど急劇咄嗟との意味は出ぬ。「力をきはめて」、「いきはひよく」、「急に」、「全力を盡くして」、「見る間に」、「たちまち」坏。例すれば此類の、意味を強める作用の有る他の語句をその「ぬく」に相ともなはせたとところで、始めてやうやく意味がたしかに強くなるのである。

言語に關する一切の理を考究するとなつて、此事實は非常に、非常に緻密な研究を施すべきもので、これを——ひとり日本語のみでなく——ひろく云つたところで世界の各人種の言語の實例に徴して歸納もし、演繹すれば、明きらかに此發音によつて意味のいろく

相違するとの事が實に人類の自然として存在するおもふきも知れるのである。

然らば、前擧げたぬくの意味をつよめて云ふ場合ひの有るとして、さていかやうに強めるかと云ふに、ひき(引)を加へる手段も有る、うち(打)を加へる手段も有る、またその他なほ些しは有る。右のひきやうちを文法上いかやうに呼びなすべきかそれは頗る多く辯を要することであるが、それらは今こゝの問題外で、こゝでは只右のひきがぬくと結び付いて、すなはちひきぬく(また轉じては、ひんぬく、ひっこぬく)、このやうになるとの事實を例證として示せばそれでよろしいのである。

以上、歸するところ、言語と音調との間にはきはめて緊密な關係が有るとの事を、ほんの形しる丈の、簡單きはまる例にしてわれわれが示したのに過ぎぬことで、偕又われくは只此原理の講釋のみ

に久しく筆を勞しても居られぬ。それら委細は委細で、別の方面の著述においてやがて他日説くこととして、さてこの文、この説明、それらに斯う意外な紙數をつひやしたのも全く右云ふとはりの事實、即ち言語その意味と音調との關係の緊密なのを概説した其爲めである。と兎にかくこゝで假定して、云はは是からの文に對する其前おきは大概こゝらで済んだとして、さて改めて是から更につぎの論定を示さなければ爲らぬ。曰く、――

文學者としての天才は必らず言語の意味とその音調との緊密な關係に熟通して居るので、それは素より彼等が必らずしも師傅や書典によつて教へられたのでなく、只その自身の腦をぐるしめくいた結果、つひに自から感得したものである。

近松はたしかに右云ふたとはり、さうして遂にさう感得した人の一人であつた。つづくつづくは其感得の一例である。

近松は其一生のある場合ひに鬼といふものゝ泣き聲を書きあらはさうとして大に心をくるしめた事が有ったといふ。事實の眞偽はとにかく、傳説は全くの眞理を含むのである。その傳説では斯う、曰く、いはゆる鬼(すなはち赤鬼、青鬼として畫に描く鬼、その類)の泣き聲を何と書きあらはしたならば宜しからうかと様々煩悶した末に彼れ近松は遂にくわんくわんといふ一語、それを得て、やうやく満足した、とか。

すなはち近松は鬼が悲しげに泣くありさまをくわんくわんで示したのである。すなはち、「鬼がくわんくわん泣きわめく」と、このやうにでも云ひなしたところで、漸く物すこい、鬼の泣き聲があらはし得られるとしたのである。

われ／＼は此點に關しては全く一言も無い、いかにもと近松の技倆に服する。今まづそれを説明する。然るのちつ。つ。つ。つ。

鬼そのものは想像によつて假想された丈のものである。それゆゑ、もとよりそれに泣き聲の有るべき法は無い。無いが、まかし、假想にもせよ、何にもせよ、既にそれを一個の動物(と、もし云へずば、活物)として書きあらはした以上は動物又は活物のおのづから持つすべての機能と大かた同様の機能が又やはり鬼そのものに具はつて居ると假定することもできる。そこで、動物、又は活物、その多くは悲哀に對して泣く機能を持つ。それ故、鬼もそれと同様な機能を持つ、と、又假定し得る。そして、「鬼が泣く」との假定的形容も當然また作成し得る。

まかし、鬼そのものは假想として定められた條件として、人類もしくは人類以外の各動物、その、すべて、悲哀に對して泣く機能の有るものゝ泣くのは、よしそれが同じく泣くとしても、別にちがった泣き方のものと定めなければならぬ。もしもさうでなく、鬼を

のものゝ泣き聲が他の動物などの泣き聲のいづれかと同じ、もしくは同じやうであるとするれば、鬼そのものが、さて泣いたとして、いかにもさながら他のいづれかの動物、即ちその鬼の泣き聲と同じ泣き聲の他の活物が泣いたのと變はつた所も認められず、すなはち鬼といふ特殊なものをいかにも特殊と感得せしめる所の條件において不明瞭といふことにある。

その不明瞭を免かれるにはどうするのか。

たゞ一の手段が有るのみである。すなはち鬼以外の一切の動物類に全く無いらしく想像される泣き聲、そのやうな泣き聲をもし作り出すことが出来たならば、すなはち、とにかくそれを以って假りに鬼そのものゝ泣き聲と定めても、さてさう定めた聲が他の動物のと同じものであるとの感じを流石起さぬことになる。

くわんくわんは如何にも此要求に應じ得る。

日本人の耳で聞いたところで、くわんくわんの泣き聲は兎もかくも、その音聲をでも出すと考へられる動物は一つも無い。無い、それゆゑ、くわんくわんはそれら動物の泣き聲と逆もく聞き得られぬ。ところで、鬼が、何か知らぬが、くわんくわんといふ聲で泣いたと云はれて見ると、そこに實踐的智識の缺乏は在るにもせよ、想像的智識といふもの、それによつて、いかさま鬼の泣き聲はくわんくわんといふのもあらうか位の想像はどうやら形ちづくられるのである。すなはち近松が鬼の泣き聲としてくわんくわんを選んだのは如何にも其當を得たとでも云ふべきで、他に、いくら考へても、鬼の泣き聲らしく聞こえる語を其外に色々考へてもわれわれには一つも思ひ付けぬのである。

またも傳説を取り次ぎするやうであるが、近松はくわんくわんの外にわんくわんといふのをも一時採用しても見たといふ。まかし、わん

わんは日本人の習慣ですでに犬の聲となつて居る。わんが前にも云つた如く、すでに犬ならば犬といふやうな、人のよく知つて居る動物の聲をそのまま鬼のとして借り用ゐたとすれば、扱それを聞かされた段になつて、いきはひ其聲の舊からの持、主たる犬そのものを其人は聯想する。聯想してその人は斯うおもふ、鬼の泣き聲は犬のやうであると。さうなれば、鬼と聞いて鬼だけの印象を脳に受けるよりもむしろ犬だけの印象を脳に受けて、鬼の、たとへば凄いとかな怖ろしいとかいふ様子を感ずることが無くなつてしまふ。それゆゑ、わんくで鬼の泣き聲を示しあらはさうとしたところが、逆もそれは目的を達せぬのである。

以上は實に修辭法の問題としては重大な件。まかし大かたは云ひ盡くせたらしい。さて、まかし又、そのわんくを、それ故、近松が捨てたとして、さて又くわんくといふ音を何ゆゑ引き抜いてえ

らんだか。

くわんくはそれを耳に感ずる程度において、正に律で云へば、雙盤、これに當たる。雙盤、これを手近く例にして云へば、凄味の有る叩き鉦の音で、即ち閻魔王の供養のとき（一月、七月の十六日などに）佛寺で叩く鉦の、その一種の、きはめて烈しい音である。文學者として、また詩人として、否、むしろ云はゞ美術家として、近松がこれら雙盤の樂音の凄味をよく理解し、それを巧みにくわんくわんの形象文字に配して、すなはち凄味の當然無ければならぬと考へられる鬼そのもの泣き聲とまで、さても扱も逞ましくなればよくもく逞ましくなる想像を奔騰させて、よくその正鵠に射中てるに至つた此眞の事實は全くその後世に生まれたわれくをして謹しんで襟を正して咀嚼し且つ推察せず居られぬやうに爲らしめる、すなはち彼れ近松の天才の、實に無比の發揮である。

こゝの本文のつ。つ。く。つ。く。も亦此例である。此例である、又も又近松がその、われくから云へば羨むべき、豊富の想像を逞ましくして、思ひどほりに用ゐ得た、實に非常な手際で。もとより吾々はまだ是までの何人でもこれらつ。つ。く。つ。く。やく。わんく。についてそれを非常に重大な件と見て、今われくが費した數千言の其何分の一なりともそのため正確なる、且熱心なる辯を費した人の有るのを殆ど聞かぬ。まかしわれくから云はせれば、是までのそれら文學家、もしくは批評家は只その用語の奇異なのを只おもしろくなく思ひなして、只冷淡に看過したのである。何ぞ知らん、近松の苦心は實にそこに在ったのを、その苦心は扱そのまゝ人に知られず味はられず、只埋没のみして居たのである。

つ。つ。く。つ。く。は其音のみを只觀察したところで、いかやうの意味にわれくの耳に聞こえるか。

つ。つ。く。つ。く。はた。行。の音とか。行。の音と相結んで出来た語である。然らば、其分子たり原素たるた。行。の音とか。行。の音とのわんくの意味が共にその語に結び付けられたところで如何やうかの意味にはたらいて居るのである。

前にか。行。の音の意味を述べたやうにいろく例を多く示して、た。行。の意味を又さらに説明する丈十分な餘裕をわれくは此書物において持たぬゆゑ、まばらく概畧だけを擧げるとして、さてそのた。行。の意味を云へば、およそ下のやうである、――

た。行。とか。行。とは最もよく、双方共通する音である。(一)。

それゆゑ、た。行。とか。行。とは多くの場合ひ、互ひにもつともよく似た意味を持つ。(二)。

こまかい双方の相違をば省くとして、右二種の音の、その主なる性質とも云ふべきものを云へば、即ち右のとほりである。さらば次

ぎに些しその譯を……

手みじかく云へば、發音にあつてか行は顎のはたらきを本とし、た行は舌のはたらきを本とするが、まかし、た行たる舌のはたらきは其變じて他の音となる場合ひに於いてはもつともよくか行たる顎のはたらきと爲りやすく、同じく又か行たる顎のはたらきは又た行たる舌のはたらきと爲り易いのである。此事はすこしばかり吾々は日本大辭書でも説いたが、今とにかく極はめて見易い例その一二をまづこゝにも擧げることとする。

奇怪といふ語、その奇は云ふまでも無くキ即ちか行である。まかしながら、「暫らくのつらね」杯演劇において美術的口語としてその奇怪を云ふことになる、妙なもので、それを眞正の音すなはちキと云ふよりも却つてチと云ひなした方が眼前多數の觀者の耳に十分たしかによく響くのである。今の俳優市川團洲などは實に此骨法を

よく知つて居て、おのづから此かた兩行交換の方法を用ゐ、随分大聲で喝破する時など、「君君たらずといへども臣臣たり」と云ふところを全く只「チミチミたらすといへども臣臣たり」に近く云ひなして、そして又さう云つた方が却つてキミと云つたのより尙よく人の耳に通徹する。團洲は此のごとく音の相通を實に知つて居るのである。まかし彼は一の藝術家、一の美術家で、それを知つて居るのは當然でもあらう。藝術の思想は殆んど無い人でも自然の理法には扱おのづから教へられて、おのづからた行とか行とを相通じさせるのである。日本の東北地方、すなはち青森附近になると、去年をキミチンと發音せず、全くチヨチンと發音する、今日をケフと發音せず、全くチヨオと發音する。ひとり青森邊のみでない。東京邊でもである。小兒の玩具のメンユ、それを東京人は或ひは又メンチといふ。以上すべてか、た兩行の共通を示す事實である。

さうして、これが日本人のみでない。われくの隣國たる支那でもさうである。北京、その本音はべ、キンであるにも拘はらず、今の支那人其殆んど多くはべ、ナンと云ふ。さらに彼等をして日本語のナンキンマメ（南京豆）と云はせて見ると、彼等の多くはナンナマメと云ふ。甲、その音はカフ、もしくはハフである。まかし、今の彼等支那人で、それを又チャツと云ふのは珍らしくない。是等もまたか、た兩行の共通を示す事實でないか。

尙まだわれくは他の例をも引き得る。
 ファミリイ、ライクテスの有る英、獨あたりの今日の言語に右のやうな例はあまた有る。C、GHなどがか行の音となり、又は行の音となるのは右二ヶ國の言語を學んだ人の既に知るところでもあらう。われくの南隣の比律賓もまたさうである。それでもまだ不十分

ではあるが今は先右だけにして、さて前云つた丈の、前もつての注意を貯へて、やうやくつづくの、さて何と取りとまつていは無いが又髣髴とした意味を探究すれば、正にそのつづくは只何となく、た行とか行との双方の意味を、只何となく髣髴たる間に調和させたやうとして、その、是どとは捉へられぬが、まかし堅いやうな、動かぬやうな、不活潑であるやうな、遅鈍であるやうな、懶惰であるやうな、因循であるやうな、頑固なやうな、凡そそれらのおもふきを臚げに示して居るのである。深く心理の上から云ふにも及ばず、堅忍といひ、不動といひ、不活潑と云ひ、遅鈍といひ、懶惰と云ひ、頑固といひ、すべてそれらは其性質において殆んど近いとも云ふべきものであるとは常識に尋ねたところでもおのづから分かる。近松が文に施すはなれわざは實に是まで甚しい。その意味の曖昧な中に、さて曖昧でなほどこやら髣髴たる意味をもほめかした。

「四五人の乗り衆」、すなはち四五人の乗客が櫓のうへにぢつとして居たのである。四五の乗り手が幾分か海上の事として心のおそれに縮み氣味になつて居たのである。四五の乗り手がおづ／＼して居たのである。四五の乗り手が因循に不活潑になつて居たのである。すなはち凡そ是等の意味、これらをすべてつ／＼／＼は含み持つて居るのである。

つ／＼／＼は實に右の意味なので、全くむしろ飛びはなれ過ぎたとも云ふべき近松その人の筆の翻弄なのである。すこぶる勉めたつもりではあるが、われ／＼の以上の説明はまだ或ひは此難句を十分説くのに不足であつたか知れぬが、只まかしまた讀者の十分の咀嚼をもひとへに／＼吾々は望みもする。

(評釋、五) そよと波おと

そよとは波音といふ名詞が當然持つべき動詞に接する副詞と見る

べきである。まかし動詞は略されて、句中には無い。が、有るものと見て置かなければならぬ。

(本文) 「こりや、うんたち。まだ市五郎、三藏が船は見えている。心

元なかばい……………」

(評釋、六) うんたち

うぬ (己) たち (達) の轉訛。すなはち、おのれらの義。頭首た

る毛剃九右衛門がその部下たる船頭などを呼ぶ語。もとより長崎の訛り言葉として出されたのであるが、とにかく其語は尊大きはまる、その尊大なので毛剃が部下に對する威力の隆々たるおもふきがありあり顯はれる。多く語を費さぬところが近松のいつもの巧手と見るべきである。

(評釋、七) 見えいる

是も長崎の訛り言葉として出された。見えいるのいはぬ、また其る

は。ん。の音便、すなはち見えいろは見えぬらんの義、すなはち見えぬであらうとの意である。今の京阪の方言も現によくこれに似て居る。すなはち今京阪で見えぬやろ、又は見えんやると云ふ、それら皆これと同じなのである。

(評釋、八) 心元なかばい

此ばいも長崎の方言である。ゆゑ、又はに由つての義。すなはち、心元無いゆゑ、又は心元無いに由つての意。

(本文) 心たまぎりや夜ざとくなつて、みだまんじりともせない。

首尾よからうば筑前さなへこの船まはし、柳町のしやうく〜ていども請け出して、かみがたさなへつツばしる。表の間借り切つた上唐人、船頭がなじみ、筑前まで乗せなけりやならぬといふ。仕おほせにや筑前へは行かぬ舟、かど出よかく、よか便り聞かうばいおもての乗り衆呼うでわたい。はなしどもして紛らさん。

(評釋、九) 心たまぎりや

たまぎりやはたま(魂)きゆれば(消)の義。そのたまきゆるは心が消え入るとでも云ふ意で、すなはち前の心元云々の句意を承け、心配で心が消え入るやうになつた故との意。

(評釋、一〇) 夜ざとくなつて

こゝに示したやうに夜ざとくと昔から書きならはしてあるものゝ、その實は誤まつて居る。よざとくと云ふ、其音は誤まつて居るのでは無い。が、そのヨを夜と宛てたのが誤まつて居るのである。

要するによざとくはよ(寢)さとく(敏)で、よ(寢)はねる(寢)の古言いぬが一旦畧されていとなつた上、さらに又音便をもつてや縦行に轉じ、さうしてよとなつたものである。それを夜と宛てたのは連絡の意味の近いところから、つひうつかり古人が誤まつたもので、さして仰山に咎め立てするほどの失でも無いが、まかし只その

儘に看過ぐし得る事は爲らぬ。

(評釋、一一) みだまんにじりともせない。

みだは甚だしい俚言で單に身は即ちおのれはどの意味を示すにとい
まる丈で、そのだは只いはれなく身といふ名詞に接した後詞(と、
もし云へば云ふべき)のやうなものである。まかし、これをまだの
義に解して見れば一寸さし支へないやうに思はれるが、それは宜し
くない。まだと解すれば、即ちまだまんにじりともせぬとの意にな
て、その裏にはやがてはまんにじりとするとの意がおのづから籠もる
やうになる。まかし、こゝには文の必要上どうしてもそのやうな意
味を残しこもらせるに及ばぬところで、凡手ならばとにかく、近松
ほどの大手腕がそのやうな不必要を加へる譯は無
まんにじりは目を閉じて眠るありさまを形容して云ふ語、まかし、
その語の意味の目方はことに目を閉ぢるといふ方に近く、眠るとい

ふ方にはむしる遠いと云ふ事を忘れては爲らぬ。

ついでゆゑ、その語原を云はなければならぬ。勿論是までまだ何
人でも此語原を搜つた人は無かつた。われ／＼は日本大辭書編纂の
時にはまだ其語原を示すことがならなかつたが、その後になつて、
やうやく分かつた、と云ふ譯は、まんにじりその語はまどろみの轉訛
であると思ひ付かれて來たので、まどろみといふ語を人が全く心に
知らぬものとして、いかなる思想の發動がいかにやうにま、ん、じ、
りの數音を所謂目睡の意に用ゐるやうに爲らしめたかと問へば、そ
れに對する答へ、その正確なるべきものは一つも無い。つまりはま
んじりは全く只まどろみといふ語をよし形ばかりにもせよ、腦裏に
あらかじめ刻み込んで置いたのがやがて副詞的の變化を生ずるとな
つてその儘多く形を變へず、只やうやくまんにじりとなつたもので、
もし此説を至當とすれば、その假名づかひも些し變はつてまんにじり

とならなければ爲らぬ。

(評釋、一二) 首尾よからうば

これも長崎訛りとして出した語。首尾好くばの義。

(評釋、一三) 筑前さな

さなは邊、すなはちあたりの義の俚言。

(評釋、一四) 玄やうく〜てい

此語の本義は未詳、あるひは遊女の隠語かとも思はれるが、それも

たしかに斷言は與へられぬ。

(評釋、一五) かみがたさな

此さなも前の筑前さなのさなと同じ語。

(評釋、一六) 門出よか〜

よかよか、これも長崎邊の方言、よしよしの義。

(評釋、一七) よかたより

よかは前のとやはり同じく長崎邊の方言、よき(善、好)の轉、よかたよりは、それゆゑ、よきたより、すなはち、いゝ便りの義。

(評釋、一八) 聞かうばい

ばいは前の(評釋、八)心元無かばいのばいと同じ語。聞かうばい

はそれ故、聞かうと思ふ故の義。

(評釋、一九) 呼うでわたい

わたいも長崎邊の方言、たまはれ、くだされなどの義、もの事を請

ひ求める意味の義。

呼うでは呼んでの音便。このやうな音便は足利時代から盛んに行

はれて來た。狂言の文句にもたのうだ人抔とある、これも其例であ

る。

(解譯) 以上起首から紛らさんまでの全體の意味を譯せばつぎのと

はりである。「船を出しやらば」の唄は譯文とすべきものでもなからゆゑ、そのまゝ音く

「豊前の國、頃は秋の夕ぐれ、文字が關と世に云ひつたへられて、名の高い西國第一の大港は北に朝鮮釜山海、また西には長崎や薩摩瀧などを控へて、そこから唐、阿蘭陀の代物を引き受けて、出る舟も入る舟も非常の數、取り引きのはげしさは金銀にも羽が生えて飛ぶといふほどで、黄金世界と云ふ所は斯うでもあらうかと思はれさへする(以上、書きたし)。

「さて沖にある掛かり舟は何をか待って居てもするか、檣垣のある造りで、十四五端の船體でもあつたらう。船頭や水夫は胡服(ごてら)を着て、足ふみのばし、四五人の乗客は櫓のうへに縮んで居る。一寸した波音や船のかけにも透かさず心を付けるのが有るかと思へば、又物おんじ顔なものも有る。その中で頭の毛剃九右衛門といふのは長崎のうまれとて、言葉は國訛りで、『こら野郎ども、まだ市五郎や三藏の船は見えぬのだらう。心元無くてな、氣もめいるやうで、夜はとかく

目が覺めやすくなつて、おれはまんじりともしない。首尾が好かつたならば、此舟を筑前あたりへまはし、しやうくいてい共を請け出して、上方邊へ逃げていも行くか。表の間の上唐人は船頭のなじみでは是非筑前まで乗せてやらなければ爲らぬ客とか。いゝや何の決して！何かうまい事をぬうちは筑前へ行かぬ此船だ。よし、出掛けるとしても門出の愛でたいやうにとな、さて其好い便りを聞きたいに由つて、表の客を呼んでくれ、咄しでもして紛らせやう。』

(本文) あつと答へて平左衛門、呼びにおるれば、そのあとは鬼とも組むべき男ども、あんべら取つて敷かすやら、茶出しに唐茶(たうちや)つまみこむ つぎ出す色はうすけれど、頭をかしらと敬ひし、禮儀ぞなかまの花(はな)香(か)なる。

(評釋、一二) 茶出し

出しは煮出し汁を出しとのみ云ひなすのと同じたぐひで、既に入れ

た茶になほかをりを出させるため更に茶の葉を附け加へて入れる、その稱へ。今の世でいふ口茶のたぐひと思へば大かた宜しい。

(評釋、二二一) 唐茶つまみこむ

ことさら唐茶をつまみ込むといふのが即ち相手を珍客として禮意を表したるもの。

(本文) おもての乗り衆小町屋惣七、生得慇懃みやこそだち、よばれて櫓にわりひざし、「船頭なじみに押し付けての便船、御たづねなくとも御挨拶をす筈、無禮御免」と手をつけば、

(評釋、二二二) 船頭から御免までが小町屋惣七の語。

(本文) 「あゝ堅い」。同船いたし、一つ釜の食事たべるは一門同然。さあ御手あげられ。この五人はわれらが仲間。他事無う咄しあかす中、近付きになつて御はなしなされ。斯う申すそれがしは長崎もの、九右衛門と申して、そつといたいた唐商賣。これは同國彌平

次と申す仁。つぎは上方、小倉屋傳右、難波屋仁左。そのもと呼びに參つたは 阿波の徳島平左衛門と申して 髪さかやさいたさるゝ。船中の事かき心おかずと御たのみなされ。さて其元はいづく、いづかた。」

(評釋、二二三) あゝ堅いからいづかたまでが九右衛門の語。

(評釋、二二四) そつといたいた

今いふちよつとした、又はちよつといたしたの古言。さして大きくもない義、又は、はかない義。

(評釋、二二五) 唐商賣

支那と貿易すること。此ころすべて支那を指して唐と稱へ、さらに又、もろこしとも稱へた。

(評釋、二二六) 上方……小倉屋……難波屋……阿波……徳島

以上口まかせに地名をもつて直ちに人の名を宛てたもの、さうして

各地の名を列べると共に何となく船中に各地の人が居るとのおもふ
きが現れて、これも一の修辭上の美である。

(評釋、二七) 船中の事かき心おかずと御たのみなされ。

事かきは事缺きの義、すなはち不足の義。船中の不足に對しては何
なり心を置かず御たのみなさいとの意。すべて、九右衛門がねんご
に惣七をわしらふおもふき。

(本文) 「われらも生國長崎、せがれの時分、親に連れて生まれ所を
引き越し、京すまひ。父が名は小町屋惣七と申すも
の。賣買のため筑前へは 毎年の折りのぼり、どなたも船中平ぐわ
い御めん、よい御ちかづき求めし」と 禮儀しまへば膝くづれ、こと
ば直せば寐腹這ひ、はや千年のなじみほど 心とけたる朝霜の お
く底もなくなりにける。

(評釋、二八) 親に連れて

今の言葉で云へば、親に連れてとすべきところ、まかしこゝは
連れてとするのもまた止むを得ぬ。

近松が文を練った様子はこゝをつれられてとせず却ってつれてと
したのであり、現れる。

親にといふ係りならば、只穩當であるといふのみの點で見た丈で
もつれられてと被動にすべきである。まかし、さう被動にしたとこ
ろで、奈何せん、その句を口にするに爲って、それこそ舌が纏れる
とでも云ふべき程難澁な語勢となる。

すなはち、おやにつれられて生まれ所をとる。つれられてとう
まれの、双方類似した音のみの重複となる。心して發音したならば、
さてそれも出来ぬことは有るまい。心せぬか、さなくば又舌のまは
りの鈍いものには逆も旨くは行きさうもない。いはんやその物は歌
曲の一たる淨瑠璃、すなはち聲を主とさへする。であって、それら

の困難の附隨する語句を甘んじて用ゐると云ふ事は到底無理なことである。語句の美をのみ考へる事を知つて音律に配しての可否を知らぬ作者ならば只些しの心も付かず只その語法の穩當といふ點をのみ考へて必らず此やうな所は近松の、このやうにせぬのである。記臆すべき例ともなる眞事實ゆゑ、今ついでに思ひ出したまへをこゝに書き付けて置くが、今から數へれば既に十餘年の前であつた。今の末松博士や福地櫻痴居士などがまきりに演劇改良の聲を揚げたことがあつた。そのころ二三の人たちは頻りに在來の歌曲にまで手を入れて改竄しやうとした。まかし、それらの人々、否、その時の夫等二三の人々はまだ今日のそれらの人々はと慎重な注意を得て居られなかつたと見えて、改竄しやうとした、と云ふのを空想にのみ止めず、ほとんど改竄の上の歌曲を世に公にしさうにさへした。その一例を挙げれば、謠曲安宅から來た、彼の勸進帳、その初めの方に

ある「時しも頃はきさらぎの」の句、その中の頃といふ語はその前にある時といふ語と重複であるゆゑ、改めて「時しも春はきさらぎの」、斯う改めたらば宜しいと、實にくゝそれら二三の人士が眞面目で論じた事實さへ有つた、この類である。まかもその時、それら二三の人士はやはり近松の、こゝに載つた句、おやにつれてを只文法の上からのみ見て、不都合と罵りさへした。おのれの不用意をあらかじめみづから省みず、却つて他を不用意と批難することがそもそも批評家の本分とすべきものか、それらは辯を俟つ迄もない。とにかく明治文學のある一時代、十八、十九、二十年頃は此たぐひの批評家の一種の火焰にいはゆる文學、ことに俗曲は乾かされ、いふされ、縮み上がらせられた。まかし、その時は何をどうと云ふことも無く、又いつか氣も抜けるのも早く、とかくする内、おやにつれて攻撃も只何となく萎縮してしまつた。

(評釋、二九) 毎年の折りのぼり

本文にあつたとほりをわれくは斯くの如くその儘に出したが、その實折りのぼりはおりのぼり(下上)のあやまりである。

◎以上、われらも生國から御ちかづき求めしあたりまでが惣七のとば。

(本文) 九右衛門顔色打ち解けて、「船中のさびしさ 物がたりほど伽になるものは無い。おんどもが二十七の年、薩摩ものと喧嘩したはなし、うそぢや無かばん、聞かッしやれ。九月の七日九日は氏神どんの祭り。本をどりいる、唐兒をどりいる見事なことばん。元かうせん町といふ所で 石五器に一二はい 肝のたばねへ諸はくをいッかけた薩摩二さい、ふとり男であつたばん、諏訪へをどりみが行く行きちがひに ながゝ赤いわしの こじりがくさのおんどもが わき腹さなへ當たるが最期、引ツつまんで壁へ搔いなすらふと

思ふて、こじりを逆手にやツくるり、それはく見事であつたが喃。」

(評釋、三〇) おんども (共) の轉訛、われくの義。こゝでは長崎邊の方言として用ゐた 今も九州にはかいどんの方言が此おのれども

轉訛したものとして残る。

(評釋、三一) うそぢや無かばん うそでは無いゆるの義 ばんは前にもあつた通り長崎地方の方言として用ゐられた。

(評釋、三二) ほんをどりいる、唐兒をどりいる

此いろは前の評釋第七にあるいろとは違ふ。もつとも此いろも長崎地方の方言として近松はこゝに用ゐたのである。

前の評釋第七のいろは推察の意味たるやらんの轉訛であつたが、こゝのは列べとろへて云ふ意味のやら(山やら川やら知れぬ)など

のやら)であつて、すなはち、「ほんをどりやら唐兒をどりやら」の意である。

ほんをどり 唐兒をどりに對していふ語、日本のおどりの義。ほんは本邦、本朝などの本の義。

唐兒をどり 支那風のをどり。

(評釋、三三) 見事なことばん

此ばんは、此場合ひ、であるの義。

(評釋、三四) 石御器に

御器は天目のたぐひ、すなはち今いふ井、もしくは大椀のたぐひ。石を加へたのは木椀に對して磁器の椀をいふ語。

(評釋、三五) きものたばねへもろはくをいっかけた薩摩二さい

きものたばね 肝の束ねの義。肝のまめくもりとの意。何ゆゑこのやうに形容的の語法が用ゐられたかは後の薩摩二さいの條で説く。

(評釋、三六) もろはく

すなはち諸白と書く。にどり酒の稱。

(評釋、三六) いっかけた

引きかけたの義で、すなはち諸白を飲んだといふ意をつよめて云ふ語。これを、まかし、引っかけたの轉語と見るのは悪い。

近松文學をまだ十分眞面目に攻究する所までにならぬ今日の文學世界に對して、このやうな、云は、小さな評論に多くの筆を費すのは稍瑣末に過ぎる事かとは思ふものゝ、やがての未來においては必らず此邊の語の攻究に關して學者の議論は沸騰することゝ豫察されるまゝ、少なくもわれゝの後の人の幾分かの參考に供するため、今とにかく此いっかけたについて簡畧に一二言辯じて置く。

すべて轉語は母語たる原語の音調を受け傳へる。これは人類の殆んどすべての言語世界に殆んど定理として存在する。全くを云へば、

轉語が母語たる原語の音調をほとんど同じやうに傳へるか、どうかはまだ言語學者の完全なる決論を受けたことの無い大問題である。泰西の諸國でも言語哲學はまだ、他の學術と比較して幼稚なもので、その一般の方針さへまだ、渾沌の狀を示して居る、それは夫でやむを得ぬとして、われは只われの考へた丈をもつて、こゝに記したやうな斷定、すなはち轉語が母語の音調を受け傳へるとのおもふき丈をば今まづこゝに發表する。その受け傳へかたに如何なる法則、殆んど靈妙不測とも云ふべき規律がおのづから存在するかせぬかは今この、言語哲學の著述でもない書冊において細かく立證して云ふことは出來ぬ、否、云ふほどの必要は無い。とにかく、われの考へが誤まつて居るならばいざ知らず、もし誤まつて居ぬならば、轉語が母語の音調をある程度までは受け傳へるとの論定は正當であるらしく、そして又その注意を前もつて持つて研

究に掛かつた以上はひろく云つて史學、人類學、心理學、および言語學の研究に一方ならぬ便利も有るのである。

われは讀者に願ふ、どうか姑らくわれがこゝに擧げた、轉語の音調と母語の音調の關係とをわれが只さう擧げたとはりのものと兎にかく一旦御見ゆるしになる事を、そして又われをして直ちに前の論に對する説明、すなはち直ちにいつかけてに對しての評釋、それを行はさせるやう御ゆるしを賜はることを。

さて音調の上から云ふに、いつかけたがもしいつかけたといふ語の、そのひが僅に只いとなつた丈であるとすれば、すなはちいつかけたはいつかけたの音便によつての轉語と見るべきである。

然るにいつかけたがいつかけたにさう轉ずるとして、いかなる双方の音調の脈絡が相つながつて居るであらうと押し進めて考究したところで、實に何のつながりも無いのである。原語の音調と轉語の

音調との間に何の特殊の、云はゞ著しいつながりも無いといふ事實は歸するところいッかけたがひッかけたの轉語で、かならず共に、あるのではないとの證明になるではないか。

さらに、さう他を打ちやぶつたのみにせず、われくの、それに対する解釋をたゞちにそこへ並べて出せば、その解釋は全く今のと飛びはなれて居るが、とにかく穩からしくは思はれる。

われくは解釋して、實に、つぎのとほりにいふ、曰く、——
いッかけたは薩摩二さいの「薩摩」、かよび前にある石御器、その二語に關聯した縁語である、と。

今日金屬を火又は藥液で鎔かし、又は繼ぎ合はせる杯の仕事をいかけ(鑄掛)といふ。まかし、そのいかけの語原は必らずしも鑄掛けといふやうに殊に金屬に限って云つたのではなく、一轉しては漆ぬりの事にも用ゐる。梨子地ぬりのたぐひ、漆を塗つた上に更に金粉

を掛けたのをさへいかけちとさへ云ふに至つた。

歸するところ、いかけと云ふ語はひとり金屬についていなく、また他の物の繼ぎ合はせ、うめ合はせ杯の細工をも云ふに至り、また音便でいッかけと發音もはねるやうになつて、器物の縁に金屬をあてはめた細工なども云ふやうに爲つた。すなはち、はじめは狹義であつたのが、遂にすべて繼ぎ合はせる意味を示すものと爲つた程の廣義となつた。

近松の此本文のいッかけたも此意味のである。

石御器は茶碗とも見るべきもの、すなはちいかけるといふ語には縁のあるもので、そして又薩摩は陶磁器の地、前に石御器と出したその縁語として十分用ゐ得られるのである。

(評釋、三七) 薩摩二さい
二さいは青二才などの二才で、すなはち薩摩のわか者を輕蔑して云

ふ語。

以上、きものたばねの邊から此薩摩二さいまでの意味を云へばつ

ぎのとほりである

「諸白即ち濁り酒を茶碗であふり引ツかけたのが一二杯、それはど
のやうにかと云ふに、たへて云へば、肝のぶめくいらの所へきり
いと浸みあたり、め付け、やうにあつたが、さうそのやうに飲
み酔った薩摩の青二才」

右意味の要たる所をことさらに遠まはしにしての解釋で、もとも
と暴々しく強さうな事實を叙することよて文句もおのづから殺氣立
ツて出來て居る。肝のたばね杯が第一のそれである。いッかけが第
二のそれである。二才が第三のそれである。すなはち近松は巧みに
これら暴々しい句法をもちゐて、巧みに文句を活動させた。まかも、
それがおのれの喧嘩をみづから語る海賊九右衛門の口上としてい

る。精妙の極、さすがは近松と扱われ、も赤心で稱揚するのに躊躇せぬ。

(評釋、三八) ふとり男であつたばん

ばんはやはり前にもあつた如く長崎邊の方言として用ゐられた。その薩摩男が肥滿の人物であつたが、の義

(評釋、三九) をどりみがい行く

みがい、これまた長崎邊の方言として用ゐられた語である。

今も肥前の全體を通して、な行(N)の音をが行の半濁音(NG)と混用する天性とも云ふべき習慣がその地方に在る。

その一二を例すればつぎのとほりである。

肥前邊に今もこんげに、こんぎエに、こぎやアに杯の語が存在する。それら各の語原はと云へば、このやうに(此様に)の轉訛してこないとなつたもの、そのこないにが即ちそれで、それを先づ本

としてこんげになどゝなつた。

右の事實から言語學上のいかやうな着目が出来らるであらうか。

右の事實はこないにがこんげに爲つたといふ事をたしかに示すと

同時に、ないにがんげにと爲つたのを示す。

ないに (N || 不行) がんげに (NG || 才行) に爲つたといふ事は、そ

れを云ひ換へれば、すべて不行 (N) は時としてが行 (NG) に通じ得

ると云ふ、それと同じことになる。

全くのこと、な行がが行ときはめてよく通じ合ふのは世界の各國

の言語に例を徴しても忽ちよく分かるほど極はめて正確な事實なの

である。それらはあまり普通、さして一々證例するにも及ばぬ。

既にな行とが行との共通が右のとほりとすれば、こゝの本文のみ

が、いも直ちに十分解し得られるのである。

みがいのがいの反切によつての反はぎである。

故に、みがいは反切で音便變化を行へばみぎになる。

みぎのそのぎは何か。而も其ぎは半濁音である。

われゝは前にな行 (N) とか行の半濁音 (NG) とは相通する旨を

根論として提出して置いた。さて其ぎを右の根論に照らしたならば

どう云へるか。をのぎたる NG は當然にたる N に爲り得るであらう。

すなはち、みぎはみに爲り得るであらう。すなはち、「をどりみが

い行く」は當然「をどりみに行く」となるであらう。

意味の奥底までの解釋は先づこれではる。

(評釋。四〇) ながか赤いわし。

ながかも亦長崎地方の方言として用ゐられた。

ながか、その語原はながさである。すなはち、こゝの句は「長さ

赤いわし」の義である。

こゝに於いてまたわれゝが提供する一斷定が有る。曰く、――

「日本語のうち、九州地方の二三ヶ國の方言の特質の一として、い横列で終るべき形容詞の語尾を、横列で終る事實が有る。」

右の斷定をば全く實例によつてわれ／＼は立てた。右、ながき赤いわしとすべき句、そのながきといふ形容詞の語尾たるきをながかとする類はひとり近松が寫した長崎のみでなく、現に今日でも長崎とは頗るはなれた鹿兒島にもある。

善き子供、このやうに云ふべき場合ひに善か子供と鹿兒島人は云ふ。い横列で終る形容詞の語尾を、横列に變化して用ゐる例は此とほりひとり長崎邊のみでない。

まかも双方とも同一の理、同一の律に支配されるのである。赤いわし。これは錆びた刀をあざけつて云ふ語、今の人も大抵は

知る。

(評釋、四一) こじりがくさのおんどもが

おんどもは前の評釋第三十の條で解を與へた。

くさの、これが又方言である。くさ、その語原はこちや、すなはちこちら(此方)、すなはら、こなたで、のは普通の後詞、即ち全體の意は「刀のこじりがこちらのわれわれ共(おんども)の」である。原理から云へば、さ行とた行とは相互ひに通音である。

(評釋、四二) わきばらさな

わきばらの邊の義。さなの同じやうな例は前の筑前さなと云ふ所にあつた。

(評釋、四三) 引つつまんで壁へかいなすらふと思ふて

薩摩ものゝ赤いわしの鑑がこちら即ち九右衛門の脇腹の邊にあたるが最期、といふ上の句意を承けていふ句。すなはち、その相手の薩摩ものを引つつまんで、そこの壁へなすり付けてやらうと思つての義。

近松の文才は此邊にも著しくあらはれた。ひつつまんで、かいな
す。これら二つながらの語はどうしても猛勇むしる兇暴の人間の
口にしさうな語で、すなはち毛剃九郎右衛門の風采もその語氣でよ
く想像される。

引つつまむはまだくさはどでもない。かいなするは如何にも暴
々しい。

なするは塗抹で、こすり付けて、その、こすり付けられた所に、
たとへば擦れ落ちた部分がこびり付く、と、此やうに迄想像し得る
ほど劇烈、深刻なる意味を含んだのが此かいなするの一語である。
それだけで、毛刺がいかにどの蠻勇であるかその程度は測られぬと
云ふ事だけは扱測られ得る。文の形容の妙は實にこれらである。

(評釋、四四) こじりを逆手にやっくるり
脇腹へ當てられた先方の鎧をこちらで逆手に取りおさへ、その儘ひ

ねりねちつてくるりと先方の男を投げ飛ばしたとの意。やっは掛け
聲。

(本文) 「他國ものに投げられては 國へ歸つても成敗。死ぬる命は
どこでも一つと 二尺八寸引ン抜いた。こりやんはだゆるなと 又
引ツかついて投げたがの、かどの有る溝石でくさ あたまの皿が
こな小みぢんに 打ちわれた。おゝ、舟では われたと云ふはいま
いましい。あたまの皿が走った。」

(評釋、四五) 他國ものに投げられては 國へ歸つても成敗、死ぬ
るいのちはどこでも一つ

これらの二三句は薩摩ものゝ胸中を述べた。成敗は處罰の義。薩
摩の國風としては他國のものに負けた士人には其負けた罰としてや
はり負けた丈の刑を加へた。

(評釋、四六) 二尺八寸

大刀の形容的代表語。二尺八寸の大刀は決して小さいものでもないが、その小さくない長さのとなへが代表語となつたほど普通にその位の大刀は用ゐられた時代も有つたのである。

(評釋、四七) こりやん

間投詞こりやの轉語。語尾にんの加はつたのに意味が有る。

こりやの末が逼りつまる音、即ちッで示される、それらのたぐひになると、極はめて氣のいら立つた、もしくは慌てた、と云ふやうな、すべて烈しい意味があらはれるが、まかし此本文のやうにんとなると、輕蔑しあなどつたやうな、ふざけたやうな、相手を物かすともせぬやうな意味となる。

近松がこりやとせず、こりやんとしたのは此注意が有つた故で、それがため如何にもその語を發した人、すなはち毛剃が相手を物のかすともしなかつたと云ふ剛勇のおもふきも現れた。

(評釋、四八) はだゆる

ふざける、生意氣に冗談らしく人を馬鹿にする杯の義の俚言。はざくといふ語を語原として出來た語。

(評釋、四九) みぞ石でくさ

此くさは古語こそから轉じた俚言。

(評釋、五〇) 舟ではわれたと云ふは

難破と云ふ意に通ずる所から舟人はわたれるといふ語を忌むとか。毛剃はもとく舟のもの、それ故斯うわたれるを忌むのである。

(評釋、五一) はしつた

舟人がわたれるといふのを忌んで云ふ代用の語。まかも、そのため走つてと用ゐて、又却つてそれが次ぎの血が走るの走るを呼び出す飾りの語となつた。

(本文) 「血が走るいろ、涙が出るいろ。あたま抱へてやとひとにか

るはれ、小宿さなへいんだがの。今でもへばむぎうらしげにそがいにせでも大事なかたん。かみがた衆は氣がよかけん。こがいな事は有るまい」と。まかた交りの高ばなし、皆あんかんと聞き居たる。

(評釋、五二) 走るいろ……出るいろ

これらのいろは前の本をどりいろのいろと同じく、やらの義。

(評釋、五三) やとひど

やとひ (雇) びと (人) の畧の轉。すなはち、雇ひ人。

(評釋、五四) かるはれ

かつぐの轉で俚言となつたのにかるふといふのが既にある。かるはれはそれを被動詞 (Passive Voice) としたものの。すなはち、昇がれの義。

(評釋、五五) 小宿さなへ

さなは前の筑前さななどのさなと同じく、邊、あたり杯の義。

(評釋、五六) いんだ

行つたの俚言。

(評釋、五七) むぎうらしげに

むぎうさ (無造作) らしげにの畧、亂暴にの義。

(評釋、五八) そがい

そのやうにの長崎方言。

(評釋、五九) せでも

せずとももの轉。まなくとももの義。

(評釋、六〇) 大事なかたん

大したことは無かつたらうにの義。なかつたはなかつたの訛り。長崎邊の方言として用ゐられた。

(評釋、六一) かみがた衆は氣がよかけん

かみがた衆は惣七などをさして云ふ語。すなはち、われ、九右衛門の如き武骨ものと違つて、上方衆は氣がよるしい、即ち心が大人

いいであらう、との義。よかけんはよくありけんの畧の轉。長崎邊の方言として用ゐられた。

(評釋、六一) こがいな

前にあつたそがいななどと同じたぐひの語。このやうなの轉訛。

(本文) 「さア、京の御客おはなしなされ。次第々々に所望せん。かみがたは色どころ、定めて深い譯が有る。おはなしあれ」と口々に乗すれば乗って、「されば〜」。親惣左衛門吟味つよく、京大阪ではびたひらなか わが物でわが儘ならず。毎年の筑前がよひ。さひはひに柳町の小女郎とは。そも〜より互ひにのぼり、是非當年はうけだして、女房に持たるゝがてん、持ち約束」と半分聞いて、(評釋、六三) 「さア、京の御客」から「おはなしあれ」までが毛剃の仲間たる一座の言葉。「されば〜」から「持つ約束」までが惣七の言葉。

(評釋、六四) 「さア、京の御客さま (惣七を指す) おはなしなさい。段々に所望します。京は色どころとか。さだめてあなたにも深い譯が御有りでしやう。御はなしなさい」と、一同が口々に乗せる、これに惣七もまた乗って。

以上、「さア、京の御客」から「乗すれば乗って」までの大意。

(評釋、六五) 「されば〜」から「持つ約束」までが惣七の言葉。

(評釋、六六) 吟味つよく

物事に援け目なく、穿鑿だてのするどい義。

(評釋、六七) びたひらなか

びたは所謂びたせん (鑓錢、すなはち鐵製の鹿悪な錢。ひらなかは後世でいふきなかの原語。

徳川幕府の末に至って「一文きなか」といふ語が盛んに行はれ出した。直接にその語の意味を何と與へることも叶はぬが、大意を云

へば、右一文きなかは極はめて小さく金銭を云ひなす時に限って用
ゐられたのであつた。例を示せば、「一文きなかも貫はなかつた」、
「一文きなかの施行をしたのでもない」杯、凡そこのたぐひで、す
なはち是等の文においてきなかは一文といふ少額の金銭をさも如何
にも少額であると形容する氣味で用ゐられたもので、一文の少額た
る意味はそのきなかの有るためにいと強められるのである。
ひらなかは此きなかと全く變はらぬ意味を持つ。

(評釋、六八)

そもそもより

そもそもといふ語は多く文のはじめに用ゐられる所から、つひに一
轉して他の意味も出來て、名詞にもなつた。こゝのは即ち名詞とし
て用ゐられたもので、はじまりの義。

(評釋、六九)

のぼり

のぼりつめの意。またしみの情が高度にのぼる義。

(評釋、七〇)

女房に持たるゝがてん、持つ約束。

がてんは合點、すなはち承知の義。句全體の意は、女房に持たれる
のを(小女郎も)がてん、即ち承知、また女房に持つのを(惣七も)
約束した、これである。

持たるゝがてん持つ約束とその造句法がいかにも切り詰めで、一

語の無駄な遊びことばも無いのは惣七等二人の交情の親密、その云
ひかはし方のきはめて深いおもふきを丁度よくあらはした。

(本文)「あゝ、おッしやるな、聞くまでもない。われらも博多へま
ゐる者。此一座五人が小女郎どのゝ身うけの太鼓。大盡くわつと御
はずみ」と毛剃が起きて膝立ッれば、

(評釋、七一)「あゝ仰やるな」かち「御はずみ」までは九右衛門等の

一座が惣七を冷かしていふ語。

(評釋、七二)

身うけの太鼓

太鼓はたいこもちの畧。身うけの太鼓は身うけに付きまつはり、取りまく帯閑の義。

(評釋、七三) 大盡くわつと御はずみ

大盡は金財にことかゝぬ人のとなへ。句意は毛剃が惣七を假りに大盡と云ひなし、冷かしの述べたもの。くわつと御はずみは盛んにかぶつてくれとの意。すなはち惣七の艶話に對して毛剃がむしろあざ笑ふ氣味。

(評釋、七四) 起きて膝立つれば

毛剃の態度が急に嚴重になつたのを「起きて」の此一句であらはした。此句がこのやうに訝えかへつたため前にあつた冷かしの口上がいと凄味を含んで來る。

(本文) 「ようく、身うけの大盡さま。こりや誰が大じんぞ。小女郎さまの大盡」と 一座ぐわらりと取りまはし、座興も過ぐればむ

つとして、なぶるか、但しあなづるか 心くるくせきたぐる 胸をおさへて。

(評釋、七五) ようく

はめそやす間投詞。時としては冷笑の意もある。

(評釋、七六) 座興も過ぐればむつとして

九右衛門のひやかし方が、よし座興と云つても度に過ぎて居るゆる惣七もむつとして。

(評釋、七七) せきたぐる

せきたぐるの轉語。このたぐるを手繰ると見ては悪い。

(本文) 「えへんく。けさから風邪引き、頭痛いたす。あとのはなしは後刻々々。どなたも是に」と挨拶し、思ひなやみつ、立ちわづらひ、やうく下へ這ひおるよ。

(評釋、七八) えへんから是にまでが惣七の言葉。惣七は冷かされ

て憤り、その座を去らうとの意。

(本文) 「身うけするほど内證があたゝかで、風引いたとは ぞこや
ら足らぬ和郎さうな」と わるくち、にがくち、小倉口より 波お
し切ってくるはや舟。この舟めあての一もんじ、眞黒になつてこぎ
付けたり。

(評釋、七九) 身うけから和郎さうなまでが九右衛門の連中が異口
同音に云ひなした言葉の意味。小女郎を惣七が身うけしたと云ふの
に對して又も加へた冷評。

すなはち、「身うけをしたと云ふほど内證(即ち、ふところ都合)
が暖いくせに、今は風引いたゆゑとて中坐するとは何のことか。辻
褌の合はぬ、どうやら馬鹿げた男ではあるらしい」との義。

内證があたゝかと云ふのは懷中に大金杯の有るとの義。さう暖い
くせに風を引いたとはをかしいと云ひなしたのは暖いといふ事を種

として風邪に掛けて句中につくつた綾である。

(評釋、八〇) わるくち、にがくち、小倉口より。

このやうに口をいくつも重ねたのは近松慣用の文飾である。おなじ
やうな發音の語をそろへて出すのは修辭の一法、こゝの句は即ちそ
れである。

(本文) 九右衛門はじめ立ちさわぎ、「やア、三藏、市五郎、首尾は
首尾は」。「近年の拍子よく、荷物うけとり、金渡し、あっちも機嫌、
こっちも仕合はせ、荷數手形に引き合はせ、わたしましやう」と聞
くうれしさ。「船頭起きよ、かこも來い。荷物うけとれ、まっかせ」
と心もいさむ虎の皮百五枚、仕合はせすれば氣のくすり、海老での
人參五箱で三十斤、仕損するは手まはしのどんす七櫃二百本、舟から
舟へうつしの麝香四十斤、なんと遠見に見付けられはせなんだか。
けもない事云はしや縞縞が十五箱、さりながらむりやうの縹子が十

二九、世話入れた漆七箱、運のつよいはをとゝひの夜の月かけ、照りのよい鼈甲百斤、まづ斯う仕すまし歸りました。天地のめぐみ明星はどな 珊瑚珠が八十粒。手形のおもて是までわたしました。此一通は來夏の割り符、むかへ舟に御出でなされとのことづて」とわたせば取っておしいたいき、「手柄高名、やすみめされ。二人の衆にも酒おませ」。「御めでたいお頭さま、ごはうびをまっかりと……御酒も祝ふてくだされう」とみな本船へ乗り移る。

(評釋、八一) 九右衛門はじめ立ちさわぎ

前に九右衛門が市五郎三藏等の舟の歸つて來ぬのを氣にして居たおもふきが出て居た。こゝの句は遙かにそれと呼應する。

九右衛門はじめとあるゆる他の一同もとの意味が附け加へて又推察される。立ちさわぎとあるゆる一同の景氣のよろしいありさま、その心いさみの狀況がまた推察される迄よくあらはれる。

(評釋、八二) 首尾はく。

首尾を重ねことばにしたのでそれを問ふ毛刺等の心の急ぎ込んで居るのがよく現れた。

(評、釋 八三) 近年の拍子よく

近年にめぐらしく拍子がよくの義。

(評釋、八四) 船頭おきよからまっかせまでが九右衛門の語。

こゝに船頭、かこ其二つを刻みならべたのは九右衛門の語氣がよろこびに勇んでせはしくなつた風情をあらはすためである。

まっかせ、この語の眞の語原は未詳である。只われくの一箇の推察だけを挙げればまっかせはまかせ。(任)の轉語であるらしく思はれると云ふ事をとにかく今述べて置く。元祿前後の小唄の文句に「てんとまっかせがってん」杯と云ふのが有つて、これは「天道任せ、合點」の意である。

(評釋、八五) 心もいさむ虎の皮
いさむは虎の縁語としてもちゐられた。

(評釋、八六) 手まはしのどんす

どんすのどんは鈍といふ語にかけてある。此句は前の「仕そんずるは」を受けて、「仕損じを行ふのは手まはしが鈍、すなはち、にぶい故である」との意をも述べた。その云ふところは、要するに盜賊の、さもく云ひさうに思はれる文句で、近松はこの邊の句からそるる九右衛門等の海賊であるといふ事を匂はし出した。

(評釋、八六) うつしの麝香

舟から舟へうつしと掛けたのは暗に、海賊をはのめかした語である。すなはち、他の舟から品物を他の舟へ移し取るとの意。

(評釋、八七) けもないこと

けぶりもないことの義。そのやうな事は些しも無いとの意。

(評釋、八八) てりのよ 鼈甲

てりのよいは前にある月影の縁語として出された。

(評釋、八九) 天地のめぐみ 明星はどな

明星はどなは大きい粒との形容の意。

(評釋、九〇) 「手形のおもて」から「御いでなされとの言づて」までは故さら商人が取り引きの相手に對する口調に書きなされた。云ふまでもなし、海賊船がわざと海賊船でないやうその言葉にも取りつくるふ所の有る様子を示したものの。

(評釋、九一) 手がら功名休みめされ

是は毛剃が三藏等に對する口上である。注意すべきは其云ひかたに一言の修飾もなく、切りつめに云ひなした事である。應答のいかにも敏捷なのがこれによく示された。

(評釋、九二) 二人の衆にも酒おませ

おませは食せしめよの義、すなはち飲ませよとの意。

此句のつくり方でも毛剃の命令の敏捷なのが示された。

(評釋、九三) 御めでたいからくだされうまでは三藏等の語。まか

もその、前の語との接しかたがいかにも咄嗟であるところは毛剃の口上の敏捷なのに丁度よくうつり合った。

(評釋、九四) 本船へのりうつる

注意すべきは此句である。この句が有ってやうやく始めて、それ迄の両方の應答は本船と小船との間に行はれたものと分かる、すなはち毛剃がその前から待ち焦がれ、氣にした舟を流石よるこび勇んではやく敏捷に迎へ付けて、且すぐに必要の應答をいかにも手早く行なつたといふ事が明白にあらはれ、それまでの一切がすべて大多忙、一瞬間の事であつたと知れる。この類の句法は近松のもつとも得意としたもので、さすが近松だけの事は有る。

(本文) 九右衛門相仕等まねきよせ、小聲になつて、「いづれも見すや。荷物を舟へ積む折りから 乗り合ひの京のやつ、かきだつより顔さし出し、がてん行かぬと思ふつらつき、生けておいたら頬げた叩き、後日の難儀見るやうな。切りころしては大事な門出、血を見るがいまぐしい。まめ殺して海へはたり込め。下人も有るさうな。油断するな」「まっかせこんだ」。「みな衆ぬかるな」。「こゝろえた」と 鉢まき、たすき、尻からげ、うで骨だめし、力だめし、合ひの舳切りを小楯にて 時分をうかひひ、さアこいと やぐらおるゝも忍び足、所は沖津、しほかせの 外は一味のふねの中、聞く人もなし、見る人なし、人は知らじと思ふこそ けつく身のうへ知らずなり。

(評釋、九五) 相仕

事を共にして手だすけとなる者の稱。

(評釋、九六) 生○け○て○お○い○た○ら○頼○げ○た○叩○き○

生かしておいたならば、去やべり散らす、すなはち舟の様子を他に
告げ知らせるとの義。頼げた叩きは口外することを憎々しく云ひな
した語。

(評釋、九七) ほ○た○り○込○め○

今いふはふりこめ。これも憎々しく云ひなした俚言。

(評釋、九八) は○ち○ま○き○、た○す○き○、去○り○か○ら○げ○、腕○ぼ○ね○だ○め○し○、力
だ○め○し○。

これらの數句、さざみ付けるやうに云ひなしたので、その支度の
忙がしげに、且いかにも手早いやうな様子が十分あらはれた。

(本文) 下人がわめくまっかせと云ふ。櫓のうへへをどり上がるを追
つついて、彌平治、傳右衛門、二人が中に取りまいて、宙にさし
あげ、これわいなと、はふり込む浪の、あはれや下人、底の水屑と

なりにける。

(評釋、九九) ま○っ○か○せ○と○云○ふ○

今日の東京近在の俚言、や○っ○と○ま○か○せ○と○同○じ○語○。絶叫の聲。

(評釋、一〇〇) を○ど○り○あ○がる○は○下○人○を○受○け○る○動○詞○、追○っ○つ○い○て○
は海賊どもを受けける動詞、取○り○ま○い○て○、さ○し○あ○げ○、は○ふ○り○こ○む○は海
賊どものうちの彌平治、傳右衛門等を受けける動詞、このやうに動詞
の數が頻繁に、且錯綜して用ゐられてゐるのは混雑さはまる急忙の
修羅場をうつし出すのに最も適當な手段なのである。

(評釋、一〇一) 浪○の○あ○は○れ○や○

あはれやはあわ。(泡)に掛け、すなはち浪の縁語とした。

(本文) 「さア一人は去てやツた。惣七めが見えぬ。さがせく。こ
りやく、こゝに、てんま込みに」と云ふころに、惣七水槲おツと
ツて狂ひ出で、「やア、海賊めら、様子一々見届けた。死ぬるともひ

とり死なうか」と そッぼう、めつぼう打ち立つる うしろへ回
ッて市五郎、すきを窺ひ、つかみ付けば取ッて投げ、……投げられ
ながら 足首をえツかと取り、まッさかさまにづでんどう、どうと
響くなみ音に まくり掛け、大せいかムッてだんばらば、ほとりも
知れぬ海の中、まつさかさまに打ち込んで、さア仕すました、めで
いと笑ふこゑ。

(評釋、一〇二)

そッぼう、めッぼう

そッぼうは素煩など、字を宛てた人もある。語原の、その然るべき
ものは無い語で、いくらか其音調で意味を髣髴たらしめるたぐひの
語である。

えかし、こゝにそッぼう、めッぼうと同じやうな聲の語を重ね出
したのは前にも云つたとほり、修辭上の美のためである。

(評釋、一〇三)

すきを窺ひ、つかみつけば

こゝには句のつくり方について注意すべき所が有る。
すきをうかいひは七言の句、それゆゑ當たり前ならばそのつぎに
は五言のが來るところである。

然るに、こゝではさうでなく、五言のかはりに、ことさら、六言
の「つかみつけば」と出した。

その六言も、その中に母音があつたならば、いして耳に立たず、五
言と甚しく違はぬやう聞きなされもする。えかし、こゝでは母音は
一つもなく、のみか、ッ、カ、ミ、ッ、ケ、バと、ことごとく堅々
しく聞きなされる音のみになつて居るところで、その六言はむしろ
かど立ッてこそ聞こえる、決してなだらかに聞こえず、即ちむしろ
七言にこそ聞こえる、決して五言に聞こえぬ。

故に「すきをうかいひ、つかみつけば」の句はその實人の耳にこ
たへる程度において殆んど七七、或ひは、むしろ、七八ぐらゐの音

に響く。

その本質より長く、まかも堅々しく響かせるやうにした、これが實に詩人として、音樂の耳をたしかに備へた天才として近松を推尊すべき肝心な點なので、この特色は近松一代の諸作にまばらあらはれた。常人は鳴らして聞かせる、まかし、詩人は響かせて聞かせるのである。みるとんの一生の詩の特色はその響きの絶倫なのであつた。

(評釋、一〇四) 取ッて投げは惣七のはたらきを示す動詞。投げられながら及び取りは市五郎の示す動詞。かうして近松は又も動詞をさざみ交せて、いよゝゝ急忙の狀を示した。

(評釋、一〇五) づでんどう づでんどう
この音は惣七を舟中で投げつけたのを示し、後のだんぼらばと呼應させた。づでんどうは堅いものゝ音である。

(評釋、一〇六) だんぼらば
この音は惣七を水中へ投げ込んだのを示し、前のづでんどうと呼應させた。だんぼらばは今いふどんぶり、どぶんなどの原語で、水へ堅いものが落ちた音である。

(本文) 惣七はツと心づき、見れば傳馬のなかくに 物おとせば 悪しからんと ともづな解いて臈をふし立て、悪魚毒蛇の口よりものがれがたき場をのがれ、一反ばかり漕ぎいでゝ、「お、みなく骨をりく。惣七これから御禮申す。この返報は重ねて」と 心いそげば、えいさっさ、えいや運はてんまに在り、おすや臈、うでの ついくだけ、命かざりと

(評釋、一〇七) てんまのなかくに
てんまのなか (中) と掛けた。なかくにはなまじひに、却ッてなごの義。

(評釋、一〇八) えいや運はてんまにあり

掛け聲にえいやうんと云ふのが有る。こゝでは櫓を押し、舟を進めることゝて、即ち、えいやうんの掛けをゑをも示した。

が、さすが近松の筆まめ、えいやうんの、そのうんを直ちに運といふ名詞に掛けた。

まかるに又、「運は天に在り」といふ古來の諺も有る。

近松の奇才はたゞちにその諺をも材料として引つつかんだ、むしろ、轉んでも只是起きぬ。のみか、起き上がるとなつては死は拾はず玉を拾つた。さても偕いかほどの奇才か。彼れはてん(天)をそのまゝてんま(傳馬)といふ。打つて付けの物に掛けた。

まかも又、句の調子は宛然はね上がるやうで、いそいで逃げるには極はめて究竟な書きかたである。

(本文) いひきにて、すいちやゑんちや、すはひすふいてう、ひい

たらこはいみさいはんや、さんそうわうく。「あゝ、おきやくなう慾市どの、その拍子ではをどられぬ。せにだいこの三味線、知らずば知らぬと あたまから云ふたがよい。長崎の伊左衛門さんとは違ふたもの、もう踊らぬぞや。」「それで藝があがる物か。さみせん引きやむまで さアく踊りや」と云ひければ、「いや、なんぼでも踊らぬ。さみせんやめて、こなたも石臼か蹴引かんばかしやれ。」「なんぢや、ちんば引け? めくらと思ひあなづるな。目ふたつ持ったのれらに いざもの見せん」と三味線ふりあげ、聲をあてどに追ひまはす。

(評釋、一〇九) すいちやゑんちや

すいちやゑんちやありるわうくに至るまでの語は唐人の歌謠の音をそのまゝに寫したもので、盲人などが錢太鼓を叩いてうたひなれたもの。こゝでは盲人たる慾市がさわぎ狂ふおもふきを見せるとして

それを其まゝ示したものの。

此邊から局面は前と一變して、まったく小女郎の遊里のありさまと爲ったので、さして前のと際立った境界も無いのは些し不思議に思はれるものゝ、さて近松などの作にはこのたゞひの豪宕疎放きはまる他の例がいくらかも有る。

(評釋、一一〇) あきやく

置けといふ命令的動詞をかさねて用ゐたもの。よせ、やめると差しとめる義。

(評釋、一一一) あなづる

あなづるの轉 あなづると同義。

(本文) 亭主奥田屋四郎左衛門 臺どころから立ち出で、「こりや何ぢや慾市、えゝたしなぬ、大人げない。かぶる共もあがいたらやり手に告げて叱らすぞ。やい、重之丞、けふは小女郎さまの母御の

十三年忌。追善のため身あがりして、小女郎さまは奥の間に經ねんぶつしてござるでないか。ついて居る太夫さまのおやごのこと、線香でも立てうと思ふ氣はなうて、めくら相手に何ごとぢや。」「いえ、わたしどもふたり 錢太鼓けいこして居たりや 慾市の三味線で 邪魔しやりんす。」「その錢太鼓がなはわるい。物の稽古も時が有る。奥へ行て附いて居よ。二人ながらとつとへ行け。こりや慾市おもての二階にさいふの源さまが來でござる。見まふたか。」「やッちや、一角せしめん」と 人の巾着あてにして もらはぬさきの締めくまり、さいふの客へと取りに行く。

(評釋、一一二) あがいたら

あがくはもと馬について云ふ語。あ(足)がく(搔)の義で、さらに轉じて、さわぎ、もがき抔する意義となつた。

(評釋、一一三) きやうねんぶつ

經をよみ、念佛をとなへること。元祿あたりでは主にこのやうに云ひなしたのが、やがて後世になり、經は經、念佛は念佛と只はなしで云ふことになつた。

(評釋、一一四) ついて居る太夫さま

かぶる共がついて居る、即ちかぶる共から主人たる太夫さま。太夫さまは小女郎をいふとなへ。

太夫に對して語氣さへ丁寧な亭主のありさま、却つて元祿時代の遊女の權の強かつたのが是でもわかる。

(評釋、一一五) 邪魔しやりんす

しやりんすは爲さいますの轉訛。さいこといふ、即ち遊廓の通用語。

(評釋、一一六) さいふの源さま

宰府、すなはち太宰府の源さまの義。この、まかし、さいふが次ぎの句に至つて、はし無く、さいふ(財布)と通はせられた。

(評釋、一一七) やちちや、一角せしめん

やちちやは急忙の折りに發する間投詞の一。一角は元祿ごろの通貨の義。せしめんは貰ふといふべきをかすめ取る、又は紛らかし取るなどの義に聞こえさせて用ゐる語、もとより俚語である。句全體の意は、「よし來た、一角取つてやれ」。

此句はいかにも突如たる出しかたである。「源さまがござる、見まふたか」と云はれた前の言葉について、たゞちに急忙の意味の間投詞やちちやを出したのは即ちその場の急忙なのを宛然あらはさせるための近松の巧者なのである。

そして、すぐ「一角せしめん」と云ふところで、その源さまといふ客がいつも錢ばなれよく、一角ぐらゐる人にくれる人であるといふことが現れた。

いはんや、さう騒ぎ出した人その人は名からわざと慾市と付けら

れたほどの者である。上客と聞くや否や、たゞちに貰ふことを思ひひしめく。これらの取り合はせも近松の腕である。

(評釋、一八) 玄めく入り、さいふ

右二語は相共に縁語として用ゐなされた。

(本文) 百年経ねどおとろへは今身のうへに小町屋惣七、門司が關の大難にいのち一つを拾ひ得て、博多へこがれつきしがど、身につくものは手足よりほかには何のあてもなく、ゑるべのかたへも身を耻ぢて、訪ひおとづれば絶えしかど、小女郎がなさけ忘れず、こひしき風の吹きたつる 柳町には來たれども、金銀なければ肩すぼり、おのれと心おく田屋のかどを覗いつ、退いて見つ、あんじたますみ居るふせい、内には乞食と尖り聲、あまりものはやッてしまふた。通りやくとつかうどなり。」

(評釋、一一九) 百年経ねど

小野小町は老年の末に至って容色もおとろへ、榮華の夢もさめたといふ故事、それを句の裏に孕んで此句は作られた。

すなはち、百年といふ、それは老年にまではまだ経ぬが、玄か
いおとろへは昔の小町と同じやうに今わが身の上に見る小町屋惣七、
との義。

(評釋、一二〇) すぼり

すぼみ (縮、萎) の轉訛

(評釋、一二二) こゝろおく田屋

こゝろを置くをおく田屋へと掛けた。

(評釋、一二三) とがりどろ

とげくしい聲。人をにくみのしる時に出すもの。

(評釋、一二三) つかうどなり

これも難語である。が、歸するところ、今いふつツけんどん (突慳

食) と同音の語とかもへばよろしく、すなはち、(云ひかたが) あら

あらしく、とげくしいの義とかもへば當たる。

これをつかうどといふ或る一語と、なりといふある一語との二つ

に見たならばどうかとは一寸思はれもするが、まかし又よく考へれ

ば、この解は「なり」を先もって「である」の義の語、すなはち結

びのことばと自由にきめてしまつて、さて夫からつかうどを解かう

とすることばと自由なきめてしまつて、いはんや、つかうどと云ふ語

にこゝに宛てはまるやうな意味は些しも無いものを。

さらに又これを他の方面から見、「どなり」を罵る義の語と解いた

としても、さて尙またさうすれば、つかうの義がまつたく解し得ら

れなくなる。

(本文) さては早ものもらひと 人目には見ゆるよな。成りはてた

り。まなしたり。此風俗で小女郎に 逢ひたいと 云ふたりとも聞

き入れじ。聞き入れてから小女郎がはぢ。思ひ切つた。顔見まい

と 立ち歸るうしろより、「おゝ、待ちや〜」と重之丞。「これ、け

ふは太夫さんの こゝろざしの日に當たり、施しの一錢」と差し出

しながら、「はア、この乞食はおかひを着て居る」と 顔さしのぞ

いて、「やア、御前は京の惣七さん、なう、太夫さん、惣七さんが乞

食になつてぞんした」と 呼ばはればかい振つて、逃ぐるを、いな

さぬ、待たんせと おびに縋つてといむる間に、家内もおどろき駈

けいづる。

(評釋、一二四) さては早から顔見まいまでが惣七の心中。

(評釋、一二五) なりはてたり、まなしたり

まなしたりは今いふまなつたと同じたぐひ。裏がへしに意味を利か

せる語、すなはち反語の一種である。

成りはてた、まなつたと一圖におもひ詰める惣七の心中、それゆ

る近松はこれをついけさまの刻みことばで示した。修文の好模範といふべきもの。

(評釋、一二六) きいれてから小女郎がはぢ

よし小女郎が聞き入れて、對面してくれるとしても、さうなれば又小女郎のはぢとなる、との義。

(評釋、一二七) おもひきつて、かは見まい

こゝも前の一二四項のとおなじく刻みことばにした。迫りせまつた胸中が、それゆゑ、いかにもよく現はれる。

(評釋、一二八) 待ちやくくと

遊女の一人重之丞といふのが惣七をたゞの乞食と思ひ、何ぞゝるなく待てと呼びとめた、との意。

(評釋、一二九) おかひこ

絹布の異名。

(評釋、一三〇) ござんした

ござんしたの畧。おいでなさつたの義。

(評釋、一三一) よばれば、かい振つて、逃ぐるを、いなさぬ、

待たんせとおびに縫つて、といむる。右重之丞と惣七とに係る動詞を錯綜して手きびしく、手みじかくまた刻み出したので、よれつもつれつの其急忙紛糾の狀がいかにもよく現れた。

(本文) 小女郎はおもてに走り出で、笠かなぐつて、「ほんにさうぢ

や。うれしや、よう来てくだんした。このありさまはどうぞいの」と何の様子も聞かぬさきから啼くなみだ。

(評釋、一三二) はしりいで、笠かなぐつて

これら言葉の續きがいかにも急に且はげしい。近松のいつもの巧手。(評釋、一三三) ほんにさうぢや

これまた名句である。誰とその相手の名を云はず、只おのれ小女郎の心のみ合點した意味はこの句にあらはれた。このやうな咄嗟の場合ひ、小女郎の心にまだ他の人に相手を惣七であると知らせる必要を持つものでない。まづみづから己れに定める合點、只それが先になる。さすが近松、よく寫した。

右、ほんにさうぢやは二語の一句でその人を惣七と識認した。

(評釋、一三四) うれしや、よう来てくだんした

これまた秀句、いかにも手みじかい。四語の一句でその時の眞先の感情を表した挨拶を盡くした。くだんしたはくださんしたの畧のさ

とことば。
(評釋、一三五) このありさまはどうぞいの

これまた手みじかい。これ又四語の一句で、おちぶれた惣七を見てもよほした小女郎の感情を盡くした。

(評釋、一三六) 聞かぬさきから啼くなみた

聞かぬ前から早く泣く。つまり、それは情の迫り切つたまゝである。此句は小女郎の咄嗟に發した不秩序なる詞を遠まはしに形容してその趣味を深からしめるために近松が用ゐたのである。

(本文) 「これ、四郎左さん、奥へつれまして咄したうござんす。」

「いかにもく、おなじみの惣七さま、御用あらば御意なされ」と亭主がなさげに打ちつれて、入るよりはやく絶りつき、

(評釋、一三七) 四郎左さん

樓主の名。この頃の遊女は樓主の名をかくの如く呼び得た。これ亦遊女に權力の有った證據。

(評釋、一三八) つれまして

つれ申しての畧。今日の敬語、ましての本たる語。

(評釋、一三九) 入るよりはやく絶りつき

右の句いかにも小女郎の情の迫ったおもふきを示した。

(本文) 「こひし床しは云はいでも知れたふたりが中。このおすがたは親御さまの御勘氣でも受けてのことか。様子が無うては叶はぬ筈。御前の心に此小女郎は、まだ傾城ぢやと思ふてか。この身は廊に居るとても心は疾うから女夫ぞや。肩裾むすび、手を引いて、人の戸口にすがるとも、かはした言葉違やせぬ。けふは母さまの十年の命日、おまへに逢ふたは親たちが、あの世から手を取っての引き合はせ、女房まめに暮らしたかと一口云ふことならぬかと眞實見ゆるなみだのたま

(評釋、一四〇) 以上、すべて胸一杯の女氣を一齊に傾け盡くすとの書きかた、却つて語句に形容などの修飾を省いたところが手際である。ことに「まだ傾城ぢやと思ふてか」、および「手を取っての引き合はせ、女房まめに暮らしたかと一口云ふことならぬ」の數句は

情致ほとんど胸にしみる。

(本文) 男もはらく、こゑふるひ、「小女郎息災にあつたの。一年ぶりに顔を見て、よい姿も見せ、よい事も聞かすることか、まア聞いてたも、毎年のごとく、諸色を仕込んでくるところ、門司が關にて海賊船にのりあはせ、家來は眼前海へしづめさせ、わがいのちさへ、這ふくの仕合はせにて、此所まで逃げのび、商賣の荷物衣類は、そのまゝ舟に捨て置き、肌に一錢たくはへ無ければ、二度に二つの下着を賣つて、今日までの露のいのちをつなぎしぞや。このたびの下りには請け出し、女房にもたんとの深き契約。その金銀も人手にわたし、ことばを違へ、のぞみを叶へぬわが本意無さよりそなたが怨みん心のふびんさに、云ひ譯やら顔見にやら、見ぐるしき身も耻ぢすこゝへ來て、面目もなきものがたり」と、涙に聲を曇らせり。

(評釋、一四二) 右、この邊の語句は普通である。さして取り立てゝ賞美すべきところもない。また、是ぞと至って解を施すべきところも無い。

(本文) 「よう打ち明けてくだんした。實は湧きもの。御いのちさへ有るなれば、わしや嬉しうござんする。わたしが心で御前ひとりはどうなとなる。おいとしや、肌さむかる。御顔がたんと細った」と着ながらうは着ふわと着せ、だきしめてこそ泣き居たる。

(評釋、一四二) よう打ち明けて

よく打ち明けてくれたと悦ぶ、すなはち隔てを置かれぬのをよるこぶ、つまり小女郎が惣七への實意の極致。

(評釋、一四三) 實はわきもの、御いのちさへ

實は思ふに及ばず、只たふといのは命のみとの詞、すなはち小女郎が惣七への實意の極致。

(評釋、一四四) わたしが心でおまへひとりはどうなとなる

おちぶれても悲しむに及ばず、惣七一人だけをば小女郎その己れ一人の腕で養ひ得るとの詞、すなはち小女郎が惣七への實意の極致。

(評釋、一四五) おいとしや肌さむかる

更に惣七の現在の、姿の見すばらしさを見て、肌さむからうとの同情を動かした詞、すなはち小女郎が惣七に對する、いよくの實意。

(評釋、一四六) おかはがたんと細った

更に惣七の、現在の、顔のやつれを見て、その細ったのを悲しく見た詞、即ち小女郎が惣七に對するいよくの實意。

(評釋、一四七) うは着ふわと着せ

姿の見すばらしさを見て先づ悲しみ、やがて顔の細ったのを見ていよく悲しみ、つひに此句に至って、そのまゝ看過するに忍びずわが着物を着せかけてやる迄の情の表明とまで書き進ませた。これも

またいつもの、羨むべき近松の才筆の綾である。

(評釋、一四八) だきしめてこそ泣き居たる

小女郎の熱情はいよく惣七を抱きしめて泣くとまで爲った。かくの如く近松がこれら二人の愛の發現を順序的に叙したおもふきに一點の無理、不順序も無いのであつた。

(本文) おもてに血氣のまもとこ、大盡さまの御來臨と鳴りわめく。「やれ、人がくる、こなたへ」と 男の手を取り、身を寄せて奥の一間へ入りける。

(評釋、一四九) 大盡さま

すなはち惣七の仇たる海賊九右衛門がその大盡さまであつた。

(評釋、一五〇) やれ、人がくる

かう云つて、小女郎がとにかく惣七を隠した。手を取り、身を寄せていかに優しい心づくしが籠もる。

(本文) 客は過ぎつる海賊ども

(評釋、一五一) 過ぎつるの下に頃のとでも加へて解すべき句。まづ大きく括つて破題とした。

(本文) 眞さき立つて毛剃九右衛門

(評釋、一五二) 眞さき立つて

此句はその句調が先天的に大袈裟に且するとい。九右衛門とも云ふべき人物を點し出す呼び出しとしては究竟である。

(本文) 彌平次、傳右、仁左、平左、市五、三藏、さアござれと引きする雪駄の かねにあかした衣裳つき。おのく、さるせ、らしゃ、すためん、かるさい、らんけん、まゆす、びろうど、うは着まな着もわたりもの。かしらは日本、胴は唐との襟さかひ、ちくらくらの一夜檢校。つひに目なれぬ打扮ばえ。奥田屋へゆるぎ込み、ざしきに居ながれ、毛剃が諸色うけこんで、差配らしげにもつたい

がは。

(評釋、一五三) 雪駄のかね

雪駄の裏に打つ金、それを直に金錢のカチに云ひかけた。

(評釋、一五四) さるせ、らしや、すためん、かるさい、らんけん、

まゆす、びろうど

以上すべて舶載になる品、すなはちわたりものの織りもの。毛剃等

がそれらの衣裳を着用したとの叙事だけで、その無法の驕奢もわか

り、またそれらが海賊とのおもふきも仄めく、

(評釋、一五五) ちくらくらの一夜けんぎやう

ちくらくらは不定、前後左右などの隠語で、すなはち、こゝでは

今日有ッて明日無いとの意になる。

一夜檢校、これもまた一夜だけ檢校の身分であることの稱に用ゐ
ならされた語。

(評釋、一五六) ゆるぎこみ

毛剃等の入り来るありさまに對する精妙きはまる形容、ゆるぐと云ふ

語は、すべて凄まじく大きなものが動くありさまを云ふ意味をあら

はす、たとへば「山ゆるぐ」の類。

故に、こゝでもゆるぎとある丈で早その動詞の主格たる毛剃等の

有りさまがいかに仰々しく大きいやうであるとの趣きがいかにもよ

く現れた。

(評釋、一五七) 差配らしげにもッたい顔

差配は元祿時代の意味では人のために其世話を焼くことの稱。

もッたいがははいかにも勿體を付けた、尤もらしく見せつけるや

う、なの義。

(本文) 「亭主うすく見知り有らう。くるわの縦よこ十文字、き
のふまで端せりしたわれく、にはか分限は見らるゝとほり。今

日からは太夫ぐるひ。くる道すがら見ておいた一文字屋の江口、丸屋の勝山、おなじうちの薄雲、あぶら屋みさは、和泉屋おぐら、車屋の大磯、この六人をうけたして、これに居らるゝ人々の物云ひ伽あすまで待たぬ。けふのうちに首尾させい。」「これはきつゝい」と四郎左衛門 飛んで出づるを、

(評釋、一五八) 亭主うすくから首尾させいまでが毛剃の言葉。

この言葉つきいかにも仰山らしく、凄みもある。

(評釋、一五八) はしせりしたわれく。

端から端とあなぐり究めたわれくとの義 せせるは攻めるなどい

同属の語、すべて根はり葉はりあなぐる意。

(評釋、一六〇) 道すがら見ておいた

道すがら見ておいたと云つて、いろくの遊女を列べ出したところで、さていよく又、昨日まで廓のたてよこ端せりしてよく知ッ

て居るとのおもふきもよく分かる。

(評釋、一六一) 江口、勝山、薄雲、大磯

これら皆いにしへの遊女、もしくは遊女に縁の有る土地の名、それを直ちに其廓の遊女に配したので、即ち人をしてよくそれが遊女であるとの理解を得させる好手段なのである。

(評釋、一六二) ものいひ伽

今いふことばがたき、此語によく當たる語。まかし、元祿時代でもあまり普通に用ゐられた語でない。ことさら此やうな語を用ゐたのは近松その人の、いつもの、不注意、疎放からである。

(評釋、一六三) これはきつゝい

きつゝいはつよい (強) の俚言。こゝでは非常の義で、すなはち毛剃の性急な命令におどろいた意味。

(本文) 「やれ、待てく。亭主が留守では興が無い。云ひ付けてよ

びにやれ。」「かしこまった」と硯引き寄せ、かき付けて、呼びにや
 る足、はしり書き。はやう行てこい。おすいもの。大ざしきも一つ
 にせい。子供泣かすな。女房どもに薬飲ませ。やゝ何ぢや花車がわ
 づらふか。それ、はさみ箱持ッてこい。油断めさるな。人參用ゐて
 養生が第一。持ち合はせた。はずまうと。ふた押し開き、ひと包み、
 一つ選りのおは人參一斤あまり投げいだし、「四郎左、子供は幾た
 りある。」「むすめが一人、男が二人ござります。」「おゝよい子もち
 ちひさけれども此さんで珠、ついで懸け目が八匁、二人の子に提げ
 さしやれ。おむすが着物に。有り合はせた緞子三本縹子五本、この
 緋ぢりめん裏によからう。綿の代まで相添へて、なげ出す、ほり出
 す、いたゞくに。亭主が腕ぞくたびれける。
 (評釋、一六四) やれ待てからよびにやれまでは毛剃の語。四郎左
 衛門が立たうとするのを呼びとめて、「亭主が居なくなッては面白く

ない。人に云ひ付けて呼びにやれ」との義。
 (評釋、一六五) よびにやる足。はしりがき
 また近松の得意、この句いかにも忙がしさうに作られた。場合ひに
 よく相當して、それゆゑ、絶妙である。
 (評釋、一六六) はやう行てこい、おすいもの
 はやく行ッてこい、兎角おそくなりたがるゆゑ、氣をつけて遅くな
 らぬやうに、斯う命令的に云ひなした語。おすいもののおすいはお
 そいの轉訛。すべて、以上の句は忙がしさを示した。
 (評釋、一一七) 大ざしきも一つにせい
 室をあまた打ち抜いて宴席としるとの命令。忙がしさを示し、命
 令の仰山なのをも示した句。
 (評釋、一六八) 子供泣かすな
 これもまた忙がしさを示し、命令の仰山なのをも示した句。

(評釋、一六八) 女房どもに薬飲ませ

これも亦忙がしさと命令の仰山なのとを示した句。

(評釋、一七〇) 花車がわづらふか

花車は今いふやりて、遊女屋で遊女が客に對する一切の世話をする

(おもに) 老女の稱。遊女を花と見立て、花をまですとの意味で花車と付けたとか。

また此句も忙がしさと命令の仰山なのとを示した。

(評釋、一七一) はさみばこ持つてこい

また此句も忙がしさと命令の仰山なのとを示した。薬の用意まで有るとの形容的叙事。

(評釋、一七二) 持ち合はせた、はずまう

人參をも持ち合はせたゆゑ、はずんで呉れてやるとの義。人參といふ高價な藥品をさへ持ち合はせ、且すぐに呉れてやるとの豪奢で、

いよ／＼毛剃の風采は活動させられた。

(評釋、一七三) 懸け目が八匁

珊瑚は貴重品として金銀と同じく懸け目にして、すなはち目方を懸けはかつて賣買された。懸け目はそれからの語である。寶玉を目方ではかるのは今日金剛石などをキヤラットで數へはかるのと同じで、そして本文の如く八匁と云へば、なか／＼の大粒である。

また此句も忙がしさと豪奢のおもふきを示した。

(評釋、一七四) 緞子ひぢりめん……綿の代

また此句も豪奢のおもふきを示した。

(評釋、一七五) 投げ出す、ほり出す

右の如く語は又かさねて刻み出された、それはいろ／＼の物を盛んに出して與へるありさまを活動させて示すやうにとの近松の筆才である。

(本文) 四郎左衛門ぎよツとして、「御禮よりまづ膽がつぶるゝ。い
 つのまに此やうな 大分限者だいぶんげんしやにおなりなされた」と 問まひつめられ
 て問まに合あひことば、「きついかく。江戸あきなひまだるく、さよの
 中山無間なかつまのかね、撞つきあてたふくく長者ちやうじや、さりながら、この鐘つ
 くには 行法ぎやうはふがむづかしい。長者經ちやうじやのきやうとて寺につたはる 縁起えんぎのもく
 るく聞かせたい」と 打ち笑へば、亭主よこ手をはたと打ち、「さて
 有りがたい御經、われらもちつとあやかるやうに 其御經さづけく
 だされ」とせがみ立てられ、まからば聽聞つかまつれと 何やら知
 れぬふところ帳、殊勝らしげに取り出だし、まわいことのうそ八百、
 長者經ちやうじやのきやうとなぞらへ、こゑ張り上げてよみにけり。
 (評釋、一七六) 大分限者だいぶんげんしや
 分限ぶんげんは元祿から殆ど徳川の末年あたりまで金満家の一稱として行は
 れた通用語、前にあつた俄分限がふげんもこの大分限者もすべて、その意味

を本としての語である。

(評釋、一七七) きつきついかくいかく
 強きやういかくいかくの義、おどろおどろいたかの義。

長者經

(本文) そも此無間むけんの鐘の蓋觔けいんをたづぬれば、天竺の大がねもち、
 月蓋げつがいと名にたかき さつても吝しんい長者あり、ほとけこれに示さんた
 め 朝あななくくの頭陀づだの行ぎやう ははちちくくももそそらら耳みみつつぶぶし、うんともす
 んとも云はれぬ ほとけの方便にて、光りはさながら一分小判のや
 まぶさいる、金と見るよりしのんば長者、ほとけの箔はくを剝はがさんと
 慾よくからはいる手の内を 釋迦しやうたの手くだに仕かけられ、惜おししややかなし
 や南無阿彌陀佛、此つきがねを建立す。
 (評釋、一七八) 月蓋げつがい

釋迦の傳記に陪隨して名の見えた天竺の長者、近松の此經はもとも

と支那の「錢神論」に趣向を取ったもので、かならずしも深い仔細が有って月蓋の名をこゝに引き出したものでもなく、只月蓋が長者即ち富豪であつたと云ふ所から殆んど手あたり次第にとでも云ふ工合ひで只斯うそれを材料としたのである。

(評釋、一七九) は。ッ。ち。く。も。そ。ら。耳。つ。ぶ。し。

元祿の時代は無論徳川の末年にいたるまで市中に鉢坊主はちばうせといふ一種の乞兒があつた。鉢坊主のことは諸書に出て居るゆゑ、こゝで事あらしきうに云ふ迄でもなし、只こゝで吾々は、近松の右の句「は。ッ。ち。く。」は鉢坊主について云つたのであるとの事を云ふ。

こゝではは。ッ。ち。く。は鉢坊主の鉢を二重に云ひなした丈で、つまり鉢坊主そのものゝ異名として用ゐなされた。

すなはち、鉢坊主も空耳をつぶす、すなはち鉢坊主も一句も無く閉口するとの意。

(本文) されば、きたない長者が心 末世の今にとりまッて、まづ初夜のかねを撞くときは 諸行無常に惜しやくとひいくなり。

(評釋、一八〇) 諸行無常に惜しやく。

諸行無常は佛經の名句の一。こゝでは、まかし、その無常を無上に掛けてあるのでもある。

もと鐘といふものを骨子とした此文の構造ゆゑ、すなはち鐘の音に古來配され聞きなされた諸行無常の語をまづ點出した。まかし、それをその儘では面白くないとして、たゞちに又無上に惜しやくと掛け利かせたのである。そして其意味はと云へば、さほど吝嗇な長者のことゆゑ、何をでも無上に惜しやくと思つて居るとの趣きに利かせた。

(本文) 後夜ごやのかねを撞く時はせしやうめつばふな事とひいくなり。しんでうの響きは まやうめつめつたに入用知れず、まやくめつ

らざる鐘の聲、一文をしみの百八煩惱。

(評釋、一八二) せしやうめつばふ

前の諸行無常についた經の句、是生滅法と書く。こゝではその滅法を非常なるの意味の有る滅法に通用させ、たゞちに滅法なと掛けた。

(評釋、一八二) じんどう

假名づかひは違ふが、ぞんじよう (晨鐘)、すなはちあかつきのかね

の義である。

(評釋、一八三) ちやうめつ めつた

前の諸行無常、是生滅法などについた經の句、生滅滅已と書く。

こゝでは其滅をめつた (滅多) に掛けた。

(評釋、一八四) ちやくめつ いらざる

前の生滅滅已などについた經の句、寂滅爲樂を直ちにいらざると

轉じたもの。

以上、是生滅法以後は、よしそれが經文に本づいた句であるとしても、全然無茶苦茶を書きつゝたもので、われゝの敬愛する近松その人の作として、大膽な冒險と云へば云ふ、あまりに無責任な所業とも云へば云ふ、それに對してわれゝは其大膽にござるくよりもむしろ其無責任に過ぎたのを惜しみもし、悲しみもする。

(評釋、一八五) 一文をしみの百八煩惱

「一文をしみの百損」、「もしくは一文をしみの百うしなひ」といふ諺が有る、それを本として造つた句。

(本文) この鐘の音を聞く人は 現世にては分限のかねもち、未來にては無間の益入り。かゝる不思議の撞き鐘を おろそかに撞くべからず。さて行法の次第といッば、絹もつむぎも着る事爲ならず、木綿蒲團も榮耀のいたり、あらども引いて起き臥しの 身はならは

しの奈良茶粥、精進潔齋、菜さいいらす、晝夜にたつた 二度の節季は
尻からげ、ゆきゝの中をちよこく走り。

(評釋、一八六) 行法の次第と云ッば

その鐘に對するギヤウのシカカと云へばの義、云ッばは云へばの音
をつよめて云ふ語、ことごとくしく云ふ迄でもないが、臺詞などで、
ことに響きを強く聞こえさせるやうにする場合ひ、よく此云ッばを
用ゐる。

(評釋、一八七) 絹もつむぎも

鐘に對する行法を説く、それに托して、すべて吝嗇をいって金を貯
へるべきよしを嘲弄的に述べた。絹もつむぎも、それゆゑ、着ては
ならぬとの意。

(評釋、一八八) あらども

木綿にもせよ、蒲團を敷くに及ばず、あらどもで、澤山であるとの意、

(評釋、一八九) 身はならはしよ

古歌に「身はならはし」といふのが既に成句として存在する、それ
をその儘近松は用ゐた。そして、その意味はと云ふに、身は何でも
ならはし次第、と、斯ういふのである。すなはち、木綿の蒲團を敷
かず、あらどもを敷いて居ても、さうして居れば身はならはしとな
る、と、この義。

(評釋、一九〇) ならちやがゆ

前の句、「ならはしよ」の「なら」と同じ聲の縁を持たせて奈良茶粥
と出した。

奈良茶粥は今單に茶粥として、京阪地方などで日々食するものと
同じものである。もと奈良地方から始まつたゆゑ、奈良の名も冠せ
られた。

まかも、その茶粥には肉類などは全く入らず、いはゆる精進もの

である。その意味を裏に含んで居るので、やがて次ぎの「精進潔齋
業入らず」の句が容易に呼び出されて来る。此句も吝嗇の意。

(評釋、一九一) ち。う。や。に。た。つ。た。二。度。の。節。季。

此二度は上下双方の句にはたらいて居る。

まづ上の句に對しては晝夜にたつた二度と續いて、つまり、茶粥
をすゐるのが一日に二回との義になる。此句も吝嗇の意。

また下の句については一年に二度の節季との義になつて、すな
はち二度は節季の形容詞となる。

(本文) ちよこくくくぬけて、落ちてあるもの只置くな。こ

けても土をつかんで起きるは七つ起き。

(評釋、一九二) ちよこくくくぬけて

すこしも落ち付かず、人の中をちよこく走りまはり、いり抜け
てとの義。この句も蓄積に營々たる意。

(評釋、一九三) おちてあるもの只おくな

この句も吝嗇の心事を手きびしく寫した。

(評釋、一九四) こけても土をつかんで起きるは七つおき

轉んでも素手でなく、土を、でもよい、手につかんで起きるとの意。

今いふ「ころんでも只起きるな」と同じ心の意味。

この「起きるは」この語もまた上下の二句へ二様にはたらいた。

上の句、「土をつかんで」に接しては「つかんで起きる」との意にな
るやう働らき、また下の句、「なつおき」に繋がつては朝起きる意
味の「起きる」として働らいた。

七つ起きは午前四五時のころ起きることの稱、すなはち早起きの

義にもなる。七つは今の午前四時五時の稱。

以上、これらの句も抜け目なく勤勉であるべき旨を説いた。

(本文) 質を取らずば金貸すな

(評釋、一九五) なるほど質を取ってならば貸し金も損とならぬ。

この句も未練無い蓄積の骨法を述べた。

(本文) 欲しものは買はぬが徳。

(評釋、一九六) なるほど買はなければ金は無くならぬ。この句も

盲無法の蓄積の方法を説いた。

(本文) 月夜に夜業はせぬが損。

(評釋、一九七) なるほど月夜ならば燈油を費さずとも、夜業がで

きるものを、さてそれをせぬのは蓄積一心のものに取っては損であ

る。この句も盲無法の蓄積の骨法を説いた。

(本文) かせぐに追ひ付く貧は無し。

(評釋、一九八) この句は「かせぐに追ひ付く貧乏無し」と、その

形ちがすこし違つた丈で今日に至るまで存在する。

(本文) 芥子を千にも割り木の焚きやう、かならず灰を取ることも

かれ。

(評釋、一九九) 千にも割り木

千にも割りをわり木に掛けた。わり木は割つた木、おもに割つた薪

のとなへ。

芥子は粒のきはめて小さいもの、その小さいものをでも千にも割

つてつかへとの意をこめて、そして直ちに割り木云々と轉じた。す

なはち、芥子も千に割つてつかふがよるしく、割り木もその焚きや

うが有つて、灰をのみ取り去れば火の熱が乏しくなつて且焚焼が早

くなり過ぎるとの意。

この句も無類ともいふべき節儉を説いた。

(本文) 捨てる物は何にも無い。

(評釋、二〇〇) 此句の前までは儉約(あるひは吝嗇)を主眼とし

て述べ、こゝに至つて引きくもつた句を此「捨てるもの」云々と出

して、更に何でも利用になるものとの原理を前提として置き、さて是から、それらの實例をむしろ目のくらむほどに出した。近松の想像の豊富は即ちこゝらでもわかる。

(本文) 鍋の墨ではほそ眉つくり

(評釋、二〇一) 眉を描いて化粧をおこなふに方って、鍋の墨を用ゐることは日本の古來の習慣であつた。

鍋の墨でも利用すべき途が有るとの叙事の一。

(本文) 玄べのきれは玄びれの妙藥

(評釋、二〇二) 長座などして居って、足の血の循環をさまたげ、そのため起こるむづがゆいやうな、痛いやうな一種不快の感覺、すなはちシビレ、それには藁でも木でも、その小さな切れはし、塵ともいふべき程のものを唾液でしめしてその人の額へ貼り付けると其シビレがやがて平癒するとの、一の、迷信的口傳が日本にある。い

つの頃から始まつた口傳か、そのたしかな所はよく分からぬが、とにかく近松の、この句などは元祿時代にその迷信が有つたといふ丈の、たしかな證據には爲り得る。こゝにいふ玄べは總べて藁のしべなどいふたぐひの物をひろく指して云つた語。

玄べでも利用すべき途が有るとの叙事の二。

(本文) 水なき井戸ははしごの入れもの

(評釋、二〇三) 奇想天外とも云ふべき句。なるほど井戸は階子の入れ物としても理屈づめでは宜さうである。

こゝらに至つては文句の花として、かぎりとして、引用する物事が必らずしも眞實行はれ得べきものに限らなければ爲らぬと云ふことは無い。いろく廢物利用の事實をならべ立てた末に至つて、よし實行し得られぬものでも、實行し得られさうに考へられる丈のものならば、一波碎けで萬波をさわがすたぐひで、すなはち句中に波

瀾を巻き起こして、それらをも共に併はせ出して却って興趣の加はるもの、いはゆる能文の士にこれを知らぬものは無い。

水の無い井戸でも利用すべき途が有るとの叙事の三。

(本文) ね。ず。み。の。尾。ま。で。錐。の。鞘。

(評釋、二〇四) これまた奇想天外、いかにも絶妙な句である。この句もすべての理は前の水なき井戸のと同じである。

ねずみの尾でも利用すべき途が有るとの叙事の四。

(本文) さ。せ。は。や。か。ら。か。さ。

(評釋、二〇五) 一旦さして雨、又は日に傘を當てたらば、やがて又乾かして置けとの意を含めた句。

節儉の理を日用品の品にも應用すべき旨を述べたもの、第五。

この句は簡潔で、そしておもしろいところから、後世輩出したいるいろの淨瑠璃作者が随分この句を襲用した。

(本文) 人。に。貸。す。な。か。つ。を。ぶ。し。

(評釋、二〇六) これまた絶妙な句である。經節は人に貸したが最期、かならず減つて戻つて来る。

むしろ吝嗇の理を日用品の品にも應用すべき旨を述べたもの、第六。

(本文) す。り。こ。木。す。り。ば。ち。砥。石。い。し。臼。薬。研。ま。で。目。に。こ。そ。

見えね、貸すたびにへらすに戻るためしは無し。さてそのほかは愛敬づき合ひ、始末、たくはへ、よみかき、算盤、はかり目の上を見れば方圖が無い。われより下を手本として、右の條々守るに於いては微塵つもつて山となり、長者の金言うたがひ無し。むけんの鐘とは名ばかりにて、現世も未來もそむかねば、自然とさかえる福徳縁起、聽聞あれ」と語りけり。

(評釋、二〇七) わ。れ。よ。り。下。を。手。本。と。し。て。

一句千鈞ともいふべきもの。ほとんど守錢奴とも云はれるまでにな

ツて蓄財するものゝ心得の骨髓とも云ふべき句。

(本文) いやともかうとも申されぬ。世界中が此とほりに身持った
ら、わたしらが商賣は取りかく田屋とぞ笑ひける。

(評釋、二一〇八) いやともから取りかく田屋までは遊女屋奥田屋の

主人の口上をいくらか間接談話體 (Indirect Narration) としてゑるした
もの。すなはち、――

長者經に云ふところは、尤もでもあり、尤もでなくもあり、女郎屋
たる身を取ってはそれに對して、いやとも、又、かうとも申されぬ。
世界中がその經の文句の如く、むしろ、客棧に身を持ったならば、わた
し。即ち奥田屋などの遊興商賣は利得もなく、即ち取りかく、
即ち、やめにする、ま。斯うなるのである、との意。

(本文) ざしきの隔ては障子ひとへ。かなたの騒ぎひしくと 小
女郎が身にこたへ、「あゝ、有る所には有るものかな。五人六人の大

夫たち 受け出さう、何やら、かやる、これやると 金銀財寶はち
りほこり。とよさまやかよさまの 貧なくらしを見た時も 能はぬか
ねが欲しいとは 夢ほども思はずして、けふといふけふあちらの身
うけが羨ましく、わしや金がほしうなりました。仕合せのよい人
を 妬むは道でなければ、どんな男ぞ、顔見てや」と障子のすき
よりさしのぞき、

(評釋、二一〇九) この邊、小女郎がはしなく毛剃の豪奢を洩れ聞い
て、やゝ羨ましく、さしのぞいて見る迄に爲ったおもふきを述べた。

(評釋、二二一〇) とよさまや、かよさまの……………

自分、小女郎)の父母の貧困を見た時などは、逆も出来ぬ金(あた
はぬ金)を只欲しいとは思はなかつたが、今日といふ今日、可愛い
男(惣七)の困窮を見るにつけ、よその身うけ沙汰を聞くさへ羨ま
しくなつて、全く、金がほしいなつた、との意。

男をおもふ女の情致がやうやく迫りくあらはれた。

(本文) 「やア、ありやわしが近づき。まさかの時は心だよりに爲りましよと 力を付けてくれた人。金借ッて来やしやう、と 進みいづるを引きといめ、

(評釋、二二二) やアありやから来やしやうまでは小女郎の胸中として言葉。

ありや(即ち、おれはの轉)すなはち、毛剃は。わい(小女郎)の近づきである。まさかの時には心のたより、力になつてやらうと以前にも力を付けてくれた人である。今、されば、頼みをかける時である。金を借りて来ましやう、との意。

(評釋、二二二) 進みいづるを引きといめ。この進みいづるは小女郎に關する動詞なのは無論であるが、引きとどめの主格は何か茫として居る。

が、その茫としたのに價値が有る。進みいづるは小女郎の肉體の働らきを示した。まかい、引きといめ、其精神の働らきを示した。

すなはち、小女郎が金を借りやうと決し、毛剃の方へ身體を進め近づけやうとして、さてそこで突如精神におさへ止められたのである。まかも咄嗟の時間、それを急に書きうつしたのが近松の筆であつた。それで主格は畧された。

それゆゑにこそ、つぎの文の心緒の紛糾がいと引き立つ。

(本文) 近づきは内證、人も聞く。女郎の口から金貸してと 身のはぢを思はずか。恥ぢをつゝむも事による。たつた今いふたこと。來月は筑後の客がわしを受け出すと 出口の佐渡屋とうすやくそく。おまへのくだりを月よ星よと 待ち受けたりやこんな首尾。人手へわたれば わしや生きて居ぬぞや。金借ッたとして、かやせば恥ぢに

もならぬこと。わし次第と ふりきれば、やるも涙、行く涙、かくしてざしきへ繰り歩み、毛剃がそばへ すわればばつと衣きぬの香かほのあたりの人ばうるくと 顔を見合はすあら男、にはかにたしなむ衣紋はきんつき、鬼が花見る風情なり。

(評釋、二二三) 近ちかつつきは内證、人ひとも聞きく。女おんな郎ぢやうの口くちから金かね貸かしてと身みのはぢを思おもはずか。

以上、進すすむ足あしを引ひきとめて、精神しんじんの叱責ししやくである。

毛剃けしと(近ちかづき) 懇意こんいであるといふのは内證(人の知らぬこと)である、傍たがひに聞きく人が無ない、云いひ出いせば人ひとも聞きく(他の人も聞いて知るやうになる)女おんな郎ぢやうたる身みの口くちから金かねを貸かしてと毛剃けしに云いはうとは、扱あつか身みのはぢといふことを思おもはぬのか、との義。

(評釋、二二四) はぢを包かむもからわし次第しだいまで、以上一旦引ひきとめて叱しつた心に對して又さらには辯べんじかへす他の心こころ、それを嗤わら嗟なげま

た近松が書きそらしたのである。

風雨變幻ふううへんげんの奇き、かうして心中しんちゆうの前後左右ぜんごうさゆうの動搖どうごうがありよく寫し出いされた。

(譯釋、二二五) ふり切きれば、やるも涙なみだ、行く涙いゆくなみだ

右の三句は五、六、五の音のものを三つ立てつゞけに出した。五、六、五、それに七言の加味は無ない。五音ごおんの性質せいしやうとして、重おもなれば重おもなるほど句勢くせうが何なにとなくゆるやかになる。(此定義このていぎ的てきの論斷ろんだんはもとよりまだ美妙めいぼうの一家言いけがごん、今只筆いまただひつのついでゆるることにかく擧あげた丈だけのものである。此斷定このだんていに當然供給たうぜんけいきやうすべき證據ていぎ的てき推論すいろんはいさほひ音律おんりつを土臺どたいとして云はなければ爲ならず、それには中々僅少ちゆうぢゆうせんせうの紙數しすうで濟たみもせぬ。それゆゑ、こゝは只右ただみぎの如ごとく論斷ろんだんだけに止めて置く。やがて明治めいしの韻文界おんぶんがい、一方いっぽうに霸權はくけんを掌握さうぎされるべき江湖かうこの才子諸君さいししよくんの中には既に此論斷このろんだんを只聞ただきかれたのみで、いかにもと承知じやうちされる方もあらうとは

美妙が心から願ひもし、又信じもする所である。

右云ふとほり、ふり切れば云々の此句勢はいかにもくゆるやか

である。玄かも、際立ッてゆるやかである。その際立ッまでにゆる

やかなのは扱それを聞かされた人にかやうの感を與へるか。

感、實にこのところでは躊躇逡巡、すなはち小女郎が思慮にあま

つてためらひ、たゆたふ趣きを、實にその感としておのづから與へ

るのである。

こゝに至ッてつくは思はれる、近松の造語は造語そのものが直

ちに樂音と調和し、同化して居る、いはゆる神域に達して居るので

あると。只、その他を云ひ得ぬ、われくには。

只の二三句、小女郎の煩悶が目に見える。

評釋、二二六） くりあゆみ くりあゆみ くりあゆみ

くりあゆみ、この語は實に近松その人が始めて、く、つ、くり出して用

ゐたのである。

われくは右の如くに決定を與へるまでには少なからぬ努力と歳

月とを費した。もちろん、日本大辭書のためいろく、の語を拾った

序に此語の出所を究めやうとしたのでもあつたが、とにかく是まで

の探究といふ探究は随分手落ちなくしたつもりであるにも拘はらず、

近松以前のすべての國文に、くりあゆみといふ語をこのやうな意味

に用ゐた事が有るといふ確たる證據にはどうしてもく、接し得ぬの

である。過言か知らぬが、自分では凡そ自分だけの力のかぎりでは

十分探究をし盡くしたと、今は早、信するまゝ、こゝに此稿を書く

今日をもッてとにかく吾々は右云ふごとく、此語は近松一人の、勝

手に任せた創作である、と全く斷言するのである。あるひは吾々の是

迄の探究になほまだ足らぬ所が有ッて、われくの此斷定が誤りで

あるとの事を證明してくだされる人がもし有る事ならば、われく

は謹しんで且悦んでその示教を受けやうと思ふ。

(本文) 「毛剃さん、久しいな。わしやてなさんへ無心に來た。こちらに大きなもめが出來て、急に身うけをして貰はねばならぬ首尾になつたれど肝心の物が無い。かねぐの詞もある。こちらの才覺とゝのふまで わたしの身うけの成るほど 金貸してくだんせ。たのみやする」と云ひければ、日本一の粹さま、「金貸してくだんせとは云ひにくいこと。二言と聞かぬ。御前の用なら千兩でも萬兩でも。こりや亭主、小女郎さまも一所に身うけ、行きたい所へやりまする。金は毛剃が飲み込んだ。女郎方の見ゆるうち、小女郎さま借りました。飲めや、うたへ」とさわぎ立つ。

(評釋、二二七) 毛剃さんからたのみやするまでが小女郎の語。小女郎は毛剃に向かつて金の無心を述べた。
(評釋、二二八) 肝心の物

やはり、金をさして云ふ語。

(評釋、二一九) 日本一の粹さま

曲の作者が中にわり込んで、毛剃を評していふ語。まかし、それならば、それを「粹さま」としたのは些しをかしい。が、こゝがいつもの近松の變幻の腕であつた。

それを粹さまとしたのは割り込んだ作者そのものを、やはり、著しく目立たせぬために、たゞちにその評言をさまざま小女郎の語であるやう、云はゞ糊塗の間に移し變はらせてしまつて、すなはち少くとも讀者と作者とを分離せしめるやう、且却つて成るべく讀者と小女郎とを接近させるやう、斯う、實に、彼れ近松が心を用ゐてしたのである。

小女郎の一言の無心に對して即座に承諾を毛剃が與へたのは次ぎの、毛剃のその返答によつて分かる。粹さまの評を毛剃が受けたの

もすなはちその故であるところでは見做すべきである。

(評釋、二二二〇) 金貸してから飲めやうたへまでが毛剃の挨拶。その答へいかにもさッぱりとした様子、とにかく賊は賊でもなか／＼の度量の有るおもふきがあらはれた。

(本文) 「あゝ待たんせ〜。あの障子のあちらに 今云ふた大事の男が居さんす。つれて来て禮云はせますほどに、毛剃さん、ことば違へてくださんなえ。」

(評釋、二二二一) 以上すべて小女郎の言葉。その、金の無心に對して毛剃の早速の承諾、是非とも本人たる男(即ち惣七)をしてその禮を云はせるのが當然の禮で、それゆゑ、その向きを述べた。何ぞはからん、禮を云はせるために惣七をその場にあらはさせたのは到底惣七と毛剃との間に大波瀾を起こさせる本であつたとは。

(評釋、二二二二) く。だ。さ。ん。な。え。

く。だ。さ。る。な。の。轉。それはそれで何もさしたる事でもないが、末にえ。といふ一語を添へたのが頗るよろしい。

そのえは吾々がすこし言文一致文例でも説いて置いたが、日本語に間投詞もしくは後詞として存在する、ある一部類の語の、その一で、場合ひにより非常に有力な結果を文句のうへに及ぼすもの、このえもその實例である。

此えが有るばかりで、く。だ。さ。る。な。の意味がいといやはらかい情致を含んで來た。やはらかい情致、玄かも小女郎のやうな美人の口からその情夫に對する熱情の極、かならず出るべく思はれる一種のやさしさ、それを實にきはめてよく此えであらはした。

此えは後世に至って、一轉してやといふ別語をも生んだ。そして意味は殆んど前とかはらぬが、さてやに至っては必らずしも婦人のみでなく、なほ他の(たとへば、幼児などの)口から出るものとも

用ゐならされた。例せば、「恩愛晴關守」に今若丸の語として「かゝさま、あぶなうござります。必らず怪我してくださるなや」、この類である。

われ／＼はまだ十分くはしい所を舉げて右のやうな間投詞狀の後詞を説いたものを世に發表せぬが、とにかく其發表となつたとき、十分細密に述べるべきものゝ一としてはこのゝに現れた右の「え」を落とすまいと思ふ。

(本文) 「男冥利、あきなひ冥利、虚言ござらぬ。御ともなされ」の言葉にひそ／＼立ら歸る。「太夫さん、御いで」とよばゝるころ、かどから色のつかみ取り。勝山、江口、大磯に よせくる波の大騒ぎ。さしきに一ぱい入り込んで、「薄雲さん、操さん、おぐらさん、三人は御あとから」。「そりやこそ御敵」といゝるめいて、毛剃がつれどもうつゝを抜かし、顔に餘念は無かりけり。

(評釋、一二二三) 男冥利から御ともなされまでが小女郎に對する毛剃の挨拶。すなはち、男まへに對して頼まれた、その男冥利として、また金もいくら有らうと見て、頼まれたあきなひ冥利として、承知したいといふことに虚言は有りませんとの義。
おともなされは御供して御つれなさいの義。すなはち其男をつれて御出でなさいとの意。

(評釋、一二二四) 太夫さん御出で
これは毛剃が口をかけた太夫どもがやがて其召しに應じて來た、それを告げる樓の者の言葉である。

(評釋、一二二五) かどから色のつかみどり
幾人もの太夫どもが門からはいつて來る、その美しくさをこゝでは色と見立て、すなはち、門からそのやうにはいつて來た美色のいろいる、すべて只これ好み次第、つかみどり次第澤山、との意。

(評釋、二二二六) よせくる波

その前にある大磯の縁語。そして、その、よせくる波は女郎共の
あまた入り來つたのを其儘たとへて云ふ語。

(評釋、二二二七) 薄雲さん、操さん、おぐらさん

つゞけざまに斯う名をつらね出したのは多人數の女郎その他が呼び
あひ、呼びかはす騒がしさ、また賑はしさをそのまゝわざと現し示
したものだ。

(評釋、二二二八) 御敵

敵、すなはち相手、こゝでは相方たる女郎をいふ語。

此御敵の語は後に至つて盛んに用ゐられる言葉になり、徳川幕府
末近くに至つては、すべて廓がよひする客などがひろく其相手たる
遊女を指していふ語にもなつた。例すれば、「七變化」のうち「籠」
のうちにも、「まかしおてきも千手の手取り、すめではならぬと引ッ

かけて」杯とある。

(評釋、二二二九) いろめいて

いろめいては怖れ、沮みなどする様子の顯はれるのを云ふのが其本
義である。たとへば、一來法師の宇治川での歌、「見わたせばいろめ
く。敵のこのは武者、秋をも待たで大刀かせに散る」など、つまり其
意にもちわたるのである(一來の歌、一説に「いろづくて」)

が、本文の、こゝの句ではその義よりは寧ろ他の意味に用ゐられ
た。すなはち、怖れ、沮みなどの意義は此本文にはほとんど無い。む
しろ色づくとの意味が有る。

(本文) 九右衛門こゑ掛け、「これく亭主。こゝにはちと用が有る。
よね様方口のさしきへ。あとから見ゆる太夫がたもこゝへは無用。」
おつとこなたへ來たまへと 亭主につれて立ちまはる女郎も田舎は
おんとなる。出るもいかい、出ぬもいかい。小女郎に引かれて、惣

七は障子おしあけ、立ちいづる顔と顔、たがひに見合はせ、「やア小女郎がなじみの男、今思ひ出した、その方がことな。」

(評釋、一三〇) よねさま方口のざしきへ

よ。ね。は。遊。女。の。隠。語。元。祿。頃。流。行。し。た。

小女郎の情夫が禮を述べに来るとなつたところで、九右衛門においても元よりまだそれを惣七と知るべき道理は無い。それゆゑ快く面會しやうとした。面會するとなれば、何れ惣七からは小女郎の身の上についての禮の言葉を九右衛門に述べるべき譯である。それやはやの席上、他の女郎どもが居合はせたのを邪魔と思つたればこそ九右衛門はかくの如く、とにかく姑らく他の遊女たちに其席を避けて他に行けとの旨を命じたのである。

近松の描寫を常識によつてかう讀み味はつたところで、さて、さうとすれば、近松にかう描寫された九右衛門は賊でこそあつたものの、普通の賊よりすこし變はつて、ある點においては同情の念に富んで居たとの事が順々にわかつて来る。まかり、近松はたしかにさう書いたのである。

前にも見えたとはり、九右衛門は小女郎が思ひ入つての頼み、即ち金の無心を只の同情をもつて聞き入れることに決した。

で、それがため惣七が禮を述べに来るといふ、それに對して、とにかく席上の他の遊女どもを遠ざけやうと九右衛門がいふのは明きらかに彼れ九右衛門が、(一)、人助けをするとの事をまざくありあり他の遊女どもへ見せつけがましく示さぬやうに爲やうとの注意、と、又、(二)、遊女どもの多數の前では禮を述べる惣七の胸中も不快であらうとの推察から、すなはちそれら遊女共をば遠ざけやうとの注意との、此二つを先もつて持つて居たものと見なされ得る。もとより九右衛門は近松の想像が産み出した一の大海賊である。まかし

近松がまづそれを産み出して、やがて作り、書いて一人物にこしらへ上げたとなつたところで、正に結局この断定のやうな、とにかく一の愛すべき所の有る海賊、同情推察の必らずしも無くは無い海賊と、かう見とめ得べき人物にこしらへ上げたのである。

(評釋、二二二) 出るもいかい、出ぬもいかい

此句は早すでに惣七の叙事となつた。

ともかくも相手は他の遊客、その人に恩を受けることとなる故にもせよ、初対面で、且見得の場所で、手をさげて禮を述べるといふこと、それは、成るほど、惣七に取ってはつらい。

まかし、其つらいのを忍んで、思ひ切つて顔を出す、さうさへすれば、相手は金錢に事欠かぬ人とか、況んや男まへに對しても助けてくれるとか、それも亦はづしたくはない。

惣七の此物おもひは當然そのとき起り立ち、湧きかへるべきも

のでもある、それをば全くすべて只近松はこゝに載せた「出るもいかい、出ぬもいかい」の二句に巧みに封じ含ませたのである。

(評釋、二二二) やア小女郎が云々

此語は毛剃の口からである。

さて、このやうな場合ひ、毛剃の語をさきに出すのと、惣七の語をさきに出すのとその優劣はどうであらうか。まかし、その場合ひも場合ひでいろく有る。こゝでは近松のごとく、毛剃の語をさきにしたのが幾分かよさうである。毛剃の語をさきへ出すとなれば、絶えず木にも草にも心をかく賊たる人物の天性ともいふべき機敏、それが宛がら電火のごとく只きらり閃めくのである。

(本文) 「おゝ、おのれらに逢ひたかつた。やア人は無いか。こいつらは門司が關の……」あと云はせじと毛剃が連れ共 大どろ上げ、「ほゝげた利かすな、うち殺せ」と

(評釋、二二三三)

逢。ひ。た。か。つ。た。の。語。で。無。念。を。久。し。く。忍。ん。で。居。た。と。の。意。味。も。見。え。る。人。は。無。い。か。で、咄。嗟、助。け。を。呼。ぶ。熱。情。も。見。え。る。門。司。が。關。の。で。海。賊。の。素。生。を。許。か。う。と。の。氣。焰。も。見。え。る。

(本文)

蹴。立。つ。る。さ。か。づ。き、か。ん。鍋。の。こ。け。て。疊。に。だ。ぶ。く。く。盪。れ。か。ら。起。こ。つ。た。喧。嘩。さ。う。な。お。ほ。事。に。は。な。る。ま。い。か。と。上。す。る。女。子。ま。も。男、う。ろ。つ。く。顔。も。あ。を。さ。め。て。生。き。た。こ。ゝ。ち。は。無。か。り。け。り。

(評釋、二二三四)

盪。れ。す。べ。て、男。女。の。愛。の。隱。語。だ。ぶ。く。の。縁。語。と。し。て、あ。た。か。も。よ。く。用。ゐ。ら。れ。た。

(本文)

毛。剃。一。寸。う。ご。き。も。せ。ず

(評釋、二二三五)

一。句。い。か。に。も。ど。つ。ち。り。落。ち。着。い。た。多。言。を。つ。ひ。や。さ。ず、性。根。の。す。わ。つ。た。毛。剃。の。様。子。が。ほ。と。ん。ど。目。に。も。浮。か。ぶ。

(本文)

「あゝ、さわぐまい」。この九右衛門に思案が有る。

(評釋、二二三六)

九。右。衛。門。い。よ。く。出。で。い。よ。く。落。ち。着。い。た。

(本文)

「彌平次、のこらず女郎衆のそばへ行け。」

(評釋、二二三七)

の。こ。ら。ず。女。郎。衆。の。そ。ば。へ。行。け。と。云。ひ。な。が。ら、呼。び。か。け。は。彌。平。次。只。一。人。に。し。た。近。松。の。存。意。は。ど。う。か。

これも亦毛剃の沈勇をあらはすためである。

残。ら。ず。行。け。と。の。命。令、そ。れ。は。い。か。に。も。多。數。へ。く。だ。し。た。の。で。あ。る。

が。無。責。任。は。褒。め。ら。れ。ぬ。彌。平。治。を、そ。れ。か。ら、特。に。選。つ。て。呼。び。か。

け。た。と。こ。ろ。で、咄。嗟、主。權。は。彌。平。治。に。許。さ。れ。た。す。な。は。ち、多。數。を。

駕。馭。す。る。毛。剃。の。巧。者、主。權。を。許。し。て。人。を。つ。か。ふ。呼。吸、そ。れ。ら。が。只。も。

う。こ。ゝ。で。現。れ。て。し。ま。つ。た。

た。い。か。に。こ。ゝ。ら。は。近。松。の。非。凡。を。證。す。る。

(本文)

「あとは己おれが受け取った」。

(評釋、二三八)

語。氣。い。よ。く。落。ち。つ。い。た。

(本文) 「いや、さうでない。われ〜が相手になる。おやち一人心元無い。」

(評釋、二三九) これら皆子分どもの語。さすが村すゝめは尙ざわめく。それ、また、近松は斯うよく寫した。

(本文) 「やア、この毛剃、ひけとる男と思ふか。わいらが居ればやかましい。とツとへ行け」と睨めつくれば、

(評釋、二四〇) 咄嗟、かう英雄肌の強壓を毛剃が加へて、一群の魁首たる威嚴はいよ〜巧みに〜見えぬ。

(本文) 「そんなら行きませす、おやち次第」と打ちつれて、表のざしきへ出でにける。

(評釋、二四一) 獅子の一喝、兎はもう萎縮した。
(本文) 小女郎はあとさき知らず、惣七にひッ添ふて、ふたりの目元に氣をくばる。

(評釋、二四二) あとさき知らず

あともさきも分からぬとの義。

(評釋、二四三) ひッ添ふて

目には立たず、多くの人には見過ぐされるが、たしかに近松の詩才を證するのは此「ひッ添ふて」である。

引ッの接頭語を添ふてに加へて、たしかに語勢を劇烈ならしめた。語勢のその劇烈、すなはち小女郎の一生懸命、まがみつくばかりになつて、惣七にひッをふた有りさまが活動する。

(評釋、二四四) 目元に氣をくばる

この句もたしかに小女郎の一生懸命を示した。二人は惣七と毛剃とを指した。

(本文) 「これ、わか人、惣七どの。」

(評釋、二四五) わか人、惣七どのも一人を二様に、いけさまに

云ひなぐったのは確かに、語氣のせまり、且せき込んだのを示したのである。

(本文) 「この中のこと 一言いふても物が無いぞ。おッしやるな。

此方どの商賣 云はずとも見られたとほり。何ごとも身が大事と思ふから。この中のことこらへさしやれ。いやと云はしやりや、事になる。や、こらへさしやれ。小女郎を此方へうけ出すと こなたの言葉が反古になり、小女郎も 可愛やこなたくと心中を立てとはし、女郎の口から 金貸せとまで はぢを捨てゝのこゝろざし、無にしてやらしやるのは そりやいかい邪慳。あるいことは云ふまい。こちらの仲間へはいらしやれ。小女郎もこなたに添はせ、五十貫目や百貫目の金は取り換へて、おや御の息が掛からずとも、ものゝ美事に取り立てましよ。仲間が多うなるほど 此方は損なれど、運をちからにする商賣、運弱うては埒明かぬ。この中のやうな場をの

がれた いのち冥加な 運つよいこなた、九右衛門が力になる人として、これ手をさげる。仲間へはいって下され」と 言葉はさげても居合ひ腰、いやと云はし斫りかけんづ けしきおもてに見えすいたり。

(評釋、二四六) この中のこと

惣七が九右衛門に船中で奪罾を恣にされた事件。

(評釋、二四七) 一言云ふても物が無いぞ

先日、事を今こゝで一言でも云つたならば、實も益も無くなるぞとの意。いざと云はし辛い目にあはせるとの心を裏に含む。

(評釋、二四八) おやどの息が掛からずとも

親を證人とするほどにせずとも、の義。すなはち、惣七その人ひとりを見當てにした丈でもの義。

(評釋、二四九) 運つよいこなた

前には威して置いて、こゝでは何となく相手を稱揚する九右衛門の巧辯。

(評釋、二五〇) 手をさげる。

前に威し、また稱揚し、又こゝで案外かのれを卑下してかゝる九右衛門の智畧。

(評釋、二五一) 言葉はさげても居合ひ腰。

美味の一方に毒酒を捧げて、恩威ふたつながら示す九右衛門の、いよゝゝの智畧。

(本文) 惣七も手づめの返事。仲間へ入れば家の大事、命の仇。いやと云へば小女郎を 人手にわたすのみならず、命まで取らるゝ。いづれの道にも死ぬるいのち。國法をや慎しむべき。小女郎にや添ふべきと 二つの心身一つに 定めかねてぞ居たりける。

(評釋、二五二) 右は谷、左りは海、惣七は扱中央を行くことの安

全なのを知りつゝも迷ひ出した。

(本文) 「もし、これ、惣七さん、あなたの商賣は知らぬが、駕籠に乗る人、駕籠かく人、品は變はれど行く道はおなじこと。

(評釋、二五三) 小女郎が惣七を待たず、まづもって此言葉の口を切った、それ丈で小女郎がいかほど毛剃の言葉に悦んだか分からぬおもふきが如何にもよく現れた。

小女郎がさほどまで身を入り込ませる、その故は何か。云ふまでも無し、惣七と連れ添ひたいと一圖に只思へばこそである。すなはち、小女郎の右の言葉はそれを出し、云ひ出すに従つて、小女郎が惣七に寄せる熱愛の盛なのをいよゝゝ巧みにあらはし出だすのみである。近松の巧手は實にこれである。かれは讀者に水を向けて、直ちに讀者をいそぐ水に、遊泳する人とならしめる。

(評釋、二五四) あなたの商賣は知らぬが

あな。た。は。今。日。い。ふ。代。名。詞。の。あ。な。た。 (即ち、第二人称) とは違ひ、か
な。た。 (彼方) の義で、第三人称、すなはち小女郎たる一人称が惣七
たる二人称に對して斯う云ふ場合ひ、正に第三人称、即ち彼れ、あ
の。人、即ち毛剃、これを指したのである。

すなはち、自分 (小女郎) は毛剃の商賣は知らぬがと云ふのが右
の句だけの意味で、もちろんその商賣が怖ろしい海盜であるとの事
を小女郎が知るわけも無い、それを知らず、それゆゑさほどのもの
とも思はず、むしろ今は惣七をも毛剃の仲間にしたいと思ひ出した、
それは人情いかにさうである。小女郎は只一圖に毛剃に助けられ
て、惣七と夫婦にならうとのみあせる、その心根、即ち餓ゑた者が
食をえらまぬのである。何ぞ知らん、今の一寸一尺を安らかに逃れ
て後の何尺何丈何萬々丈は悔いて及ばぬ奈落である、墮落である。
神ならぬ身がそれと知らぬ、さてさう知らぬやうに近松は書いた、

書いた、それゆゑ、心根のいぢらしさが直ちに掩ひかゝるが如く讀
者に感得されるやうに書いた。

(評釋、二五五) 駕籠に乗る人、かご昇く人、品は變はれど行く道
は。お。な。じ。こ。と。

多く云ふまでもなし、絶妙とも非凡とも云ふべき句。それ丈の一
理はとにかく有る意味の句、それゆゑおもしろい。

(本文) 「金も取りかへ、何から何まで世話焼かうとの心入れ、御身
にわるいことでもなし、あつと云ふて仲間になり、

(評釋、二五六) いかにも表面からのみ見れば、小女郎の此言葉ど
ほりである。裏面を思ひやつた時にはどうか。

小女郎は早表面をのみ見て、裏面をまるで見なくなつた。
小女郎の情は理を盲にした。

おのづから迷裡にさまよひ入る人情の弱点は斯うして近松によッ

て、一句一句痛切に書き進められた。

(評釋、二五七) 「あつと云ふて仲間になり、

あつと云ふて、すなはち勢ひこんでゐる、奮ひ進んでゐる、一も二も無くである。

勢ひこみ、奮ひ進み、一も二もなく加はる、その仲間といふのはさても扱も、嗚呼、賊か!

此句、あつと云ふてといふ迄の、痛切の語が有るため、いと句外に凄絶きはまる色をにじみ出させた。思へば、度の知れぬ近松の巧手!

(本文) 「はやうわたしと起き臥しを 一所にせうとは思さぬか。

(評釋、二五八) 小女郎は一圖たい惣七と夫婦となるのをのみ只せ

がむ。小女郎は悪を惣七に勧めた、無意識的に。小女郎は、さて、悪を惣七にすすめた、熱愛の熱愛から! すなはちこれ情が仇とも云

ふべきものか。

近松の語句の痛切は斯うまたいよく加はった。

(本文) 「御ためにならぬ筋ならば、いやと返事を云ひ切らしやんせ。

(評釋、二五九) 爲めにならぬ筋どころでは勿論無い。と、さて、今明けても云はれぬ。云はれぬのを、尙かう斯う攻めつけられる。それ故にこそ心ぐるしい。

語句の痛切は又ますます加はった。

(本文) 「こなさんに添はれねば、生きて居る小女郎ぢやない。女房にしなと、殺しなと いやか應かいいきしにの 大事の返事でござんする。

(評釋、二六〇) 小女郎の攻めかたはいよく出で、いよく烈しい。もし、それで、そのまゝ惣七と添へなくなつたことならば、生きて居る小女郎ではないと——なるほど、いかにも夫ゆる添ひたく、

またそれ故毛剃にたよれと云ふのもあらう。まかし、さう毛剃に惣七がさう手頼って、やがて小女郎の思ひどほりさう小女郎と惣七と添ふことが出来るに至るといふ日、そ日は何か、夫婦永別のはじめの目となるのではないか。すなはち夫婦になるのは直ちに別かれるためにである。それと惣七は知る。小女郎は知らぬ。知らぬ者は知らぬまゝに只あせり只せがむ、その心根を惣七が思ひやるとしたならばどうか。無殘、その上は無いのである。

右とひだりと悲しみのその元は違つて、その末は同じであるおもむき、實によく、近松は書きわけたものである。

(本文) 「せくことは無いぞや」とふところに手をさし入れ、おゝ、この汗はいいと鼻紙有りだけふき捨つる。ぬれて破るゝ人の身のたしなみがたき道ぞかし。

(評釋、二六一) せくことは無いぞや。

此一句まツたくよく利いた。さほどには目に立たぬやうで、すなはち大抵の作者が此一句を加へるには兎角うツかりして落としてしまひさうである。

句の意味はせくことは無い、すなはち決して慌てるに及ばぬ、といふのである。まかし、さて、その意味である、その意味が斯う洩らされるに至つた小女郎の心事はどうか。

決して慌てるに及ばぬ、すなはち熟考してまかとした返答を行へと勧めるのはその事件が重大ゆゑ、念に念を入れるのを專一とするがよろしいと、此意を裏に含んでのことである。

まかし、急速咄嗟な返答にもせよ、すなはち念に念を入れなかつた返答にもせよ、その返答が只小女郎惣七等に利益の有るべきもの、即ちそれを露骨に云へば、二人が夫婦になり得る丈の返事でさへあるものならば、小女郎は些しにもかまはぬのであらう。

すなはち、小女郎の本心は、口にこそ本文のやうに云ふものゝ、その實、かのれらに利益たる、すなはち己等二人が夫婦になり得べき丈の返答ならば、むしろ其早いのが望ましいのであらう、すなはち「せくことは無い」ではなく、よしや、せいたにもせよ、夫婦になれるやうならば、むしろ其せいたのが望ましい程なのであらう。

それを「せくことは無い」と云ふ。すなはち寧ろ早く返答を出してしまつて萬一の後悔でもありはせぬかとの危険を冒すよりも、その或ひは心だのみの稍危ふかるべき迅速の愉快と安心とを一時はむしろ犠牲的にすこしなほ目のまへに眺めておく丈にしても、それでも尙末のたしかな、安らかな、よろこばしい結果の快樂、それを得る方がまさると思ふのであらう。

小女郎の心事、近松といふ天才によつて今寫し出された小女郎の

その時の心事は必らず右のとほりであるべき譯で、まかも、その機微美妙をば近松といふ天才が實に只「せくことは」の一句に捉へ、おさへ付け、それを句中のものとしてしまつたのである。情がすなはちいよ／＼濃やかにあらはれた。その情を助けてはたらく理性の發現、それもまたあり／＼あらはれた。われ／＼は筋かに此邊に對していと近松の姿を雲表に仰ぐやうになる。

(評釋、二六二) ふところ。手に。さし。入れ。

これは必らずしも寫實の句とは云へぬ。まかし、近松の常としてやや實をはなれた形容の叙事がかならずしも無くは無かつた。この句もそれで、人まへをも無頓着で、小女郎が惣七を愛する非常の熱情をあらはす、それを示したのである。

(評釋、二六三) おこの汗はい！

汗はいのいは意味をつよめるための間投詞。

小女郎が惣七の懐中へ手をさし入れたと云ふので、前云ふごとくその熱情はあらはれた。凡手ならば、手をさし入れたといふ事實の効力を只それだけにしてしまふのである。

玄かし、近松は凡手でなかつた。

近松はたゞちにその手をさし入れたを利用して、その手さきで感じ得たとの心で汗といふものを容易に導き出し、玄かも又たゞちにその汗をもつて惣七の心のくるしみの體外の發現 (Diffusion) を示し、小女郎のそれらの言葉を聞いて居て、惣七がいつか汗をかくまでに爲つたといふことを示した。文においていかほどの巧者を有するか料られぬと云ふべきは是等を書いた近松その人である。すなはち近松は文も語も句も乃至音もすべてく、生かしてのみ用ゐることを得た。多々も素より、細々もまた辨ずることを得た。

(評釋、二六四) ぬれて破るゝ

鼻紙の縁語。それを、こゝでは直ちに惣七の方の形容に用ゐた。ぬれては惣七と小女郎と互ひに深い愛におぼれたのを指して云ひ、破るゝは惣七の身の破滅を指して云つた。

(本文) 惣七はツと打ちうなづき、「得心いたした。只今より仲間になり、御さしづは背くまい。うけたまはり及ぶ長崎には物のために血酒飲むとや。いつはりでない惣七が心底、腕引いて盟ひを見せん」と片肌ぬげば、「あゝ見えましたく。人にこそよれ、何のこなたにいつはり有らう。あらためてさかづきごと。皆こいゝ」と呼びあつめ、

(評釋、二六五) 腕引いて盟ひを

腕を刺して血を出し、その血をすゝめて盟ひを固めやうとの義。

(評釋、二六六) あゝ見えましたく。あゝ心底見えましたの意。

近松はこゝで又毛剃の一人物たるおもふきを示した。毛剃は早すでに惣七の決心その眞實なところを看破した、洞察した、それゆゑにこそ、ことさら腕を刺すまでの形式的の固めをおしといめた。とにかく、即ち近松は毛剃を玄かるべき具眼の人物として描いたのである。

(評釋、二六七) 人^〇に^〇こ^〇そ^〇よ^〇れ

毛剃がことさら形式的のかためを押しといめたのは己れからまづ許してかゝり、己れからまづ胸懷を廣くしてかゝって、すなはち、相手の心をゆるくさせる、即ち人の、すべて、上たるものゝおのづから所有する雅量と云ふより外は無。それ故にこそ「人^〇に^〇こ^〇そ^〇よ^〇れ」、惣七にかぎっては大丈夫と断定してしまつて、つまりは巧みに惣七の心を籠絡したのである。

(本文) 「小女郎どの、うれしかる。亭主、身うけの總代金なにはほぞ

ぞ。」書き付け是に「とさしいだす。

(評釋、二六八) う^〇れ^〇し^〇か^〇ら^〇う^〇と小女郎の心中を推しはかりかたがたの挨拶を述べる、すぐ亭主に向かつて、身うけの代金總額を問ふ、その敏捷、局面の急變、毛剃の機敏がいかにまた寫し出された。

(評釋、二六九) 身うけの代金を亭主に問ふ、すぐ亭主は書き付けを出したとの書き方、はや既に亭主が書き付けの用意までしたのかとさへ見える。

(本文) お^〇つ^〇取^〇つ^〇て、さらりと讀み、

(評釋、二七〇) お^〇つ^〇取^〇つ^〇て、さらりと、この二語共に毛剃の敏捷を寫し出した。この邊すべて殊に注意すべき近松の長所を示した。右の二語は先天的に急劇な意味をもつ語である。

(本文) 「小女郎殿共七人の身うけ代金千四百五十兩な。はしたが有ッてやかましい。五十兩は亭主にやる。千五百兩、これ受け取れ」

と 一兩二兩の七百五十兩、よろづめでたい仲間入り、みな兄弟よ
り 他事なう爲され。うたへく。

(評釋、二七二) 千四百五十兩な

右のなは間投詞で、さすが近松、用ゐかたが旨い。

日本語の間投詞がいかにほどで、どのやうであるか、吾々はまた自
分の研究の結果の其多少といふほどをも世に出さず、わづかに「言
文一致文例」ではのかにそれを述べておいた丈である。今、それ故、
こゝでは只此なについてのみあらましを云ふ。

右のなたる間投詞はいくらか心には承知してさて念を入れて、又
問ひたしかめる意味を持つ。

右の句に此なが無ければ甚だ淋しくて、念を入れて問ひたしかめ
るとの意味がよく出ぬ。
さらば他の語はどうかと云ふに、どれも此なには及ばぬ。「千四百

五〇十兩か」とするか。あまり打ち付け過ぎる。

かのはかの語は皆かより劣るものゝみである。

(評釋、二七二) はしたか有つてやかましい

毛剃の胸懐の豪宕は此一句にあらはれた。

(本文) 「おんらが在所まゐりはかく山の てゝうちの でんぐりく、栗
の木、木の根をまくらにころび寝。この小女郎 戀ひするやまが
の品物で、なまいたぶつ帯解いて、これござれ。だいてころびね。
おもしろいぞ」と樂しみける。

(評釋、二七三) おんらからおもしろいぞ。までは田舎唄まがひの出
まかせで、さて難中の難物とも云ふべく、説きにくいものである。

近松がそれをそのやうな唄にしたのは意味が有る。

毛剃等に高等なる音楽趣味が無い、それを近松はいかにもよく此
唄で示した。まかも、此やうな唄はその用語にさしたる趣味の有る

ものでもなし、その難子がとにかく面白をかしくて、そして手、すなはち踊りが伴なはなければ顧みもされぬものである。おもふに此唄も必らず所作入りのつもりで近松が書きなしたのであらう。

(評釋、二七四)

てうちの でんぐりく 栗の木

此唄全體の意義はくどく云ふほどでもないゆゑ、只まづてうちのから云へば、即ちてうちは手々打である。

手と單純に云ふべきを、更に甘えられた云ひ方、又は幼い人の云ひかたとしては、それをテテと二ツ重ねるのは多く云ふまでもなく珍らしくもない。

それゆゑ、右のテテもそれで、只手といふべきを甘えられ、又は戯れた氣味で、即ちテテとまで重ねたのである。甘えられ、又戯れた氣味、それは最早普通でない。その普通でない相手、云ひ代へれば普通でない語の仲間としてまづ其初めにかんらといふ語さへ有る。

かんらはかのれ (己) ら (等) の轉訛で、らといふら縦行についゝ他のら縦行のれが發音の便宜上んの音に近くなるのは、それは素より、自然の法則に因るのである。

そしてかんらは方言として、俚語として、又一步をすゝめて云へば、戯れていふ意味を持つものとして、そもくまづ右の唄に用ゐられた、それに直ちに縁を引いて出されたのが即ち右のてうちである。

てうちといふ語だけの小歴史を云へば、そのてうちは命長く明治の今日までもなほ存在して居る。もつとも音便手段で、その形ちこそは幾らか變はつて、てうちく (發音はチヨウチク) とも爲つたが、まかし今日のわれくの時代の小兒の用語として、即ち「てうちく、あわよ」といふ句にまでなつて、立派に存在を繼續する。

またでんぐりはてうちの縁語、其語原はて(手)ぐり(縁)で、双方の手を左右からおのく、殆ど平面に合はせるやうにして、そしてくるく回轉させることの稱へで、これは今日かいぐりといふ語に變化して居る。さらに他の方面から證據の一となるべき例を云へば、今日關東の多くの部分で轉覆の意味ででんぐりかへるといふのも夫である。

まかも、こゝで近松はでんぐりのでんをばてうちのててと同じたぐひの音たる件からことさら相併はせ用ゐたので、すなはち「栗の木村の栗右衛門どんの、いんかの木の、いんぐり戸は、いんぐりに、いんぐり戸で、いんぐりに、いんぐり」といふ唄と同じく、すべて同様な音で調の一種の美を成す手段を取ったのである。

附言 右の「栗の木村」の唄は作者も作曲者も今もって吾々には些しもわからぬが、まかし、弘化、嘉永、そのころ江戸

でそれが行はれたと云ふ丈をばわれくは確言する。かもふに「庭のせきちく なせ、なせ、なせ、根ン、根ン、根が引き 引き 引き 引き にくいとさ」の唄が行はれもした時代、双方相伴なつたのは當然とも思はれる。

つぎにまた栗の木、その栗は前に示した「栗の木村」とおなじ骨法で、すなはちその前にある「でんぐり」のぐりを承けて、それと類似した音のくりと出したのである。で、すこしの無理もなく、全體がおのづから快活過ぎるほど快活な調子をあらはして、また一種の浮かれぶしと爲つたのである。

(本文) 町の夜番慌たしく、「人をあやめ、法をそむいたとがにんが 此くるわに入り込んだと上の町から客改め、一人も客衆をとへ出ることなりませぬ。とり手の衆が早くへ」と云ひ捨て、亭主をつれてかけいづる。

(評釋、二七五) 局面は俄然また一變。曲事の有るものは風聲鶴唳にもおどろくとの意をやがて次ぎくの句で示す、その序びらさ。

(本文) 動せぬ自慢の九右衛門はじめ、六七人がぐんにやりく。にはかに顔色いで菜のやうに しほくと「こりやたまらぬ。どうぞ舟へ行く道はほかに無いか。金の出るには構はぬ。土の底へは入られず、天へのぼるはしどは無いか。かくれ簀、かくれ笠が あらほしや」と わが身一つを 片付けかねてふるへ居る。

(評釋、二七六) あらほしや

あらは素より間投詞である。が、こゝでは間投詞としてそれを用ゐたと共にあらばといふ動詞の略語としても用ゐた。

要するに、この邊賊どもの心よわくうるたへる状を、その筆行きから極はめて不細工にして、さも意氣地なさうに書いた。

(本文) 惣七小女郎が手を取って、かど口に氣をくばり、片唾を吞

んで居るところに 内かとなりか、ぐわたくく、捕ったくとわめく聲、なう悲しやと一同に 腰をぬかしてたましひの 身に添ふたるは無かりける。亭主四郎左立ちかへり、「あゝ、氣づかひ無いく。此博多の殿町で 飛脚ころして金取ったやつ、壁どりの揚げ屋で捕へ、代官所へ引きました。こつちの事では無いく」と云へば一度に顔を見合はせ、「あゝありがたい。やれ忝い。あつたら膽をつぶした」と ためいきはつとついだるは世並みのわるい疱瘡に 二番湯かけしごとくなり。

(評釋、二七七) こつちの事では無いく。

此句が頗るおもしろくない。凡手の作ならば吾々とても大目に見る。近松の作と云ふだけに儲これは看過せぬ。亭主四郎左は素より毛剃等を海賊と知って居たものとは思はれぬ。よし、これを眞事實として、假りに亭主がうすくさう知って居たとしても、それならば

又、さう知ッて居たとの趣きがよし仄めかして、いも此邊の前において既に書きしるされて置かれなければ爲らぬ。まかし、さうは書きしるされなかつた。どこまでも、さう捕り手が向かふといふ時まで、も亭主は毛剃等を普通の大盡客と思惟して居たことになつて居る。たとひ普通の大盡客と思惟しなかつたとしても、少なくとも賊とは思惟しなかつたと云ふ書き方に爲つては居る。然るに、こゝに云ふ口上はどうか。曰く、「こつちの事では無い」。まて見れば、捕り手の向かつたのは、こつちのことでは無いと云ふ事には聞こえるものゝ、その語氣から云つて、こつち即ち毛剃等も實は捕り手の向かふべき事實だけは確かに有るものゝ、それが只、只その時の場合ひ丈はさう向かはれなかつたのであると云ふ意に聞こえて、同時また斯うも聞こえる、即ち、あるひはこつちのことでも、いもあるかと疑ひ、おそれられも、いたがとの意がその裏に何となく籠もつて居るやうに。

これ實にさしたる疵では無いが、この類はすべて句意の明晰を欠くに至るもの、近松の是もその千慮の一失である。

(本文) 「長居は無益、惣七どの。京へのぼる。さア〜皆々行なう〜。女郎衆は駕籠で舟場まで。」ひと口云ふても八人が 亭主さらばと立ち出づる。「七人一度に身うけとは 聞きも及ばぬ大盡。おひとりびとり 顔に書き付け張りつけたい。」「なう。はりつけと聞くもぞゝがみ いや〜〜。」「御手柄の御名があらはれう。」「あらはれるはなほ氣がゝり、なんにも云ふな」と出でゝ行く。

(評釋、二七八) 七人一度に張りつけたいまでは亭主の言葉、よし、亭主でないとしても、亭主がたのものゝ言葉を只ぼんやりと書き付けたのである。

(評釋、二七九) はりつけと聞くもぞゝがみ 「顔に張り付けたい」と前にある、そのはりつけは死刑の一たる磔

刑とかなじ音の語であるところから、毛剃等日かけ者の常として兎角縁起をおもひ、いはゆる御幣をかつぎ、刑名などを聞くさへ不快で、すなはちはりつけと聞くのも身が震へるとの義。

ぞぞがみは元縁時代の通用語たるぞぞがみ立つの略語である。ぞぞがみはソツケタ（疎鬆）カミ（髪）の義で、そこに立つといふ動詞が加はってソツケテ髪ノ毛が立つとの意になり、すなはち後世のそうけだつ（總毛立）の語原となつた語である。

（評釋、二一八〇）御名があらはれう 顯れるは尙氣がより前にははりつけたいと聞いた丈で磔刑を思ひ出して總毛立ち、こゝでは又あらはれうと聞いて、また直ちに露顯の意の「あらはれる」を思ひ出して氣がよりとなつたとの義。百事に心を攻められ、氣を咎められるとの意。

中の卷

（本文）市立て、屋財家財のくづし賣り、捨て賣りに相場爲し、戸棚、箆筒、ぬり長持ち、燭臺、椀、家具、すひもの椀、まないた、佛壇、なにや狩野の三幅對、表具ばかりも百貫に あみ笠、提灯、なんさんの 八匁から九匁を 鏝に見込の中わきざし。鍋も釜もふすぼりぐわんすも、疊もあげてあら道具、すのこの竹のこま道具。

（評釋、一）市立て、せり賣りの市を立てる義。

（評釋、二）椀、家具、すひもの椀。例の、前にも述べたとほり、近松の無頓着はこの句にもあらはれた。椀とすひもの椀との、特稱の名詞を出して置きながら、その總稱

たる家具などを出したところは明きらかに修辭の不鍛鍊を證明する。それとも、家具と用ゐる必要が必らず有るか。まかし、それも無いのである。

(評釋、三) 何や狩野

何や斯やといふ成句、それを本として何やを直ちに狩野へ掛けた。狩野は人の知るとほり畫の名手の家がらの名目、こゝにさへ一寸しても斯う用ゐられたほど一般に知られて居た家である。

(評釋、四) 百貫にあみ笠

百貫のかた(カ)に編み笠一蓋といふ諺を畧した句。捨て賣りとなれば、もと高直であつた物も云ふに足らぬほどに爲つてしまふとの意。

(評釋、五) なんきん

すなはち南京、すなはち支那製の陶磁器の異名。後世荷蘭人が持ち

來つた泰西の諸物品に荷蘭、もしくは蘭の異名を用ゐたのと同じく、これも産地によつて品物の名を假りに呼んだのである。

(評釋、六) ふすばりぐわんす

鐘子すなはち、今の藥罐のたぐひ。

(本文) 有ると有るもの座も灰も 猫もねうちにはやん奴。五分かんと

飛んでほととぎす、まもり本尊、かけ硯。

(評釋、七) にやん奴

なん奴と云ふべきを猫の啼きをるのニヤンといふのに掛けた。

(評釋、八) 五分と飛んで

此句にさしたる意味は無い。が、只用語の受けかたしを面白をかしくするために出したのである。

にやん奴は前にも云ふ如く何奴である。そこで、何奴何分といふ云ひ掛けにして、五分といふのを只その口合ひに出したのである。さ

て、飛んでは算術（すなはち、和算）の用語で、一桁さしかいて數を珠に置く時に、云ひなすものである。

此句において飛んでは次ぎの句のほととぎすを縁語として呼び出すための、その本の語として用ゐられた。

（評釋、九）まもり本尊、掛け硯

巧妙きはまる作り方の句ではあるが、なか／＼分かりにくい。句中のほんぞん、及び掛けの二語が實にはほととぎすの縁語である。

ほととぎすの啼き聲をテツペンカケマカ杯と今日はいふ。まかし往昔、それをホヅンカケマカと聞きなした時代も有つたので、すなはち、この句の本尊、掛けの二語はそれをその儘取り用ゐたので、まかもそれが世帯道具、もしくは其類の品たるまもり本尊や、掛け硯に直に譯無く應用されたのは全く近松の巧手に因つての細工なのである。

（本文）おはぐる壺もまかり出で、かねになれやと口々に つけて競る／＼せり市に 町内さわがしましよ。

（評釋、一〇）かねになれや

此かねは通貨の義のかねと、おはぐるのかね（鐵漿）との双方に掛かつた。

（評釋、一一）口々につけて

此句すべてかね（鐵漿）の縁語である。かねは口へ付けるもの故。

（本文）家主菱屋嘉右衛門 興さめがほにて駈けきたり、「これはこれに 狼籍千萬 なにごとぢや。この家はわれらが貸し家。主は小町屋惣七といふ西國商人。夫婦づれで、十日ばかりの逗留で 大阪へくだる。あとにはあの婆たつた一人。留守のことはお家ぬし たのみますと云ひ置き。けふかあすか戻られう。お姥もお姥、留守居とは何のため。これ、おやぢ、先わごりよは誰なれば、よい年をし

て、京の作法知らぬか。町ところへもことわり無く、人の留守に踏ん込み、たゞみ迄賣り拂ひ、捌きはなんとすること。この心清町一町のたばねをする年寄り、すなはち家主、うっかりと見て居よか。姥も一所に詮議する。となりが町の會所、さアく歩びや」とわめけども、

(評釋、一二) わごりよ

西國なまりの方言。そのもと、きさま杯の義。

(評釋、一三) たばね

束、即ちツ、カチの義、とくしまりの意。

(本文) 姥はなみだに顔かたぶけ、親惣左衛門手をつかね、「御家ぬしと申し、御年寄り御尤もく。われらは惣七めが父、小町屋惣左衛門と申して 生國は長崎。二十ヶ年このかた かみがた居住いたせども、元手無ければ商賣もはかどらず。山科邊に逼塞いたし、故

郷ちからに惣七めが 西國がよひいたせども、仕合はせしたとのたよりも無く、どうか斯うかと思ひ暮らす折りふし、はしぐゝ人の取り沙汰、小町屋の惣七は 西國で大にまうけ、博多の傾城うけ出し、心清町に檜の木づくり 節無しの店を張り、ふうていは無人のくらしでも、内證の榮耀は千貫目持ちと うはさする程心得がたく、夜前はじめて尋ねてまゐり、沙汰に違はぬ内の諸道具。しるものにびっくり致し、姥めに向かふても くはしき様子は知らぬと申す。かのくも商人。われらも七十八まであきなひで食べたもの。胴がへしの利なればとて、まうけるには方圖が有る。わづか十兩か十五兩まうけてさへ 吹聴してよろこばせた 正直孝行な惣七め、一人の親に匿すからは 碌な銀とは存せぬ。後につのお町内お家ぬしへも難儀を掛け、その身も人なみの死をせぬやつ。今かういたすも親の慈悲、よこしまの銀は身に付かぬと申すこと 骨身にしみて

思ひ知らせ、憂き機踏んで正道の あきなひに 取り付く心付けん
ため、俄に道具屋へ走るやら、ふるかね買ひを呼ぶやら、心せいて
御町内へ無禮。御家ぬしへ付けといけ申さぬは まッびらく 幾重
にも御わびごと。貸し家札出してくだされませ。御家は明けますく
ばかりにて、さぐるはきんかあたまなり。

(評釋、一四) 仕合はせした

こゝでは好運に出で逢ったの義。

(評釋、一五) はし

いろいろこまこまの意。

(評釋、一六) 胴がへしの利

をりかへしの利の義、すなはち元價の倍になる利。

(評釋、一七) きんかあたま

はげあたまの俚言。まかし既に大かた廢語となつた。元祿あたりで

は盛んに行はれた語で、西鶴の作などにもこの語はあまた有る。尤
も今日でも地方によつては尙殘しつたへて居る所も有る。たとへば
山形地方などで、冬のころ雪や氷で路が凍り、さながら鏡のやうに
なつた、すなはちよく光るありさまを今日でもきんかと云ふたぐひ、
つまり元祿の、こゝらの語をその儘なのである。人によつては之を
金柑あたまと無理に解釋するものも有るが、それは全く附會に過ぎぬ。
(本文) 「御親父の云ひ分うけたまはり届けた。さりながら、惣七ど
のには 口合ひ、家受けも有る仁、後日の念に御親父の一札留守居
の姥も判を取る。さア、會所へ同道、いざござれ」と 門口はたと
引きたて、天の岩戸にあらねども、こゝにも紙の貸しや札。のこ
らぬちはやふる道具、あき家とこそなりにけれ。

(評釋、一八) 口合ひ

双方の間に口を入れることの稱。それから轉義になつて、すべて中

に立って口を利くこと、口を入れることとなへとなり、又、さういふ事をする人の稱へともなる。

(評釋、一九) やうけ

家のうけ人、すなはち家屋賃借の保證人。

(評釋、二〇) こゝにも紙の

紙は神といふのに利かせ掛けた。その神といふのは前の天の岩戸の縁語としたもので、そのまた天の岩戸は前の句の引きたてゝの縁語で、つまり一切においては天の岩戸に天照皇大神が御かくれに爲つたとの故事を含ませたのである。

(評釋、二二) ちはやふる道具

古道具の義のフルダウグに千磐破るの古言を云ひかけた。ちはやふるは和歌でいふ、神といふ語の枕詞。

(本文) 博多小女郎は町風に なれし夫の惣七が あぶなき分限、

なみのうへ、何百里ともえらぬ火の 心つくしを過ぎし身は 京大阪はとなりにて、夫婦打ちつれ歸りしが、暖簾はづし、大戸をえめて、墨くろくゝに貸しやふだ。こりやどうぢや。はつくくと云ふより言葉無く、くゝり押しあけ、入つたるに、湯水を飲まんべ益もたゝみにあげてかんと鳥、泣くにも泣かれず興さめ果て、口をわいたるばかりなり。

(評釋、二二) えらぬ火

海中に燃える青白い色の光り。身から發光する小蟲によつて起るもの。むかしから筑紫、すなはち九州諸國、その海に燃えて見えるとの云ひ傳へが名高く、つひにえらぬひのその語が筑紫の枕詞となつた。

こゝでは心つくし(心盡くし)となる、そのつくしを縁にえらぬ火と出し、一方においては又何百里とも知らぬと掛け做した。

(評釋、二二三) はッく。

非常なおどろきをあらはす間投詞。

(本文) 惣七、こゝろは足の裏の疵にこたゆる小笹原、簀子にどうと座しければ、

(評釋、二二四) 今も諺に「脛に疵持てば笹原走れぬ」と云ふのが有ッて、すなはち身に暗いおぼえが有れば、みづからおのれの心が咎めるのみになるとの意を示す。こゝの本文に大かたその意。

(評釋、二二五) すのこ

この語は一寸したところであるが、それでさへ近松は小笹原の縁語として用ゐた。

(本文) 小女郎急せいて、「これ申し。ゆるりとして居さんす所ではあるまい。懇ろにする家主どの、内儀さんとわたしとも親しうて、先せん度くたる時にも みやげに大阪のみよし下駄、たのむぞやとおしや

んした。それはど他事ない中で 譯のわるいまかた。わしやきッと詰り開かう」と はしり出づるを、「これくく」。女子をんどのいふて済まぬこと。

(評釋、二二六) せいで、これ申し

右わづか八音の中に地の句と詞の句とを寄せて出した。それゆゑいかにも急忙な語氣であるらしいところが見える。

(評釋、二二七) ねんごろにする家主どの

中よくつき合つた家ぬしどのの義

(評釋、二二八) わけのわるい仕方

歸りには土産物の下駄までも買ッて來てと頼むほど中よくした間がらとしては、其留守に家を變はつた有り様にしたと云ふこと、實にわるい仕方であるとの意。

(評釋、二二九) はしりいづるをこれくく。

これもまた前の評釋第二十六の場合と同じく、地と詞とを一句に寄せ封じて、すなはち如何にも急ぎ込んで居るとのおもふきをあらはした。

(評釋、三〇) をなごの云ふて濟まぬこと

女子などが口を出したところで、どうにも爲らぬとの義。

(本文) 「貸しやといふは名ばかり。やぶれ家を手まへ普請、根太に追ッ付け張る筈で、板も買ひおく。家賃といへば二ヶ月三ヶ月、さきへはやれを滞らす。町儀付き合ひおろかもなき身。家財まで取られ、姥がゆくへも知れぬは、どうでも下の沙汰でなし。はうぐに預けおきし、金銀荷物についての事か。いづれの道でも、命有るうち、一夜もこゝでは明かさず。えゝ、是非におよばぬ。惣七が運もこれ迄。こりや、をな子ども男ども、見るとはりの仕合はせ。力に叶はぬ。主従の縁も是限り、大阪のつかひあまり。一步こまがね少々

有り。三人よつて分けて取れ。ひまをやる。さらばぐ」 金ぎらさの 財布と共になげいだせば、

(評釋、三一) 貸しやといふは名ばかり

やぶれ家を借りながら借り主の方で普請に手を入れ、根太板をさへ買ひおき、家賃は二ヶ月分さへ前納にして町内のつきあひに至るまで些しも抜ける所がないと云ふ、それゆゑ貸し家すまひとは云ひながら、それは實に名のみで、手前家作もおなじことである。何ぞ知らん、さう派手やかにする人は、なるほどさう派手やかに爲し得る譯も有る、正道をまゐるではづれた盜賊の仲間入りしたのであるものを。

(評釋、三二) 仕合はせ

今いふ仕儀とかなじ義 今日では仕合はせをば幸福の意にのみ用ゐるやうに爲ったが、まだく近松の元祿あたりは此やうな、その語

の原始の意義で用ゐて居た。

(評釋、三三) さ。ら。ば。く。金。ざ。ら。さ。

金。ざ。ら。さ。の。さ。ら。さ。は。さ。ら。ば。く。と。同。音。の。か。ざ。り。で、近松のいつもの得意である。

ま。か。も、金。ざ。ら。さ。は。貴。重。な。切。れ。地、そのやうな切れ地の財布を持つて居ると云ふので、惣七が浮雲の富の魔に迷はされて居るとのおもふきもあらはれた。

(本文) 御笑止とも何とも。御辭儀申すもか慮外。またの御縁と口

上。を。ひ。ね。ッ。て。見。れ。ば。手。に。さ。は。る。一。歩。小。判。も。八。九。兩、は。ッ。と。寐。耳。に。水。く。さ。き。半。季。一。季。な。ご。り。な。く。つ。れ。立。ち、お。も。て。に。出。で。に。け。り。

(評釋、三四) 口。上。を。ひ。ね。ッ。て。

此。ひ。ね。ッ。て。は。口。上。を。ひ。ね。ッ。て。と。云。ふ。の。と、財。布。を。ひ。ね。ッ。て。の。双。方。に。通。ッ。て。掛。か。ッ。た。

口。上。を。ひ。ね。ッ。て。と。は。口。上。に。氣。を。利。か。し。て、口。上。に。修。飾。を。加。へ。て。と。の。意。

(評釋、三五) は。と。

此。は。ッ。と。は。前。の。句。に。あ。る。八。九。兩、その八の音と同音の縁をもつて、近松いつもの得意として用ゐたのである。かういふ所にまで近松は油。斷。せ。ず、修。飾。の。美。は。力。の。か。ざ。り。發。揮。す。る。や。う。に。勉。め。た。の。で。あ。る。

(評釋、三六) ね。み。に。水。く。さ。き。

ね。み。に。水、す。な。は。ち。八。九。兩。も。あ。る。(その頃)の思想で云へば、可。な。り。の。大。金、そ。れ。を。投。げ。出。さ。れ。て、寐。耳。に。水。の。心。も。ち、す。な。は。ち。意。外。な。心。も。ち。が。し。た。と。の。意。

そ。の。水。を。近。松。は。透。か。さ。ず。水。く。さ。き。と。轉。用。し。て、い。ざ。と。な。ッ。て。は。薄。情。な。奴。婢。の。奉。公。人。根。性。の。形。容。に。用。ゐ。た。

(本文) 物。お。と。隣。り。へ。き。こ。ゆ。れ。ば、姥。が。會。所。を。ぬ。け。て。來。て、「な。う、

おとまじやく。きのふの晩からおやぢ様が御いでなされ、中々でもないこと。淺ましい慾心に 海賊の仲間に入り、道にちがふた金まうけを けツこな事とおもひ居る。木のそらに引ッばらるゝは今の事。菜大根肩においても 正道なまうけは三文でも身に附くと云ひ聞かせた言葉反古にして、なんで出来た屋財家財、これがわが子のかたきぢやと おいとぼしや 涙片手に道具屋あつめ、二束三文に賣りすて、家もあげて、そのうへに となりの會所で町衆まちしゆのまへにかしこまり、何やらことわり云ふたり、みな御まへゆるゑの御苦勞と なみだぐめば涙ぐみ、

(評釋、三七) おとまじやく

此語元祿の頃までは生存して居たが、その後になつては死滅して廢語となつた。その語原は古言のうとまじやくで、すなはち疎みそみたいの義、つまり嫌ひ思む意をあらはす。

(評釋、三八) なかゝでもないこと

此語法も今日から見れば廢語の類である。直譯して云へば、一とはりではないこと、容易ではないことの意。

こゝでは「おやぢさまが御出でなされ」て、容易なことではなかつたとの意、すなはち一とはりの氣色ではなかつたとの意。

(評釋、三九) けツこな

けツかう (結構) の約。

(評釋、四〇) 木のそらに引ッばらるゝ

はりつけの刑にあふのを趣味有るやうに云ひなした句。

(評釋、四一) これがわが子のかたきぢや

むしろ、また、わが子より先づ道具を親はにくむ趣きを此句ではあらはした。子に迷ひたがる親心は此刹那の活寫にも近松は斯う捉へて示した。

(評釋、四二) おいとぼしや
おいとぼしやの轉訛。この語は近松の作のみならず、他の元祿作家のものにもよく見えるところだ。思へば、正にその頃なかく行はれた語と見える。

(評釋、四三) 家もあけて

此あけてをあけて(明)と誤まり見る人が有るが、なるほど、さう誤まりやすくもある。まかし、それではわるい。あけては決してあけてでなく、家をそのまゝ舊の權利者へ引きわたしかへしての意で、他の例、「祿をあげる」、「扶持をあげる」、「大小をあげる」などと同じなのである。

(評釋、四四) ことわり云ふたり

ことわり、これも今日から云へば廢語である。

今日のいふことわりは謝絶の義より外何の義も無い。が、そもく

今日のその意義はことわりたるその語の本義ではなくて、轉義なのである。

ことわりはもと古言で理の義である。それゆゑ、道理も無くなどといふ意のところになりなくなど云ひなした。更に云ひすゝめて見れば、さうして、ことわりを云ふすなはち道理を述べると云ふ意味が、多くの、有りやすい場合ひを本として、たゞちに謝絶の意のやうに用ゐならされたのが、遂に後世に至つて、まತ್ತたくその意に走り傾いてしまつたのである。

まかるに、元祿あたりではまたく古言の意を失はなかつたのである。それゆゑ、こゝの句でもことわりが些しもをかしくなく聞こえる。

すなはち、ことわり云ふたりは道理を述べたりである。いろいろの譯がら有ると、つぶさに事情、わが子をかばふために事情を親

が述べたといふのである。

(評釋、四五) なみだぐめば涙ぐみ

姥が涙ぐんで、たいちに惣七もなみだぐむとの書きかた、すなはち惣七の感動された程度のきはめて鋭敏であつたおもふきがあらはれた。こゝら天才としての近松の長所の一である。

(本文) 「これ姥、掛け硯に入れおきし わりふの手がた、これが有れば一大事。入れもの共に道具屋の手にわたつたか。」「いや、掛け硯は賣れたれども、そのわりふは残して、おやぢさまの鼻紙入れにをさめてぢや。そんな事氣づかひせず、はやう町を退けましたい。はア、會所から呼びさうな。姥はもう行きませす。命有らば御縁次第、おふたり共に御無事でや」と 歸るぞこれも名ごりなる。

(評釋、四六) そんな事氣づかひせず

惣七は手形が人手にわたるのを一大事と思つて、それゆゑ、それを

姥に問ひたづねた。まかるに、その手形は惣七の親父の手に入つて居る。姥は惣七の、ほかならぬ親、その人の手にその大切とか聞く手形がわたつて居る事實をば、深く様子を知らぬことゝて、却つて安心するに足るべきやう思ひなして居る。それどころで、實は、無

姥は、それゆゑ、それを其やうな事とさへ云ひなした、その實は重大であるものを輕小なことのやうにさへ云ひなした。双方の極端が盲じあひに、いはゆる、つんば咄しをする鹽梅、その、をかしく混雜し、齟齬する工合ひ、いかにも急忙な場合ひの記事として、近

松はよくそれを駕馭して示した。情致は無心によつて深まさりする。姥の此無心は惣七の煩悶の情致を、いとい手強く、反映させた。

(評釋、四七) のけましたい

退きなきの意、命令法の句。もとより是は元祿時代京阪地方の通用語であつた。今はやゝわづか面影を九州の一部、筑後あたりに方言として残すのみである。

(本文) 茫然として惣七

(評釋、四八) 姥がしやべる間惣七は一語をも發せぬやう近松は書きなしたのが、こゝに至つて深意の有つたことゝわかる。

茫然として、それゆゑ、惣七は何のたしかな分別も付かなかつたのである。それゆゑ、姥の言に對して口を利いて、こたへ合はせることも出来なかつたのである。前に姥と應答しなかつたのが、すなはちこゝの茫然としての句のための、巧妙なる觀染となつて居る。

(本文) 「おやぢの耳に入るからは 世上に知れたにきはまつた。四日市には思ひ寄るかたも有る。伊勢路へ向け、のがるゝ丈はのがれて見ん。もう七つにさがつた。さア用意」といふところに、「惣七、

宿にか。早い門のさしやう」とくゝりをあけて、つつと入るは毛

剃九右衛門、

(評釋、四九)

おもひ寄る

見當て、といひ付くの義。

(評釋、五〇)

七つにさがつた

なゝつさがり、即ち午後四時すぎになつたとの意。

(本文) 惣七うろたへ、「や、めづらしい。何とおもふて。まづく

是へ」と「煙草盆もてこい、茶もてこい」といふほど九右衛門う

さんがは。

(評釋、五一)

惣七うろたへ。

惣七の零落も元はと云へば毛剃ゆゑである。そして、今その零落に際して、とつおいつの思案最中、その毛剃にたづね來られたところ、なるほど、うろたへるのも當然である。

(評釋、五二) 何ともふて

何ともふてのつぎにたづねて来た。と問ふ意の語が畧されてある。それを畧してあるので、うるたへた様子先よくあらはれる。

(評釋、五三) 煙草盆もてこい

まづ是へと請じむかへる語だけは有る。咄嗟、すぐそれから引きつづかせた語は煙草盆のと、茶のと(奴婢にでも)命する、それである。まかし、その奴婢は元より既に居ぬのである。居もせぬに惣七は呼ぶ。そのうるたへ方すなはち夫丈でもあらはれた。

(評釋、五四) うさんがは

不審がはの義

(本文) 「だまりやく」惣七。大阪で逢ふたは四五日まへ。おツつけ登る、京で逢はうと云ひ合はせ。こりや宿がへと見えた。何としたまだらで、いづかたへ立ちのきやる。氣づかひなり」と云ひければ、

(評釋、五五) おツつけ登る

やがて、上京するとの義。この語は毛剃の句、つぎの「京で逢はう」は惣七の句、と。毛剃は云ひなした。かれと是との一句々々を極はめて、するどく、短い語中にをさめなした。咄嗟急忙を示す近松の用意の周到!

(評釋、五六) まだら

今もなほ残る俚言。ありさま、ていたらしく杯の義。

(本文) 「いやく、氣づかひなことでない。たつた今のぼつて洗足もつかはず。老體の親、別すまひも異なるものと、一所につばむ談合で諸道具を引くやら、取り込んだ最中、旅宿はどこぞ。そのうち、こちらから便宜せう。やすんでいきや」と出でんとす。

(評釋、五七) 一所につばむ

つばむはつばみの動詞體。すべて、開くべきもの、又は開いたものが

收縮して小さくをさまる義。世體をしまッて親父と一つに小さくつばまるとの形容的の云ひなし。

(評釋、五八) 取○り○込○んだ○と云ひ、す○ぐ○に○旅○宿○は○何○所○と問ひ、やがて○こ○ち○ら○か○ら○便○り○す○るといふ語氣、ど○う○し○て○も、う○る○た○へ○て、相手を促がし追ひ立てる意味は十分である。そのところへ、――

(評釋、五九) や○す○ん○で○い○き○や

此、ほんの世辭一遍の口上、それ既に妙。まかも又、――

(評釋、六〇) 出○で○ん○と○す

云ひすてたのみで出でんとす、即ちおのれは席をはづして出て行かうとする、それで惣七が毛剃をうとみ、ふり付ける情致は正によくあらはれた。

(本文) 「待ちやく。はて、きよろくと 夫婦めせこながら飲みこめぬとぶり。これ、やがて商賣時分、こちも明日國へくだる。仲間中か

らあづけた 島のわり符うけ取りに來た。そのわり符をわたして行きさや。」

(評釋、六一) 毛剃も夫婦の様子の素氣ないのに不審がる、それは何さま無理も無い。まかも、わり符の請求とは生憎なところに生憎な難題。

(本文) 「おゝ、いかにもく。其わり符は大事にかけ、箱に入れ、封をつけ、おやぢに預けた。おツつけ是から持たせてやらう」と云ふより九右衛門いろを變へ、

(評釋、六二) こゝらの句、すこしも際立たせては書いてないが、實にいかにもよくその境遇に相應したこしらへかたで、今さらのやうに近松の才氣、その抜け目無さに感ぜられる。

第一、おゝいかにもくの一語、さもく安らかに譯もなく惣七の口から出たやうに出してある。まかし、惣七の心中はどうか。云

ふまでもなく、心中では途胸とむねをついて居る。それ丈なほのことである、なほ此やうに、安らかに語を出したのが却って其心中の煩悶を十分示すに足りる、反對の證據である。

第二、さらにその割り符は極はめて大切にしたと云ひ、むしろその急忙の場合ひ、うさん臭くさへなければ云はずとも過ぐすべき云ひ譯、云ひつくるひめいた口上、「箱はこにいれ」とまで云ひ、またも又「封ふうをつけ」とまで云ひ進め、さてやうやくの事で「おおややぢぢにああづづけた」とまで云ふ様子、どうしても一寸のがれの口上としか思はれぬ、それを只その語氣一つ、自然をうまく捉へた句法一つでさも活動するがごとく描き出したのは流石近松と云ふべき、實に、うらやましいほどの技倆である。

(本文) 「三千里を股にかけるこの仲間。いのちがへの割り符をおやぢに預けたとはどこへ……………うまいこと云ふなく。仲間をぬけて、

ひとり儲けしやうでな。音沙汰なしのにはか宿がへと、てうど算盤が合ふた。そのわり符はその肌につけて居る。知れた事！ 受け取って見せう」と

(評釋、六三) 毛剃の此うたがひ、それも道理は有る。

(本文) 大戸くいのりの掛けがね、くるゝとめてのし上がれば

(評釋、六四) まづ逃げ路の戸口をふさいて掛かるところ、いかにも眞劍の勝負をでもする毛剃の大膽を見るに足りる。ことにのし上がるの一語はいかにも毛剃の偉大なありさまを想像させる。

(本文) 小女郎あわて、「これ、九右衛門さま、魚と水との御なかま、何のうそがござんしよ。このわり符は二三日中私がきッと渡ししましよ……………」

(評釋、六五) 二三日中にわたすといふ、それだけ、實を述べて却って虚と見られる。

(本文) 「……まづ歸つてくださんせ」と
 (評釋、六六) この語、只毛剃を小女郎等が歸らせやうとのみするやうにしか取られぬ。

(本文) おし出す小がひなむづと取り、
 (評釋、六七) また此「おし出す」の語が申し分無い用ゐかたである。おし出すと云ふ、猛烈な舉動を示す語が有るために、小女郎が力に訴へても、毛剃を排斥しやうとの意氣が見える。

(本文) 「えゝめんどうな」と簀子にどうと投げつける。
 (評釋、六八) 小女郎がやゝ腕力となつた、それに應じて、毛剃も行きがよりから又腕力沙汰となつた。

(本文) 「卑怯な。女をいためずとも、云ふことは身に云へ」と脇ざしに手をかくれば、「や、そりを打つておどしても わり符を取らずにおかうか」と すばと抜けば惣七も とびすさつて抜き合はせ、

兩方うでは狂はねども、細目もよわきふるすのこ、まばら柄ちたる
 玄のべ竹、ふんごむ足を踏みためて、右へはらへば左へかぶり、左
 を切れば右をふん込み、うちあふ切ッ先はるの日に、とけ行く氷踏
 むごとく、小女郎は中に身を すつるはきだめの歙簀、もつて開い
 て、あひ手のはもの 打ち落とさんと立ちまはる 裾をすのこに玄
 がらみて、かッばところぶ頭のうへ、ひらめく及ぞあやふけれ。

(評釋、六九) こゝら二人が奮闘するありさま、その巧拙を云ふとすれば、われくは實に近松のこゝらは實に不思議と思はれるほど拙劣であると評するに躊躇せぬ。

實にこゝらの書きかた、何の取るところも無い。なるほど錯綜した局面を描いたのである。困難なところも有らう。が、とにかく拙である。われくは云ふ、奮闘の描寫、このやうな場合ひを主題として、近松は進も馬琴に及ばぬ——どころか、足もとへも及ばぬ、

と。是は折りを得て、又くはしく説く。

(本文) あたり隣に聞きつけても、恐れてわざと知らぬ顔、たまりかねて惣左衛門、何をいふも子の可愛さ、「わりふを渡す。怪我すな」とおもてへまはり、かどの戸を、押せど、叩けど、あくにこそ、くるゝの穴から覗いては、「はあゝ、悲しや、あぶなや」ともがいて裏へ駆けまはる。

(評釋、七〇) 局面がやうやく此邊でやゝ活動するやうに爲つた。背に腹は代へられず、子の危急を見るに忍びず、乃ちわり符をかへさうとひしめくところ、たしかに親心はあらはれた。

玄かるに、押して入らうとするその戸には毛剃が既にびまりをしてある。それ故、惣左衛門はうろたへもし、あわてもする。その、びまりの付けられてあると云ふ事實は老父の周章を示す形容の好材料で、まへに毛剃が戸にびまりをしたといふ事實を更に活かして此

やうに二いろに用ゐたのはさすが器用な筆である。

(本文) 内には小女郎障子をはづし、なかの楯。

(評釋、七一) 小女郎が二人の間にはさまり、楯となつた。

(本文) あひ手の刃物はたかをおさへんと 前にふさがり、うしろに開き、すきまを見て打ち付くる 足踏みためず 障子をわが身に負ひながら、どうと伏せば、九右衛門すかさず掛くるかた足を がばと踏ん込み、小女郎がうへに 重なり伏し、障子どしに突かんとす。突いたらひのれ一うちと うへにきらめく惣七がきッさき、あやふさ中の危ふさなり。

(評釋、七二) 右、ほとんど一刹那とも云ふべき時間内のいろくゝの變化を書きあらはしたのであるが、とにかく拙である。前にも云つた如く、近松は此様な修羅場の描寫には極はめてくゝ不得意で、なかゝ馬琴の足もとへも及ばぬ。この邊の句に對して、われわれ

は只近松を目して、此種類に於いての初學の初學と云ふのみである。
(本文) おやはあこがれ、となりの壁打ちこぼちく手の出るほどにかべしたち引き破り、わり符を出し、ひらめかす親の手つきの物云ふばかり、

(評釋、七三) あこがれ

あこがれは右のやうな所にはあまり適當せぬ。あこがれは只思ひ慕ひこがれるとの義であるものを、こゝに用ゐたのは無法である。なるほどその急場を示すとしてはあこがれなどその音調はよろしい。近松は直ちにその音調にのみ心を奪はれて、それとも無頓着でか、あこがれとしたので、とにかく不注意である、それでなければ無學を示す文である。

こゝにはあかくといふ類の語が、その意味から云つても音調から云つても適當するのである。他にはいらつ、いらだつ、杯もある。が、こ

れらはあかくよりは劣る。

(本文) 惣七きツと見つけ、「やい九右衛門、聊爾すな。」

(評釋、七四) 聊爾すな

疎忽するなの義、惣七の右の語は簡單で、いかにも戸口に相當して出來た。

(本文) 「わり符わたす。」

(評釋、七五) 右惣七の語、わり符についての決心の表明、これも

簡單ではなはだ宜し。

(本文) 「云ひ分あるま。」

(評釋、七六) 右惣七の語、相手の決心の推定、これも簡單で、ま

た宜し。

(本文) 「こつちも挿す。」

(評釋、七七) 右惣七の語、自分も刀を腰へさす、すなはち争鬪を

やめるとの意。これも簡單で、またよろしい。

(本文) 「さア挿せ」と

(評釋、七八) 右惣七の語、毛剃も刀ををさめるとの意。これも簡單で、またよろしい。

(本文) 鞘にをさめて眼前に 助かるいのちも親の慈悲と 手共に取ッておしいたいさく、「これたしかに受けとれ」と

(評釋、七九) これく。の句は毛剃に對する惣七の語。

(本文) わたせばとくと見届け、「むゝ、別條無い。受け取った、これ惣七。たがひに命がけの身すぎ。たましひを磨くなかまの法。

切り結んだつるぎの下から むつまじうなるも魂。遺恨はのこらぬ。氣苦勞の有るかほ色ぢや。山がくづれかゝつてもうるたへぬ心持たねば、此商賣は爲らぬこと。いつもの時分にまたくだりや。國で逢はう」といとま乞ひ、出でゝ行くこそこのふとけれ。

(評釋、八〇) 右竹をわったやうな毛剃の性質を書きあらはした。なるほど理想に走り過ぎた書きかたではあるものゝ、さて必らずしもわるくは無い。

(本文) 惣七小女郎を引きおこし、

(評釋、八一) 引きおこし

この語が有るばかりで、いかにもくく小女郎がたふれ伏して居たところのおもふきが分かる。

(本文) 「今のを見てか、かたじけない親の慈悲。この壁のくづれをせめて拜みや」と泣きければ、

(評釋、八二) 壁のくづれを拜みや

親の姿は見ることを得ぬ。まかし、忝さは溢れるばかりである。それゆゑ、せめて壁のくづれをでも拜めとの言葉、さすが是は名句である。

(本文) 「あゝ有りがたい御恩徳。慈悲心を受けながら、かべ一重あちらの 舅御の御面體見ること叶はぬか。はあゝ、息切れて物云はれぬ。水でも湯でも」とくるしめども、茶碗一つ、杓一本 あら氣の毒、何としよと 云ふ聲となり響き入り、茶碗にぬる湯、かべ越しに なさけの親の手つきを見て、

(評釋、八三) 杓一本

檜杓一本の畧。

(評釋、八四) あら

あらぬ、すなはち無いと云ふのを間投詞のあらに通はせた。

(評釋、八五) 氣の毒

今いふ氣の毒の原語、その義は今のとちがふ。すなはち、こゝらのは「瘡にさはる」、もしくは「氣をわるくする」、「不快になる」などの意。

(評釋、八六) なさけのおやの手つき

壁を手に手だけ出して、親が湯をくると云ふこと、今から評すれば只極端な趣向とより評する語は全く無い。

(本文) 「はあゝ、冥加ない、ありがたい」と 夫婦わつと泣き出だし、茶碗にすがり、手に縫り、「御さかづきとも、くすりとも、氏神の御神酒とも このうへの有るべきかと ふたり頂き、飲みかはし、「申し御手は取れどもかかはは知らぬ。私は御ゆるしなけれど御前のよめ、どうぞ御機嫌なはして惣七さまとも言葉をかはし、一期の見はじめ見をさめに 御顔を拜ませください」と 舅の手をわが顔に おしあてく泣くなみだ、おやのなげきもあらはれて 腕ふるふぞあはれなる。

(評釋、八七) 右無理な趣向ながら、その無理な中に多少の光澤をばあらはした。只、取り立てゝ云ふほどでも無い。

(本文) 盡させぬなみだの手を振りはなし、かね財布ひとつ投げ出だし、はやう出て行け〜と云はぬばかりにかたをかたをしふる手さへ引き入るれば、今は親よ舅よと たよるなごりも切れたるかた、又絶え入って泣きけるが、

(評釋、八八) かね財布：なげだしこの一句親の慈愛を示した。

(本文) 「なう、不孝至極の惣七に これほどの御慈悲、路銀までくださるゝ御心をむくは猶不孝」と 財布をめをとがいたいき〜、「はや、人がほも見えまい、これがほんの名ごりぢや」と 互ひに身用意、すそ引きあげ、泣く〜おもてに出でけるが、となりの門をはるかに見入れ、「やれ、姥、たい一目 おやぢさまを小女郎に見せてくれ、路銀の御禮も申したい」と 小聲に云ふも聞きつけて、姥がいつれば、惣左衛門、

(評釋、八九) たい一目おやぢさまを小女郎に

愛するわが妻小女郎、親には嫁たるべき小女郎、それゆゑ今の別かれと爲つても一目せめて親の顔を小女郎、にも示し、また小女郎から一言の禮を述べさせたいとの意、この場合ひの惣七の心情としていかにもさうである。

(本文) 「こりや姥、なにをとぼ〜する。今のかねは隣りの道具賣った金、すぐにとなりへ投げ込んだ。禮受ける筈が無い。惣左衛門子供には あさなひこそ教へたれ、非道の身過ぎする子は持たぬ。あさましや、ふびんや、天道も、日月も、神も、ほとけも 罰は當てはなされねど、こちらから罰のしたへ あたりに行くとは知らぬかや。」

(評釋、九〇) 今の金は：

惣左衛門は故さら斯く他人行儀に云ひなした。その意中は、その、

わざとさうである丈いとくくるしいので、作者近松はいかにもわざとよくさう書きなして、感動を深からしめた。

(評釋、九一) あきなひこそ教へたれ。

右それとなく惣七の不行跡に對し、その面當てとして云ひなした言葉。

(本文) 「生き身には餌食有り。人間一人うまるれば、乳房といふ天道の御扶持かた。正道の家職つとむれば、分限相應々々の天の乳房がそなはる。正道にない金まうけ、榮耀するやうなれど、天道の乳首にはなれ、三界の捨て子となり、のたれ死にするはいくたりか。(評釋、九二) 以上すべて惣左衛門の言葉のついき。さしたる難句もなし。

(本文) 「猫は火燵こたすに寢臥する。犬は土邊つちべで物くへど、火燵な齧の眞似せぬは、身の分量を知つたるゆる。畜類に劣つた身のはど知らず、

なれの果てを思はれ、不愍さに腹が立つわいや」と包みかねたる涙なり。

(評釋、九三) 以上惣左衛門の言葉のついき。取り分けて賞美すべきは「不愍さに腹が立つわいや」の一句。いかにも情致の極所をあらはした、それである。

(本文) 「やい、惣左衛門が子になりたくば、手鍋さげても正道に淺ましい死をせぬやうに命まつたう、何とぞ親をさきに立て、惣左衛門が葬禮に喪服いんぷくを着て、供して見せ。その時はわが子ぢやと棺の中からよるこぶはやう失せう」とばかりにて、わッと泣き入り、泣く聲の耳に残るをかたみにて、わかれ行くこそ。」

(評釋、九四) 以上惣左衛門の言葉の最終、叱りはししながら、なほ子のため未來の恢復をすゝめはげますところ、いかさま親の情である。さて、まかし、こゝにさしたる難句も無し。

下の巻

惣七小女郎道ゆき

(本文) こひと小袖は一もやう。身に引きしめて合ふてこそ 寢て
ゝるもよく、着てゝるも よくく見かぎり果てられて、追ひいだ
されしわがやどの あたりに顔を見られじと 戸口もみせも明けや
らぬ 星も夜ぶかきおやの恩、かさねて着たるそのときは いと
心も軽かりし

(評釋、一) よくく

着てゝるもよくと云ふのを副詞のよくくに掛けた。

(評釋、二) この邊の句は拙である。取り立てゝいふ所の無いの
みならず、むしろ支離といふほどである。いかなる了簡で、近松が
時々このやうな亂暴な、無責任きはまる文句を作ったものか、われ

われは實に解し得ぬ。その意味のごときも、それゆゑ、姑く説明せ
ぬ。説明を勿體らしくするのは狐につまゝれて鳥を沼とさわぐ流儀
となるので、古人崇拜家の惡弊におちいる丈のことである。

(本文) けさ肌うすく行く道は 肩脊くるしき身のゆくへ、心がら

とは云ひながら、なさけなじみの京の町、三條小橋で知るひとに
粟田口かと思ひしも ささへ心の關寺に 身のおとろへのはづかしさ。

(評釋、三) この邊も相變はらず拙である。まかし、こゝでは云ふ
べき所が有る。

評釋第一で扱ったあたりは拙な句と云ひながら、まかした甚し
い不都合な句法でもなかつた。まかし、このけさ肌うすくの邊から
は實に無法である。

これでも、實に近松その人の作か。われくは只かどるく。こゝ
に吾々は此邊において、聲を大にし、筆を磨ぎすまして、近松はも

せよ何にもせよ、攻撃する丈は攻撃しなればならぬ。近松に只これまで盲目的に崇拜されたのみである。われ／＼は近松のこゝらの無法な文句がそれら崇拜者に痘痕すなはち笑靨と云ひたゞへられて、あはれわが今後の文壇にわるい見本を残すがために保存されるのを、實に悲しみ、また憤慨する。われ／＼が今ひとり世論に反対を發表して、こゝらの近松を攻撃したからとて、なるほどそれで近松の天性とも云ふべき無責任（われ／＼が前に發表したとはり）の暴露とは爲らう、が、決して近松の天才の没却とは爲らぬ。われ／＼の決心はこれである。評釋と括弧を立てたのはやゝをかしい、そこだけは讀者の寛大なる御見ゆるしを只願ふのみである。

(評釋、四) 肩脊くるしき身のゆくへ。此ゆくへといふ語がすこしも利かぬ。また、もと／＼肩脊と出した、その必要は一つも無い。有るか。どう考へてもわれ／＼は有ると見

ぬ。此句すなはち無法の句である。

(評釋、五) なさけなじみの。近松の此句は何の意味か。

句の構造から考察するとして、なじみはな（無）といふ語の掛け詞として、なさけに對して働らいて、居るとしか見えぬ。然り、それより外、下すべき解釋は無い。

さうすると、その意味をひろげて云へば、情ないなじみの云々となる。なさけないなじみと云ふのを常識から解して見れば、情、すなはちシカシイコ、その無いナシミとなる。すでにナシミといふ、それと同時にナカカナイといふ、つまり、それならば、それは意味の衝突である。なせといふに、ナシミといふ語には既にナカカの有ルモノとの意味は當然もって居るものを。それ故に是は意味を衝突させて、すなはち意味を自殺させたのである。

玄かし、出来るだけ又別の解釋をも求めて見たところで、斯ういふのが一つ得られもする。すなはち不運不幸に終るやうな、このやうな、いかにもナカケナイナシ、まづ是で、そのナカケナイは男女兩人のナシミの運命に對する形容詞で、決して男女兩人の心情に對する形容詞でない、と、これである。玄かし、それをさう解するのは、只さう解したと云ふ丈で、さう解すべき、當然の、聯絡の有無をまるで思はぬ解釋に過ぎぬのである。なせと云ふに、そのナカケの下に直ちにナイのナ。即ち掛け詞として普通の習慣によつて掛かると認められるものが既に有る、それにも拘はらず、何が何やら其意味を没却してそれを理解に受け取らず、かへつて他の性質の語、すなはち(運命ならば)運命、それに對する形容詞として見るものとすれば、それは二言に及ばず、語法の慣例を一切思はぬ無法な解釋なのである、この故に。

(評釋、六) あはだ口

此あはは地名の粟田口の粟を、他方面にまた逢はんといふ語、それに掛けるつもり用ゐなした。玄かし、また、これも些し無理である。

(評釋、七) せきでら

心のせき(急)と掛けた。

(本文) 今の小町屋惣七は 博多小女郎がならし竹、いつも心に掛けておく親の甲斐絹にあやにしき

(評釋、八) この邊はとんどわれくは云ふに忍びぬ。たゞ歎息する。ほとんど只無茶苦茶の語句をそもくいかなる心で近松は斯うまで聯ねたのか。

(本文) もはや都を見んことも またと爲るまい かぎりと云へば、ともに泣くく うきくる縞子の 絲の切れざるべんがら縞の 愚

痴なさらくさうではないに、らしやも無いこと云はしやりんすな。
(評釋、九) この邊もまた實にはなはだしい。まかし、こゝは、そ
れながらも、解釋を下さず過ぎされぬところも有るまゝ、一應は
解釋だけ下してかいて、さてそれから批難する。

(評釋、一〇) うきくる縞子

こゝでは憂き苦勞を黒縞子のくるに掛けた

(評釋、一一) いと切れざるべんがら縞

べんがら縞、すなはちべんがら縞、すなはちその織り物は絲が丈夫

ゆる絲の切れざると出したのである。

まかし、絲の切れざるといふ句を用ゐる必要はどこに在るか。そ

れは全く無い。

(評釋、一二) 愚痴な

こゝに愚痴なといふ語を出すからには、どうしても前後そのいづれ

にでもよろしいが、その語と當然連なる意味もしくは音の有るべき
譯である。

まかるに、それら一つも無い。愚痴なは前のべんがら縞、もしくは

は後のさらくその何れにも何の聯絡も無い。思へば無責任はいよ

く進んでいよく出る。

(評釋、一三) さらく

これは更紗に掛けてある。まかし、隣れむべきはどくるしい掛け方

である。

(評釋、一四) らしやも無いこと

このらしやは羅紗を瑠と掛け、すなはち瑠も無いの意である。前の

二三よりは宜しい。

(評釋、一五) 云はしやりんすか

このりんすは綸子に云ひ掛けた。云ひかけた、まかし、只云ひかけ

たと云ふ丈である。

(本文) さきへ行く子に尋ねれば、ぬけ参宮のかしら字が 耳にと
いまる神心、まもりたまへと再拜の 袖にかぐらの鈴鹿山 八十瀬
の川にぬきそめし おれとそなたが初戀ひに 二世も三世もかはら
じと のぼりつめたる坂のした。今おちぶれの身と知らば、ざつと
淺黄に染めうもの。うらかもて無い心から にせ紫の色わるう や
つれ顔見るかなしやと 玄ぼる袂のなみだのつゆ、のべの草葉も色
づきぬ。泣いて心を見だせとか。方さまならで、たのむ博多の少女
郎がなくなば 世帯の花もちりめんと こんな姿にせまいもの。ぬめ
まぼろしの此世から 未來々々も夫婦ぞと すがり付いてぞ泣き居
たる。

(評釋、一六) 以上まるで愛想の盡きた文句、あれくは只奇怪に
おもふほどである。もちろん吾々一個の考へではあるが、まさか石

こゝらの文句は近松の眞のものではなく、あるひは音曲に掛けると
なつて何人かゝ無法に改竄したのではあるまいか、と、只これより
外は云へぬ。もとより評釋を施すほどの難所もなし、われくは此
邊については是だけに云ひといゆる。
序ながら云ひ添へる。右の中のぬめまぼろしは続を夢とかよはせ
たのである。

(本文) 關の御地藏は親よりましと聞くなれど、まさらぬ此世のし
う 御の きげん直してたまはれと たのみをすぐに救ひ乗せ、と
もに助かるかごかきの かごやりまじやうと歩みくる。

(評釋、一七) しうと御のきげん
親惣左衛門が別かれに際して示した舉動一切に對しての言葉。

(本文) 尾張へ行くもの、さきの宿まで駕籠賃いくら。
(評釋、一八) この邊惣七等と駕籠かきとの應答であるが、さして

際立たせた書きかたでもないゆゑ、わざと對話の符號（「」）を用ゐなかつた。

すなはち、右、尾張へからいくらまでは惣七の語。

（本文） 石薬師までは道は二里有る。駕籠賃こるり。

（評釋、一九） 右惣七の間ひに對して。駕籠屋の答へ。こるりは錢百文をさしていふ駕籠かきの符牒。

（本文） こるりは知らぬ

（評釋、二〇） 右、惣七の挨拶。

（本文） 知らずば錢百

（評釋、二一） 右、かど屋の答へ。

（本文） それは高い

（評釋、二二） 右惣七の言葉。

（本文） まけて行きましよ

（評釋、二三） 右かど屋の言葉。

（本文） 七十く

（評釋、二四） 右惣七の言葉、七十文にねぎつた。

（本文） よいね負けたと駕籠かゝるす。

（評釋、二五） 右、よいね負けたは駕籠屋の語。

（本文） 道はひと筋、かど二搦。ふたり思ひをだきのせて、打ち見るよりは肩おもく、小川ぢや、そこせい。肩せい、まっかせ。杖つき坂、小谷大谷うちすぎて、日かげもわれも行くそらの末はてしなき旅ぢるも、きのふけふとは思へども、みやこを出で、日かすさへ四日市にもほど近き。追ひ分けにこそ着きにける。

（評釋、二六） あたりまへならば、この邊は道行き文句の入るところとて、随分かざりの有る語句の出さうなところ、又出るのが却つてよろしいのであるが、こゝでは更にそのやうな所も無し、ほんの

手を抜き切った語句をたゞ列べたとしか云へぬ。
(評釋、二七) 小川ぢやそこせい。肩せい、まっかせ。そこせい、肩せい、まっかせ。以上皆すべてかどかき走るに當たつて發する掛けぐる。

(評釋、二八) たびぐるも きのふ きのふ (昨日) はそのはじめのきを肩に掛け、すなはち旅衣の縁語とした。

(本文) まさしかれと心中に たのみをかけし辻うらの かどかきが言葉のはづれ、惣七が胸にこたへ、かよらぬ繩に氣を縛られ、むかふの人はおるれども、わが心から身をすくめ、おりもやらず、「これ、小女郎。まづそなたから乗りかへて さきへ行きや。」「そんなら御さきへ参ります。」「四日市とやらで待つて居よ。かどの衆、はやう連れましてや」と 下り居のかどの河合村、小女郎は何の氣も

つかず、かどに任せて乗りかへ行く。石薬師からくるかどの者聲かけて、「女中のつれ衆のせたかどは是か。うちも聞いた、かどかよい。」「おつと幸ひ、さア立てい。旦那どの換へます。おりてくだされ」と かどのすだれを打ち上ぐる。相手はかどを早かりて、ひッさげたる風呂しき包み、身がるい打扮の あはせ、股引き、こはせ脚半に身をかため、腰に早繩、見るからぞつと惣七が よを見る顔はわが顔を見せじと忍ぶはゝかぶり。心ばやにかり立って、かこの衆大儀とのりかゆる。かどのすだれ わが手に取って引きおろし、「いそぎの者ぢや。増しやらう。さア駕籠やつた」といふ聲は人の耳にもふるひけり。「小町屋惣七、捕つた」と聲を打ちかけるかどに撚り芋のはそ引きあみ、中にこれはと腕けども、つばさ無ければ飛ばれもせぬかどの鳥かや惣七は 中に音を泣くばかりなり。
(評釋、二九) この邊すこしも取り立てゝ褒めるべき所も無し、も

し強ひて何とか云ふとすれば、やはり只の拙、たゞ斯ういふのみである。語句にも難澁なのは無い。それゆゑその解をも與へぬこととする。只かごかよいは駕籠換へよやの意といふ丈をいふ。

(本文) かねて合ひ圖の小屋の者、十手引ッさげ、くるくるとおッ取り巻き、「とがは心に覺えが有らう。その方ともに仲間八人と分明の仰せを受け、われく捕りにむかふたり。尋常に召しとらるゝか。踏ん付けて繩かけうか」といへども念佛のこゑのほか何のこたへあらざれば、「こゝは途中。つぎの宿までこのまゝ連れゆき、なは掛けて國へ引け。それ駕籠やれ。」「こゝろえました。とても遣れぬ命ぢやに、こゝで繩をかゝらいで」とつぶやきく立ち寄つて、かごかき上ぐればがばくとかごから洩れて流るゝ血は大地に毛氈引くごとく、のりてはうんく呻くにぞ、「やれ、かごの内て自害した。出あへく」と駕籠投げ捨て、おそれてそばへ寄り

付かず。役のものども立ちかゝり、あみ引きのけ、すたれ上ぐれば、こはいかに、一尺五寸切及ぎはまで突き込んで及ぎは左手のわきばらに、むしのいき、目はぎろく、呆れてせんかた無かりけり。

(評釋、三〇) この邊について云ふべき所もまた前項と同じである。(本文) かゝるところへ小女郎が身にもかゝったまはり繩、引かれてくる身の悲しさよりこの有りさまを見るかなしさ。流れし血しほふみしだき。駕籠のうちへ顔さし入れ、

(評釋、三一) かごのうちへ

この一句小女郎の情の深さをまづ示した。

(本文) 「小女郎が來ました。わしも今まばられた。繩かゝりましたぞや。ゆふべ迄も一つまくらに起き、臥して、一所と契りかはしたに、こなんひとり先立って、ながらへ、ものを思へとか。くるしうござる、じゆつないか」と云ふも涙にかき暮れて、前後もお

ばえず泣き居たり。

(評釋、三二二) こなん。

こなんの畧。小女郎から惣七をさして云ふ語。

すべて、此邊の語句、いくらか前よりはよろしいが、さりとて衰めるほどでもない。

(本文) 惣七くるしき目を見ひらき、「おゝ、繩かゝったか、小女郎。國法をやぶり、親に不孝の大悪人、廣い世界にせばめられ、所のすまひもならぬ様に身を持ちなし、落ち付くかた無く、あてど無く、この所まで迷ひ來て、天の網、地の繩に、からめられし此惣七。故郷へ引かれ。死罪にあはれ、一門のつらに血をそゞぎ、親へは不孝のうはぬりと、思ひさだめての自害。毛剃九右衛門が海賊にくみし、今まで身にまとひし繩子ちりめん、そなたに着せたあやにしきの冥加に盡き、感かふる身になりはてた。夫につるゝならひと

て、そなたに逆繩をかけ、名を流させ、うき目を見するは、わが一心より事起こる。この惣七が無かりせば、今のうき目は見せまいもの。ふびんや、嘸かなしかる。ながくも添はぬものゆゑに、命のかいまでなしたよな。ゆるしてたもれ小女郎」といふこゑも早いき切れし、たのみ少なに見えにける。

(評釋、三三三) いのちのかいまでなしたよな。

命の限りまで遂にちぎりおはせたとの意。かいは限りの義。

この邊の文句もさして云ふほどのこともない。

(本文) するどく見ゆるとり手ども。獄屋へわたしては叶はぬ事。

人は互ひ。両方名をり惜しませよと了簡するこそやさしけれ

(評釋、三四) 獄屋へわたしては

獄屋へ入れてしまつた上は互ひに名残りを惜しませる、杯といふことも出来ぬゆゑの義。

(本文) 聞けば聞くほどなほ悲しく、
(評釋、三五) 右、小女郎の心中。これから稍見るべき語句ともなる。

(本文) 「その起こりは誰がさすぞ。小女郎を人手にわたすまいとの御心から おやごに代へ、命に代へ、女房にもってくだされし。それはどなたしが可愛いか。冥加ないとも、かたじけないとも、御前に禮をいふことば、日本はわるかな事、から天竺にもよも有るまい。この手が自由になるならば、をがんで死にたうござんす」と 夫の膝に顔さしよせ、消え入り、絶え入り、むせかへれば、この世で逢ふは今ばかり、來世も變はらぬめをとぞや。なむあみだぶつ、みだぶつの ころもかすかに脇ざしぐと 抜くより早くいき絶えたり。
(評釋、三六) この邊は前とくらべては稍よろしい。まかし、随分寸鐵殺人の短句に巧を示して居る近松その人の筆としては、さて又

此邊の文句とても、贊評を寄せるべきところはさう澤山も無いのである。こゝらの句に云ふやうな云ひまはしは、われくは本心で確言するが、大抵のものに出来なくはない、少なくとも文筆をもつて世に立つもの、その大抵には。

その中で只一つ、只それ丈はさすが近松の句であると、特に取り上げて云へるのが有る。すなはち、「この手が自由になるならば、をがんで死にたうござんす。」

(本文) 小女郎わつと聲をあげ、「待ってくだされ、連れ立ちたい。おそいか疾いか、殺さるゝわが命 皆さま御慈悲に今こゝで 殺してくだされ、ころして」と 狂ひ、わななき、かけめぐる。かゝる所へ 檢非違使の何某まっさき立ち、こゝかしこで召しとつたる海賊ばら、傾城まじり細付きども 一度にかしこへ引き來たる。檢非違使一札かしひらき、「めしうど共に申し聞かする趣き、有りがた

くも承はれ。一つ、沖がよりの大船に通路を求め、浪をくいり、水底を抜け、舟へ近づき、諸式をうばひ取りし事、國法を背く大罪、武士に仰せて死罪あるべきところ、當今御即位の御よるこびに因つて、死罪一同を勅免なる」と聞きも果てす細つきどもよみがへたる心地して、一度にあつとぞいさみける。

(評釋、三七) 當今

今上皇帝の義。むかしは此語が主として行はれた。

この邊の文句、また前々と同じく、すこしも取るに足らぬ。さりとして、その趣意はと云へば、なほまた取るに足らぬ。文句すべて全曲の終りに近づいたところで、ほんの餘炎ともいふべき位、只いさはひも何も無くなつてしまつた。

(木文) かさねて傾城どに打ち向かひ、「汝等はながれの身。さやつらに添ふはつとめのならひ、とがにあらず。行くさきとても構ひ

無し。繩をゆるせ」とありければ、かしこまつて雑色共、立ち寄りほどく繩のあと 吹きさすり、撫でさすり、

(評釋、三八) 吹きさすり。撫でさすり。

この句繩に縛られて居て傾城どもが痛みを感じて居たところをおもふきをそれと無く示し、あはせて又その繩を解かるゝや否やたゞちにその場所を撫でさすると云ふ婦人かたぎをあらはし示した。

(本文) 「王さまのいきかたは又格別なものぢやないか。此手が自由に爲つたれば、くるわの門を出たやうな」と笑ひよるこぶ其中に小女郎は始終くく涙とためかねたる顔ふりあげ、「つれ合ひの惣七どの かゝる御慈悲を待ち受けず わたしを捨て、この世あの世へ飛び去りて、比翼の鳥の片羽がい、今がはかたの此小女郎、いきて甲斐無きいのちぞや。御慈悲にころしてたべのう」と聲も惜しまず泣き居たる。

(評釋、三九) われ／＼は此邊に至り、酷評を下すことの、全く已むを得ぬまでになるのを殆ど好まぬ。が、いやしくも評釋と題した以上、是までの多くの評釋者が行ふことゝ極まつたやうな只褒める、只稱歎するといふやうなものを、我慢して書くことはできぬ。

「この世あの世へとび去りて」の一句について先云ふとする。右は「この世をあの世へ」とすべきものである。之かるを、さうせず、をを畧したとすれば、是非ともそれを畧す丈の必要が無ければならぬ。

之かし、その必要は決して有るのでない。

このやうな場合ひ、をを略さなければ爲らぬ必要といふのは、それをさう畧さなければ音律の不調和をおこす時に限る。之かるにこゝは其やうな場合ひでない。をの一音はかるかな事、よしやその上二音ぐらゐに爲つても決して何の不結果を音律に及ぼすことはない。

すでにさうならば何もことさら好んぞそれを畧すにも及ぶことでもない。すなはち近松は不必要な場合ひに不必要な手段を行つたのである。

(評釋、四〇) 飛び去りて

此語もえらみ方がわるい。なるほど、その次ぎに比翼の鳥といふのが有るその縁語として飛ぶとも出したのでもあらうが、それとしてもわるい。飛ぶといふ語はその裏に持つ意味に急速なはたらき、このおもふきを持つのがその先天的である。なるほど、多くの、すべての場合ひには急速なはたらきでない飛びかたも有るであらう、之かし、それは殆ど有ると見なされぬほどのものである、飛ぶ、と耳に聞く、心に理解すると同時に、その飛びかたといふものが一瞬の速さであるとの會得はかならず誰の心にも出来る――のが全く萬人が萬人皆である。

こゝで惣七が自殺したのを急速といッてしまへばそれ迄であるが、とにかく絶命といふことの有りさまを形容して、飛ぶ、飛び去ると云ひなすのはどうしても常識に照らして不相應の感じをおこすやうになるのは争はれぬ。すなはち、不相應の配合である。不相應の配合、それゆゑむしろ滑稽のおもふきがあらはれる。絶命といふことをあの世へとび去ると聞いたところで、それは不相應な配合それゆゑ滑稽なおもふきの現れるのはやむを得ぬ。玄かるにこの邊の叙事の性質から云ツても、滑稽といふことの趣きはとても許されぬところである。それを、こゝでは無理に用ゐた。その文句は、それゆゑ、すべてに於いて不都合と云はなければならぬ。

(評釋、四一) 今がはかたの小女郎
 此今がはかたを近松はその前の語片はがひと互ひに似よつた音の縁語として用ゐたのであつた。

なるほど、さうして近松、こゝでは音調に重きを置いてさうしたのでもあらう。が、只無理である。無理な巧みを求めたのみである。

(評釋、四二) たべ、のう
 たべとのうを斯うつゞけて用ゐる類例はほとんど無い。この句に、さう用ゐたのは只多言を要せぬ、無法である。

(本文) 「おゝ尤もく。夫惣七同類とは云ひながら 色にまよひし若げのいたり、罪の輕重明白たり。自害せしはその身のふじやう。汝をつとになり代はり、親惣左衛門に孝行盡くし、後世をとふらひ得さすべし。勅にまかせ、きやつばら、それ退ひ拂へ。」重ねて悪事をとめ灸の顔に入れすみ、入ればくる、耳そぐ、鼻そぐ、血みどろちんがい。おひ拂ふ隣國他國、幾萬人博多小女郎が物がたり、かたるも聞くも後代のながきうはさを残しけり。

(評釋、四三) 血みどろちんがい。

血みどろを強めていふ語、血だらけの義。今日ではやうく廢語となりかけて、もはや永くは活用されるとは思はれぬ語ではあるが、元祿のこの時代から斯うすでに用ゐられたものではある。
(評言) 以上引きくるめたとこゝろで、われくは實に左のやうに言ふ。曰く

「此博多小女郎浪枕、その末段惣七小女郎道ゆきは其以前即ち中上あたりとは別人の作で、中、上はたしかに近松門左衛門その人の作であるが、他は眞に近松の作とは思はれぬ。」

われくは只右の如くに。異説をいだかられる人も有らばわれくに示教を咨まぬやうに願ひたい。

評釋博多小女郎浪枕 終

要目索引

(博多小女郎浪枕)

上の卷

襷染としての船歌……………	三	頁
近松が其作品に對しての不謹慎……………	十一	頁
近松に對する今日の世評の過褒……………	十二	頁
近松と西鶴と……………	十七	頁
和文に於ける、近松の智識の不充分……………	十八	頁
智識の欠乏を補ふに足る近松の天才……………	十九	頁
現代の人類が自然音に對して有する鑑識……………	二十三	頁
一の便宜手段だけの、從來の發音摸寫法……………	二十五	頁
自然音を寫すべき文字の絶無……………	二十六	頁

天才の天才たる所以……………二十七頁

かきくけこの先天的意義……………三十頁

なにぬねのの先天的意義……………三十一頁

鬼といふものゝ啼き聲……………三十七頁

雙盤の音律……………四十一頁

言語哲學から觀察してた[○]縦[○]行[○]とか[○]縦[○]行[○]との共通の性質……………四十三頁

き[○]み[○]といふ語に於ける、市川團十郎などの發音……………四十五頁

日本の東北地方、又は東京邊において、發音に際して
た[○]行[○]とか[○]行[○]とを共通ならしめる現在の事實……………四十五頁

支那において、發音に際してた[○]行[○]とか[○]行[○]とを共通なら
しめる現在の事實……………四十五頁

英、獨に於いて、た[○]か[○]兩行共通の同一事實……………四十六頁

つ[○]く[○]つ[○]く[○]の本義……………四十七頁

尊大の語、うん[○]た[○]ち……………四十九頁

見[○]え[○]い[○]ろ……………四十九頁

ば[○]い……………五十頁

た[○]ま[○]ぎ[○]り[○]や……………五十一頁

夜[○]ざ[○]と[○]く[○]な[○]つ[○]て……………五十一頁

み[○]だ[○]、及[○]び[○]ま[○]ん[○]じ[○]り……………五十二頁

ま[○]ん[○]じ[○]り[○]は[○]ま[○]ど[○]ろ[○]み[○]の[○]轉[○]訛……………五十三頁

さ[○]な……………五十四頁

よ[○]か……………五十四頁

わ[○]た[○]い……………五十五頁

茶[○]出[○]し……………五十七頁

地名を人名とする口任せ……………五十九頁

親[○]に[○]連[○]れ[○]て[○]の[○]句……………六十頁

明治の演劇改良論者が「勸進帳」に施さうとした改竄……………六十二頁

折りのぼりとかりのぼり……………六十四頁

おんども……………六十五頁

やらの轉語のいる……………六十五頁

はんおどり……………六十六頁

ことばん……………六十六頁

石御器……………六十六頁

いっかけたの本義……………六十七頁

母語の音調を受け傳へる轉語の特質……………六十七頁

薩摩二さい……………七十一頁

方言としてのがい……………七十三頁

な行と半濁のが行とを混用する、長崎地方の習慣……………七十三頁

長崎の方言としてのなが……………七十五頁

九州のうち二三ヶ國の方言、い横列で終る形容詞の語
尾をわ横列で終ること……………七十六頁

くさ……………七十六頁

ひつつまんで杯の語を巧みに用ゐた、近松の天才……………七十八頁

こりやの轉語としてのこりやん……………八十頁

こそから轉じたくさ……………八十一頁

舟の忌み詞としてのわれる……………八十一頁

舟の縁起詞としてのはしッた……………八十一頁

やとひと……………八十二頁

かるはれ……………八十二頁

むぎうらしげ……………八十三頁

こがいな……………八十四頁

びたひらな……………八十五頁

ともとも……………八十六頁
 間投詞ようく……………八十八頁
 口をまた重ねた、近松慣用の文飾……………九十頁
 まっかせ……………九十三頁
 近松が大多忙の状を叙した筆の巧妙……………九十六頁
 名句、はちまさ、その他……………九十八頁
 まっかせごゑ……………九十九頁
 修辭上の美としてのそつぼう、めつぼう……………百頁
 すきを窺ひつかみつけばの句に於いて特に注目すべき……………百頁
 音韻學上の重大なる點……………百二頁
 づでんどうとたんぼらぼと……………百三頁
 えいや運の造語に於ける、近松の筆才……………百四頁
 すいちやえんちや……………百六頁

大夫に對して丁寧な、亭主の語氣……………百八頁
 急忙の状を示す近松の巧手……………百九頁
 難語、つかうどなり……………百十一頁
 刻みことば……………百十三頁
 刻みことば……………百十四頁
 動詞の錯綜……………百十五頁
 名句、ほんにさうぢや……………百十六頁
 うれしや邊の名句……………百十六頁
 遠まはしに深い趣味……………百十七頁
 元祿遊女の權力……………百十七頁
 女氣の寫し方……………百十八頁
 小女郎の實意の極致を寫した、近松の才筆……………百二十二頁
 九右衛門を示す大袈裟な句調……………百二十三頁

名句、ゆるぎこみ……………百二十五頁

遊女に縁の有る地名……………百二十六頁

多忙を巧に示した近松の巧手……………百二十九頁

命令の仰山なのを示した近松の巧手……………百三十頁

豪奢の状を活動させた、近松の筆才……………百三十一頁

は○ッ○ち○く○と鉢坊主と……………百三十四頁

是○生○滅○法○の語に於ける、近松の無責任……………百三十六頁

云○ッ○ば……………百三十七頁

奈良茶粥……………百三十九頁

蓄積の諸法……………百四十二頁

近松の想像の豊富……………百四十四頁

名句、われより下……………百四十七頁

小女郎の心の紛糾を寫した、近松の巧手……………百五十一頁

五音の性質……………百五十二頁

近松の造語は造語そのものが直ちにまづ樂音と調和し、同化した……………百五十四頁

重要なる語、くりあゆみ……………百五十五頁

讀者と作中の人物との間に立つ作者……………百五十六頁

名句、くださんなえ……………百五十九頁

御敵……………百六十二頁

九右衛門たる賊に對しての近松たる作者の同情……………百六十五頁

名句、出るもいかい……………百六十六頁

毛剃の大膽を示す句、うごきもせず……………百六十八頁

毛剃の沈勇を寫した、近松の非凡……………百六十九頁

毛剃の威嚴……………百七十頁

名句、ひッ添ふて……………百七十一頁

迫った語氣を示すための續けざまの云ひ方……………百七十一頁

九右衛門の巧辯、および智略……………百七十四頁

近松の筆の魔力……………百七十五頁

名句、駕籠に乗る云々……………百七十七頁

情が理を盲にしたことの叙事……………百七十七頁

男を思ふ女の情、その痛切な叙説……………百八十一頁

せくことは無いの名句……………百八十二頁

ふところ、及び汗、共に熱情の表明……………百八十三頁

人物としての毛剃……………百八十六頁

毛剃の機敏……………百八十七頁

間投詞たるな……………百八十八頁

毛剃の豪宕……………百八十九頁

田舎唄おんらが……………百八十九頁

てらうちの小歴史……………百九十一頁

でんぐりの發達沿革……………百九十二頁

小唄「栗の木村」……………百九十二頁

近松の作としての拙句……………百九十五頁

ぞいがみ……………百九十八頁

中 の 卷

近松の無頓着……………百九十九頁

杜鵑の聲……………二百二頁

わどりよ……………二百四頁

きんか……………二百六頁

名句、せいてこれ申し……………二百十一頁

仕合はせの古義……………二百十三頁

形容材料としての金どらみ……………二百十四頁

修飾としてののはつと……………二百十五頁

親の心の描寫……………二百十七頁

いとぼしや……………二百十八頁

ことわりの古義……………二百十八頁

名句、なみだぐめば……………二百二十頁

極端を錯綜させた近松の巧手……………二百二十一頁

のけましたい……………二百二十二頁

名句、茫然として……………二百二十二頁

うろたへた様の描寫……………二百二十四頁

咄嗟の描寫、かっつけ登る……………二百二十五頁

毛剃をうとむ惣七の状態……………二百二十六頁

名句、おゝいかに……………二百二十七頁

狼狽の巧描寫……………二百二十八頁

下の巻

毛剃の大膽の表現……………二百二十九頁

偉大を現すものとして、のしあがるの語……………二百二十九頁

奮闘の状況の描寫において近松は馬琴に及ばぬ……………二百三十一頁

近松が不當に用ゐたあこがれの語……………二百三十四頁

名句、壁のくづれ……………二百三十七頁

名句、不愍さに……………二百四十三頁

破題の拙……………二百四十四頁

ゆくへ、肩背などの語の無法の使用……………二百四十六頁

意味の衝突自殺……………二百四十七頁

小女郎の情の深さを示したかこのうちへの句……………二百五十九頁

名句、この手が自由に……………二百六十三頁

傾城の婦人氣質を示すものとしての吹ささすり、撫で
 さすりなどの句……………二百六十五頁

拙句、この世をあの世へ……………二百六十六頁

たべ、のうの濫用……………二百六十九頁

明治三十五年十一月十五日印刷
 全 三十五年十一月廿一日發行



著 作 者 山 田 美 妙
東京市日本橋區通一丁目拾七番地

發 行 者 兼 印 刷 所 青 木 恒 三 郎
大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷

發 行 所 青 木 嵩 山 堂
大阪市東區心齋橋筋博勞町角

發 行 所 青 木 嵩 山 堂
東京市日本橋區通一丁目角

賣 捌 所 青 木 嵩 山 堂 支 店
伊勢四日市市登町

